なぜ英語が話せないの

〈1〉

わが国の英語教育ほど実用性を欠いた学問も珍しい。「読み」「書き」に偏り「会話」軽視の傾向は、旧態依然のままで、その実態はテレビCMでも「何年やっても、モノにならんのは英語やな」――と皮肉られるほど。国際化の波が身近に押し寄せている現在、英語教育のあり方を矯正すべきだとの声は年々、高まっている。九州では、長崎、大分県下の公立高校のように入試にヒヤリングを導入した県もあるが、大学入試は大半が相変わらずの会話無視。英語は、入試や入社試験での単なる〝記憶テストの道具〟と化している。そこで、十七日から三日間、久留米市で開かれた「特別英語講習会」に出席した英語教育の第一人者、松本道弘氏と「百万人の英語」でおなじみの英国人作家アラン・ブース氏、田中睦・明善高校教諭に、英語教育が抱える諸問題、現状打開への方策などを話し合ってもらった。「なぜ英語が話せないの」シリーズ（毎週木曜日に掲載）では〝日の丸英語〟の実態と問題点を洗い出し、英語教育改革への糸口を探る。



松本　道弘氏

入試にヒヤリングを

――中学、高校、大学と英語学習に多くの時間を費やすわりに「英会話は全くダメ」という日本人が目立つわけですが、まず、その原因、背景といったものから伺いましょう。

松本　最大のガンは入試英語ですよ。入試にヒヤリングを出す学校は外語大など一部。「読み」「書き」ばかりが重視されて「聞く」「話す」の実用面が欠落すれば、英会話能力のない生徒や学生しか育たないのは当然です。

ブース　日本人は「英語」と「英会話」を別のものと考えている。英語は、アカデミックなもので、入試や入社試験用に猛勉強してきた人でも、いざ外国人と話すとなると、ほとんど通じない。

松本　文部省や各大学は共通一次試験にヒヤリングを即時出題するぐらいの英断をせひ、やってほしい。幸い、九州では長崎県が二十年ほど前から、大分県も昭和四十一年から公立高校の入試にヒヤリングを導入しており、英語教育改革への一石を、九州から投じてもらいたいですね。

ブース　日本人は「英語」と「英会話」を別のものと考えている。英語は、アカデミックなもので、入試や入社試験用に猛勉強する。英会話はやってもテストへの利益がなく、ひと握りの会話に興味のある学生か、職業上、必要に迫られた会社員らしかやらない。つまり入試英語こそが学生たちの英語への情熱をそいでいる。空白の原因、背景といったものから伺いましょう。

松本　最大のガンは入試英語ですよ。入試にヒヤリングを出す学校は外語大など一部。「読み」「書き」ばかりが重視されて「聞く」「話す」の実用面が欠落すれば、英会話能力のない生徒や学生しか育たないのは当然です

なぜ英語が話せないの

<2>

エリートも幼児並み
実用会話を軽く見るな

世界の政治、経済、軍事のニュースが集中するワシントン。この国際舞台で日夜、ビッグニュースを追う日本の新聞、テレビの記者は五十人近くにものぼる。わが国の海外特派員は、三十七カ国に合計約二百三十人が派遣されており、五分の一弱が米国の首都に駐在している計算だ（日本新聞協会調べ）。

コレスポンデント（特派員）と呼ばれる彼らは、ホワイトハウス、国務省、ペンタゴン（国防総省）などの記者会見に出席。記事を書いて本社に打電する。レーガン大統領らの新政策の説明を瞬時に理解して、手際よくニュースにまとめる。「さすが特派員」と、言いたいが、実情はちょっと違う。

大ざっぱに言って、記者会見の内容を九割以上理解できるのは一人か二人、〝例外組〟である。大抵は六割前後の語学力しかない。中には二、三割しか意味がわからず「米国人と簡単な会話ができない」記者もいる。取材が乏しく、インタビューも出来ない」記者（特派員）が尋ねる〝逆転現象〟も珍しくない。

特派員がこの状態だから、国内にいる記者は想像がつこうというもの。十五年ほど前、長崎港で停泊中のパナマ船でガスが数回にわたって爆発、乗組員六人が死傷した。さっそく事件記者が取材したが、だれ一人英語で「ガス爆発は何度起きたのか」と質問できない。仕方なく長老格の記者が、にぎったこぶしをパッと開きながら「ポン」と擬音を出した。船長は首を横に振った。そこで今度は「ポン、ポン」と二度。そして「ポン、ポン、ポン」と、繰り返し、相手は「そうだ」と答えた。翌朝の紙面には「ガス爆発は三度起こり……」とともなげに掲載された。記者たちは東大、九大、早稲田など有名大学卒だったが、まるで歯が立たなかった。

わが国では、中学生の九四・三㌫が高校に、高校生の三六・九㌫が大学に進学する。そして、六年間あるいは十年と英語を勉強した結果が、このありさまである。

紙の単版を真っ先に買いに出掛けるのは、いつも日本人記者である。

特派員の年齢は、脂の乗り切った三十代、四十代。いわゆる〝英会話無縁時代〟に属する。文法には強くても「ミサイル」が「ミスル」、「メトロポリタン」が「メットポリタン」に聞こえる異国の〝奇妙な発音〟に遭遇すると、自信喪失に陥る。その点、現地の小、中学校に通う彼らの子供は英語の上達が早い。テレビ番組を見てクスクス笑う息子に「何がおかしいのか」と意味をつかめない父親

APやUPI電を辞書を引いて翻訳し、自分の会見記事風に仕上げる向きも少なくない。「何か重大ニュースを落としてはいないか」と夜十一時ごろ、人通りもない犯罪都市で、翌日配達用の「ワシントンポスト」



英語教育の在り方に警鐘を鳴らしたアラン・ブース氏の「日の丸英語に物申す」

十二年間、日本に滞在「百万人の英語」でおなじみの英国人作家アラン・ブース氏㌶は、こうした現状を憂え、実用会話軽視の英語教育の在り方に警鐘を鳴らすため「日の丸英語に物申す」を書いた。そのブースさんが、こう言っている。「日本人はユネスコ主催の数学テストでは世界一ですが、英会話に関する限り、失礼ながらエリートと言われる人も幼児並みで勉強した結果が、このありさまである。

なぜ英語が話せないの

<3>

英会話上達への障害多く

根強い翻訳主体の伝統

昭和四十九年四月、自民党政務調査会に「外国語教育の現状と改革の方向」と題する試案が、平泉渉元参議院議員から出された。新聞、英語専門誌が取り上げ、米国の「ニューズ・ウィーク」誌も二度にわたって掲載。国内外で大きな反響を呼んだ。

「わが国における外国語教育は、中等教育、高等教育が国民のごく限られた部分に対するものでしかなかった当時から、すでにその効率の低さが指摘されてきた。（中略）国際化の進む現状を考え、また、全国民の子弟と教師とが、外国語の学習と教育に払っている巨大な、しかし報われない努力をみるとき、この問題は今や文教政策上の最も重要な課題の一つになっていると言わねばならない」

平泉氏は、中学や高校で毎週教時間を英語教育に費やしているのに「国民の大部分は、卒業の翌日から学習した英語がほとんど読めず、書けず、わからないのが、いつわらざる実情である」と強調。学習効果が上がらない理由は①受験英語の程度が高過ぎる②不効率な教授法③学習意欲のなさ――と分析している。

入試英語や教師の資の低さに限らず、実用会話が上達しない原因に、日本における外国語教育の伝統や〝恥の文化〟を挙げる向きもある。

渡部昇一・上智大学教授は、わが国の外国語教育の伝統は「聖徳太子のやり方が、その後の日本人のやり方を大きく決定した」と解説する。聖徳太子が来朝した高麗人・恵慈から仏教を学んだのは、推古天皇の三年（五九五年）。仏教学といっても、漢訳仏典を読む高度な外国語研究で、日本人の外国語に対する関心は「原典を正確に読む」ことに向けられた。（太子が百済＝くだら＝やシナの言葉をどのように話せたかという記述はない）。この傾向は、江戸時代の鎖国政策で外国との交流がほぼ全面的に途絶したことでさらに強まり、会話より文献の翻訳、研究が主流になった、と論じている。

五高（熊本大学の前身）で夏目金之助（漱石）。実用会話では、米国は、英語の先生は大半が米国の大学出で、会話はペラペラ。ところが、学生たちは「訳し方があいまい」と批判し「アメリカ帰りは〝ダメ〟」の風評が広がった。そこへ日本の大学を出た若い教師がやってきて、授業で誤訳した学生に「中学からやり直すんだな」と文句を言う。怒った学生がクラス総がかりで質問攻めにしたが、歯が立たず、敬服して勉強するようになった。この教師が若き日の夏目金之助組より数段劣りながら、文法、翻訳力重視の風土の中で〝英雄視〟された。

英語教育の第一人者、松本道弘氏＝元NHKテレビ英会話講師＝と、英国人作家アラン・プース氏は「恥すかしがり屋の日本人は、完全な英語しか話そうとしない。外国語はうまく話せなくて当たり前というくらいの〝あつかましさ〟が大切」と指摘する。実用英語上達には、大きな障害があまりにも多い。



「入試英語が実用会話への意欲をそいでいる」と語る松本道弘氏㊧とアラン・プース氏

なぜ英語が話せないの

〈4〉

求められる質の向上
能力に欠ける教師たち

わが国最初の〝英会話教師〟は、米国人ラナルド・マクドナルドである。父はハドソン湾商会の営業支配人、母はインディアンの酋長の娘。白人の恋人がいたが「チヌーク族の血が混じっている」と拒否されて失恋。落胆のなか「チヌーク族の祖先は日本からきた」という伝説を信じて、ルーツ捜しに旅立った。一八四八年、捕鯨船で北海道の利尻島に到着。スパイと間違われて長崎に送られ、七カ月の〝幽閉期間〟に日本人にナマの英語を教えた。五年後の一八五三年に浦賀に来たペリーの首席通詞を務めた森山多吉郎が教え子の一人であることはあまり知られていない。

「洋書の正確な翻訳」が主体だった当時、森山が短期間に英会話を習得、ペリーから「あなたの英語はうまい」とほめられた事実は、特筆に値する。

マクドナルドの訪日から百三十余年を経た昭和五十四年。米国から一人の美人英語教師が福岡市へやって来た。ボニー・ウイルムズさん。肩書は、文部省派遣の「英語指導主事助手」。福岡県下の中、高校で英語授業を助け、生きた英語教育に一役買うのが任務である。文部省は、九年前からこの制度を採用。実用英語からかけはなれた英語の進歩を阻む要因は多い。た

わが国の英語教育に〝活〟を入れようと、欧米から年間約七十人の助手を招き、全国に派遣している。

翌年、帰国したウイルムズさんの〝体験記〟は、驚きと失意が交錯したものだった。

「県下の中、高校の英語の先生を対象に毎週、約二十人ずつを研修会で指導したのですが、私の話すことが教師たちには、ほとんど理解できず、彼らの言うこと（英会話）も私には意味がよくわかりませんでした」

県教委によると、県下の英語の教師数は中学校約千人、公立高校六百六十六人。先生の中には、英検一級合格者や実用英会話の上手な人もいるが、大抵は「英語と英会話は別と考え、英会話に努力を払っていない。外国語の教師が、教える言語を話せないなんて、海外ではあり得ないこと」と、ウイルムズさんは強いショックを受けた。

〝役に立たない英語教育〟が叫ばれて久しい。これまで指摘したように、読み、書きに偏った入試英語、会話力不足の教師、恥の文化構造……と実用英語の進歩を阻む要因は多い。たくさんの〝悪習〟の中で、ウイルムズさんは「先生たちの質の向上、意識改革がなによりも急務」と強調した。次回から英語教師たちの実態をレポートする。

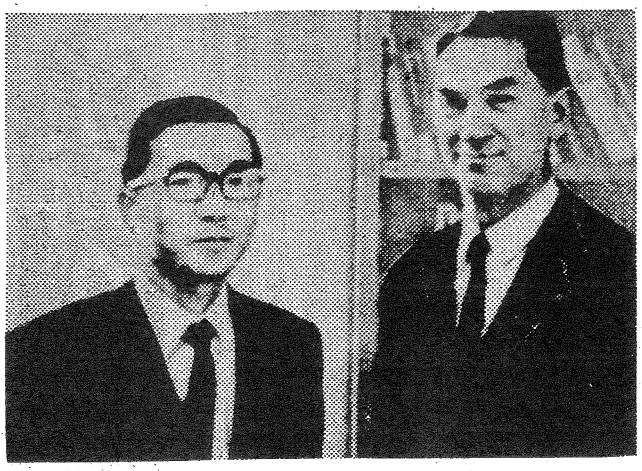


「実用会話教育の充実が必要」と語るウイルムズさん

なぜ英語が話せないの

<5>

「日本は世界中で閣僚級を含めて最も英語の通じない国。開国百年などと言っているが、いまだに語学鎖国である」駐日米大使は、帰国に際し、こう率直な意見を述べた。国際化の時代を迎えながら、会談で簡単な会話さえ通訳なしではできない首脳たち。ライシャワー大使が「ひとつだけ心残りは、英語教育面で何一つ改善できなかったこと」と嘆いたのもうなずける。



英語教育の在り方に警鐘を鳴らすライシャワー元駐日米大使㊧と福田昇八熊本大教授

話せる教師一割以下

ようやく事態改善の動き

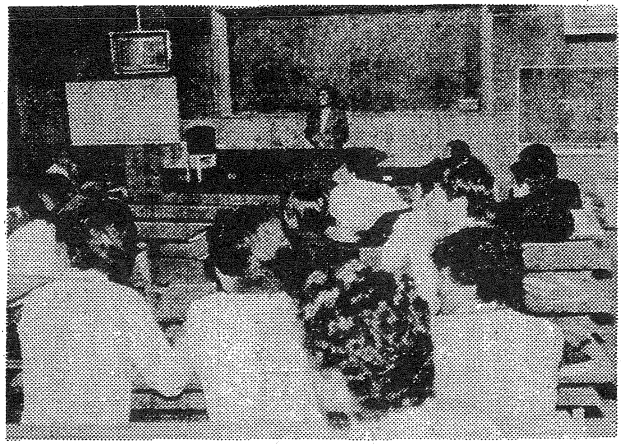
この〝語学鎖国〟をもたらした主因が、英会話能力に欠ける教師に在ることは、文部省派遣の「英語指導主事助手」としての県下の中、高校の英語教師を指導したボニー・ウイルムズさん（米国）ら多くの外国人が指摘している。

ウイルムズさんは毎週、約二十人ずつの中、高校教師を集めて研修会を開いたが「これが英語の先生かと思うほど、お互いの意志が通じない」。Hedied (of) stomachcancer（彼は胃ガンで死んだ）やDo you believe (in) God?（神を信じますか）など、カッコ内に前置詞を入れガンるような問題は得意だが会話が長く続けられない。「表現力のなさもさることながら、簡単な日常会話の決まり文句さえ言えない先生もいる」。「ザット・イズ・ア・ペンと大声を出して習った英語は一体、なんだったのか」と、頭を抱える教師もいた。

実用英語に関する限り、大学の先生も実態はほぼ同じ。ミシガン大学に留学した〝教授のたまご〟（助手）が、ねじ回しを買いに行き「ドライバーを」と、注文すると「うちのドライバー（運転手）なら、そこにいる」という返事。仕方なく絵を描くと「なんだスクリュードライバー（ねじ回し）じゃないか」と、店主は大笑い。それだけではない。アメリカ人が日常使う簡単な単語「フラッシュライト」（懐中電灯）「サムタッグ」（押しピン）「デイターゼント」（洗剤）も何を言ってよいやらわからない。その助手は、すっかり〝自信喪失症〟に陥ってしまった。

福田昇八・熊本大学教授は「日本人が英語を話せない背景には、大学入試や時間数の不足などが挙げられるが、真の原因は教師自身が英語を話せないことにある。全国的にみて英語を話せる英語教師は二割に達せず、逆にいえば八割以上が厳密には英語教師としての資格に欠ける」と指摘。問題の根は、極めて深い。

英語教師に自己啓発を求める声が高まるなか、筑後地方では「事態の改善」を目指す模索が始まっている。若手英語教師八人で二年前結成した「久留米英語講習会」もその一つ。会は小規模ながら、中央から著名な英語講師を呼んで定期講習会を開くなど〝役に立つ英語教育への脱皮〟へ向け奮闘している。次回はその活動ぶりを紹介する。



「英会話を導入した授業は役立つ」と生徒に好評の久留米大学付設高校の授業風景

なぜ英語が話せないの

<6>

日本語禁止の三泊四日

若手教師ら有名講師囲み

「中、高校の英語教師で英語が話せるのは、厳密にいえば二割以下」（福田昇八・熊本大学教授）との指摘がある。英会話ができない英語の先生など、外国の常識ではあり得ないこと。英語教師に自己啓発を求める声が高まっても不思議ではない。

役に立つ英語教育への脱皮は、英語教師に課された最大の責務。「読み」「書き」に偏り、会話軽視の姿勢を反省して、生きた英語を学ぶ先生たちが増えている。

筑後地方の若手英語教師八人で一昨年十二月に結成した「久留米英語講習会」（代表・真崎良幸久留米大付設高校教諭）もその一つ。「英語教育を改善するには、教師がます、努力し、研修会などで質の向上を図るのが不可欠」と、勉強会を開いたのがきっかけだった。会は小規模ながら、年に二回開く講習会には、英語教育の第一人者、松本道弘氏（注）や「百万人の英語」でおなじみの英国人作家アラン・ブース氏（注）もら内外の有名講師が顔を並べる豪華版。期間中（三泊四日）は「日本語は一切禁止」の徹底研修で、毎回、三、四十人の中、高校教諭が参加している。

講習会では、先生たちが直面する悩みがいつも噴出する。「会話を教えるには、発音に自信がない」「限られた授業時間の中では、文法中心にならざるを得ない」「教室で英語を話したら、生徒がシラケた」など、どの先生も現在の英語教育で十分――とは決して考えていない。事態を改善しようにも、問題点や課題があまりに大きい、との認識である。

難問は、確かに山積している。だが「とにかく一歩前進しなければ……」と真崎先生。久留米大付設高校の場合、会話不足を補うため、授業内容を〝入試英語〟と〝通じる英語〟に分け、双方を並行して進める。その時間比は、同付設中学で約半半。高三になると、四対一ぐらいに会話の比率は減るが、LL（語学訓練のための機器）による学習が盛ん。県下随一の進学校（今春、東大合格者は四十六人、二位の修猷館十一人）ながら、入試英語一辺倒では決していない。

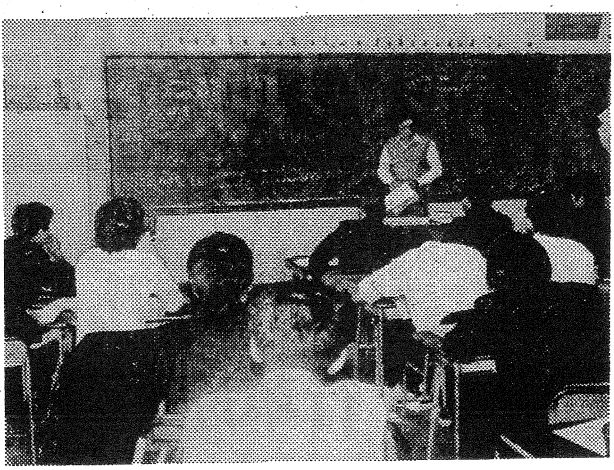
〝通じる英語〟授業では、NHKのテレビ英会話、講習会の収録会話……と多彩な教材が特色。長髪問題や時事トピックスについて、教師と生徒が英語で質疑応答するケースもある。三年D組の生徒数人に「受験英語の妨げにならないか」と聞くと「将来、役に立ちますから」と答えた。

会話に力を入れる同付設中学では、英検二、三級取得を目指す生徒が多い。「要するに生徒たちを会話で刺激、単なる暗記単語を〝生きた単語〟に変えてやることが大切」。

真崎先生は「英会話は苦手」と言う。その証拠に現在も週に一回、福岡市に出かけては文部省派遣の「英語指導主事助手」（米国人）の研修会に参加している。

なぜ英語が話せないの

<7>



「教室では生徒が少しでも英語を口に出すよう心掛けている」と語る田中教諭

大切な教師の工夫

授業では少しでも英会話重視を

幼児や小学生の英語学習は、まず声を出すことから始まる。先生の唇の動きを注意深くながめ、懸命にまねる。内容は、簡単な日常会話。前置詞も関係代名詞も知らないが、子供たちの表情はいきいきしている。

中学では「これが同じ英語教育か」と疑いたくなるほど、事情は一変する。教室で発音を練習するのは、せいぜい一年生まで。文法や翻訳中心になり、生徒たちを〝実用とかけ離れた英語〟に引き込む。さらに高校、大学になると、英語は〝音〟とは無縁の存在。英会話に興味をもつ学生らが、わずかに〝生きた英語〟を勉強しているにすぎない。

現場の英語教師なら、痛いほど感じている英語教育の欠陥である。中学から大学まで十年間も英語を学んだ者が、卒業後にアア・ペンだけ」と後悔の声が上がるほど、事態は深刻なのだ。

田中睦・明善高校教諭(三)は「実際の授業で現状を打開するのは至難のワザ」と嘆く。田中先生は、大学時代に米国に一年半滞在。英検一級合格。英会話能力では、県下の高校英語教師の中でもトップクラス。久留米英語講習会会員でもある。しかし「英語教育には多くのジレンマがあり、悩みは尽きない」。

第一に、教師には定められた時間内に定められた範囲を教える義務がある。明善高校の場合、英語の授業は週に六時間。内訳はリーダー四時間、文法二時間。分量がかなりあるだけに「教師が授業中に英会話を教えたり、導入した県もあるが、福岡県下の高校、大学は相変わらずの「読み」「書き」偏重の入試形式。これに英語教師の会話能力の低さが、生徒たちに面白みのない英語の授業をもたらしている。

「中学時代に英語が好きだった生徒が、高校で英語への興味を失うのが一番こわい」と田中先生は言う。英語の嫌いな生徒が増えないためにも教師は局面打開の工夫が必要。あれこれ模索している教師も少なくない。

田中先生は、授業中、単語や英文をできるだけ多く生徒たちに読ませる。発音が悪ければ、何度も言い直させる。簡単なやりとりは英会話でやることも。英作文の時間は、できるだけ生徒の発想を尊重してやる。「外国語を話す喜びを忘れかけている生徒に少しでもその機会を与えたい。ただ、授業に英会話的な要素を導入するのは一年生からでないと生徒が違和感をもってうまくいかない。何事も最初が大切です」――。田中先生が経験から得た教訓である。

制約をうける」。ましてや週三時間しかない英語の時間が、学校行事などで週一時間に減ることもある中学校では「生きた英語を教えることは不可能に近い」(野田秀子・荒木中教諭)。

もう一つは入試英語の障害。佐賀、長崎、大分県下の公立高校のように入試にヒアリングを

なぜ英語が話せないの

<8>

学力急落の批判も

大原中からの報告 英語授業一時間減の波紋

「ゆとりある教育」を目指した」との批判も。授業一時間減の功罪が、あれこれ指摘されるなか「入試は大丈夫か」という父兄の不安も増幅している。

おまけに教師一人が受け持つ生徒数は、授業の短縮に伴い、逆に急増。生徒個人の実力把握やきめの細かい指導は、いっそう困難になっている。

例えば、今村先生の場合、かつて英語の授業が週五時間あった時期には、四クラス百六十人を担当したのが、週三時間になった現在は六クラス二百七十人に。「知識偏重を改め、情操教育面を重視する方針は理解できるものの、生徒一人一人との接触時間が減り、十分満足のいく授業とは言えない」。

短縮により、英語の教科書は十四課ぐらいあった内容が十二課程度に少なくなり、教える文法事項も精選して軽減。二年生で教えていた現在完了形は三年の授業に回された。

時間削減をめぐる波紋は大きかった。英語教師は、各地で反対署名運動などを実施。中学生を受け入れる高校教師からは「新入生の英語の学力が急落した」と嘆く。

小郡市・大原中学でも四人の英語の先生たちの悩みは尽きない。

永松 睦子 先生は、生徒から「教科書だけでなく、英会話や外国のいろいろな話も聞きたい」と、言われて考え込んだ。

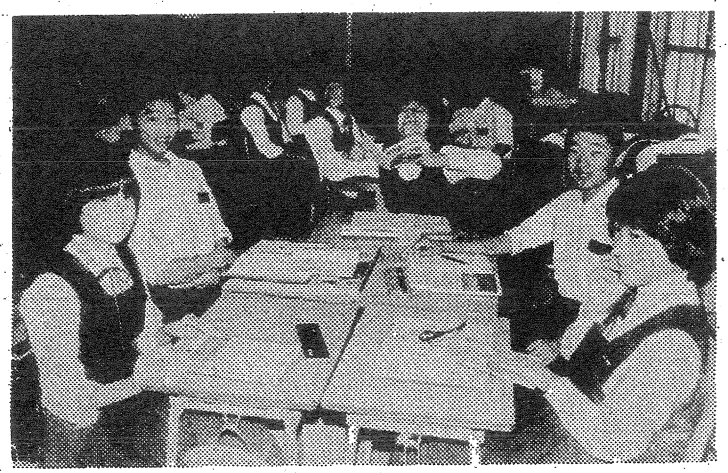
今村とも子先生は「入試を控えた三年生の授業は事実上、教師も生徒も〝話す英語〟をあきらめた格好」と嘆く。

教育現場は、まさに難問山積だが、永松先生らがサジを投げている様子はない。それどころか「少しでも現状打破を」と、驚くほど意欲的である。

英語は、根気よい継続性が要求される学問。なのに授業が一時間減ったうえ、学校の行事と重なって、英語授業が十日近くもないクラスが出る。生きた英語どころか、生徒は前の授業で習ったことを忘れ、復習に多くの時間を取られるのが実情だ。

「中、高校英語教師の八割は厳密に言えば英語が話せない」（福田昇八・熊本大学教授）と指摘されるなかで、今村先生は福岡市へ毎週出かけ、西南大学のアメリカ人留学生から英会話を習った経験がある。また、英語教師を対象にした県教委の英語研修会にも出席している。テレビやラジオで会話を猛勉中の永松先生は「だれか適当な米英人が見つかれば、家庭教師を依頼したい」と真剣に考えている。

永松先生らは、限られた授業時間の中で、電話のかけ方や簡単な日常会話の暗記などを活発に試みる。生徒には英語検定試験の受験を勧めるが「三、四級の英語の問題は、学校でのペーパーテストに近い」と残念がっている。



楽しい英語の授業にも入試英語の影響が…（大原中2年8組で）

なぜ英語が話せないの

<9>

当面は受験に照準

役に立たない入試英語

三井郡内の主婦(四〇)は今、英語の家庭教師探しに奔走している。高二の息子A君が、英語の成績が悪く、このままでは一流大学への進学がおぼつかなくなってきたからだ。A君は数学、国語は学年でもトップクラス。ただ英語だけは五十点前後と芳しくない。「そのうち何とかなる」と思っていたのに、二学期に入っても成績は伸びない。焦りが高じて「家庭教師をぜひ」と泣きついた。

母親は、家庭教師に条件をつけた。「英会話を教える先生はダメ。受験英語と違うんだから」と。A君も「今は入試のコツを教えてくれる人」を望んでいる。

A君も母親も英会話をやった方が将来、社会に出て役立つことは十分知っている。が、当面は受験英語に照準を当てねばならない。「英語の勉強は、どこかが狂っている」と母親は嘆く。

受験英語の弊害は深刻である。その構造は「高校入試」―「大学入試」―「就職試験」と続き、しかも英語のウエートは上学年ほど増大する。芝道雄先生などは「英語を入試から除外すれば、日本人の英語力は飛躍的に向上するかもしれない」とさえ言う。

佐賀、長崎、大分県のように公立高校入試にヒアリングを導入した県もあるが、福岡県は相変わらずの後進県。事態の打開は、各先生の工夫、努力に大きくゆだねられた格好だ。

久留米市・諏訪中学。英語の授業が昨年度から週三時間に減ったあおりで、会話を教える余裕は皆無に近い。生徒の方も週一時間減の授業分を補うため、塾通い組が多くなった。

「わが校の場合、英語塾へ通う生徒は三年生で六二%。うち六割強は週に三回も塾で英語を学ぶ。週に四時間の英語授業があった一昨年度までに比べ、塾への依存度が増えている」と英語教師たちは説明する。

芝先生は「限られた時間の中で、せめて簡単な会話、さっと口に出てくる英語だけは学ばせたい」と言う。英語が苦手な生徒でも、文法抜きのビートルズの歌やロックンロールは驚くほどうまい。教科書のたどたどしい読み方とは別人のように、発音もきれいだ。

「日常のあいさつの基本文、目的地へ行く道の尋ね方、時間、曜日の表現などは暗記すべき事項。カセットによるヒアリングなども駆使して、生徒たちが英語を嫌いにならないような配慮が大切である」

芝先生には苦い思い出がある。英語が得意だったかつての教え子の一人が、大学(英文科)を卒業後、米国に留学したが、大学での授業内容がさっぱり理解できない。教授は「まず、英語力をつけるのが先」と半年間、外人向けの会話教室入りを勧めた。「受験英語はやっぱり通用しないんでしょうね」と、芝先生は力なく語った。



生きた英語より入試英語に追われる中学生たち

なぜ英語が話せないの

<10>

身につく実用会話

城南中の試み 中間、期末試験にヒアリング

アメリカ人は、カメラの「ニコン」を「ナイコン」と発音する。ラテン語からきたa l i v i は本来「アリビ」が正しいが、米英人は勝手に「アリバイ」と読み、それが一般化した。米国は人種のるつぼ。違った言語を話す異国民の集合国家だけに、間違った発音が横行しても不思議はない。

なのに米英人は、外国人が不正確な発音をすると、容易に理解しない。例えば、オレンジジュースとミルクとコーラしか売っていないソフトドリンクの店で「グラス・オブ・ミルク・プリーズ」と注文しても、ミルクの発音が悪いと、聞き返す。ミルクは米英人にとっても難しい発音の一つ。日本語では「メルク」に近い。かくて発音のできない日本人旅行者は「飲み物が三種類だけの店。ミルクだろうがメルクだろうが、店員は〝類推〟できて当然」とこぼす。発音は日本人が想像する以上に厳しく、重要である。

近藤嘉嘉先生(ママ)と金子進先生(ママ)は同校の四人の英語教諭たちの発音やヒアリング能力を少しでも伸ばそう」と今、ある実験を行っている。

実験とは、五年前から始めたヒアリング・テスト。生徒たちは中間、期末試験の二回、マイクから流れる英語を聴き、回答する。このヒアリング・テストの配点は、百点満点中の十点。生徒たちは入試英語のように、読み、書きばかり勉強するわけにはいかない。

「ヒアリングの問題は、先生がテープに吹き込み、各教室に流す。おもしろいのは文法や英訳などと異なり、零点の生徒がいないこと。平均得点は十点満点で七点にものぼる」（近藤先生）。

ヒアリング・テストについて、生徒の一人は「日常会話や道の尋ね方など実用会話が身につく」と、その効用を指摘する。しかし、昨年度以来、英語の授業時間が週三時間に減った結果、全学年で行われていたこのユニークな試みも、目下、一年生の試験だけに適用――に縮小された。

各中学とも授業時間不足で、会話的な要素は最小限にせざるを得ないのが現状。「ヒアリング・テストも高校入試にヒアリングが登場しない限り、先細りしかねない」。城南中の先生たちは、深刻に悩んでいる。



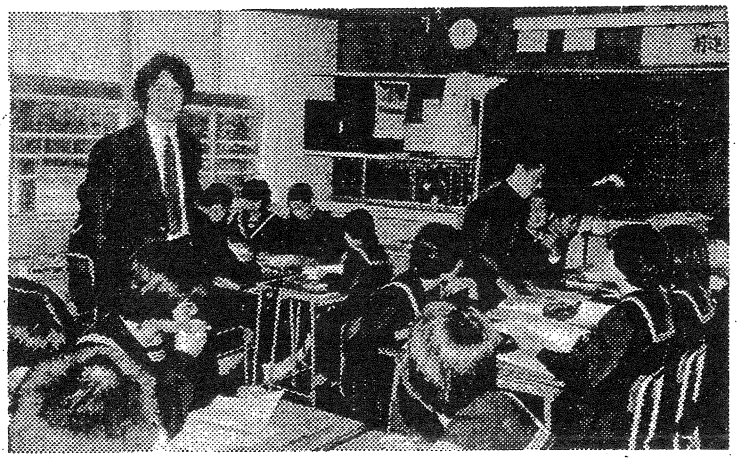
ヒアリング・テストに意欲を燃やす近藤先生と生徒たち

久留米市・城南中学。「生徒の最年長。ともに英会話の必要性が現在ほど重視されない時代に大学を卒業。「自分の苦い経験から、生徒にはできるだけ生きた英語を」と、ほかの先生と話し合ってヒアリング・テストを導入した。

父兄や生徒からは当初、不満も出たが、今では軌道に乗った感じ。近藤先生より三世代近く若い小島悦朗先生(ママ)は、英会話が得意で、全面的に協力。円能寺久美子先生(ママ)も夏休みを利用して東京で十日間の会話指導を受けるなど、意欲的である。

なぜ英語が話せないの

<11>



「楽しい雰囲気で生きた英語を学ばせたい」と語るロング先生＝立石中で

生徒に会話機会を

先生が〝やる気〟もって

日本に住む外国人（外国人登録分）は現在、約百五十九国七十九万五千人。これに旅行者など短期滞在者が年間百五十五万人おり、合計では二百三十万人を超える（法務省調べ）。四十七都道府県で単純割りすれば、各県平均五万人の外国人が動き回っている計算だが、実際には彼らの多くは首都圏や大都市、観光地に偏在。地方都市の生徒たちが外国人と英会話を交わす機会は皆無に近い。

少ない外国人に加え、入試英語の弊害、限られた授業時間、英会話に弱い英語教師……と英会話の学習を阻む難問山積の環境のなか「せめて一度は生徒に生きた英語を学ぶチャンスを与えよう」という中学校が増えている。

小郡市内では最近、宝城、立石、小郡三中学が相次いで文部省派遣の英語指導主事助手ステイーブ・ロングさん(六)＝米国コネチカット州出身＝を招き〝一日英語教師〟を務めてもらった。

福岡県教育庁に在籍するロング先生は、県下の英語教師の指導や中、高校での授業担当が主な任務。赴任以来、一年四カ月間に四十三校を回った。

立石中学（高松政道校長、生徒数二百八十人）では、唯一の英語教師である田中玉喜先生が「一日教師」を三カ月前から依頼して、ようやく実現した。

「生徒全員がロング先生と英語で話す。これは貴重な経験ですし、英会話に興味をもつ生徒も増えるでしょう。わずか一時間の授業とは思えない波及効果が期待できます」

こう話す田中先生は、かつてエジンバラ大学（英国）に留学したベテラン教師。「若い先生には負けられない」と、現在もテレビ、ラジオの英会話講座で猛勉中で、昨年は中学、高校教師を対象にした英語研修会にも出席した。

ロング先生の授業では、生徒たちが用意した多彩な質問をぶつけた。「日本の印象はどうですか」から「恋人はいますか」まで。ロング先生は、その一つ一つにユーモアたっぷりに答え、生徒たちはナマの英会話の楽しさを満喫した。

授業後、ロング先生は「生徒の発音は正確で、はっきりしていた」と感想を語った。一方、生徒の方は「英会話なので緊張したが、ボクたちの英語が意外に通じるので安心した」と満足そう。

田中先生は、授業中できるだけ英語で話すよう心掛けている。入試英語の制約で、全部というわけにはいかないが「せめて英会話に対する興味だけは失わないよう指導したい」。中、高校ではクラブ活動でも英会話でも、担当する先生の影響が大きい。立石中の場合「生徒たちの英会話が素晴らしい」（ロング先生）のは当然――と言えるだろう。

「中、高校英語教師の八割は厳密に言えば英語が話せない」（福田昇八・熊本大学教授）との指摘がある。しかし、県下の中、高校の英語教師を教えるロング先生は「みなさんの英会話力は相当なもの」と太鼓判を押す。先生はもっと自信をもっていいし「なによりもやる気が大切」である。

なぜ英語が話せないの

<12>

〝断続研修〟で集中講義

20人が毎週一回、一年間

「中、高校英語教師の八割は厳密に言えば英語が話せない」（福田昇八・熊本大学教授）との指摘がある。「読み」「書き」「文法」は得意でも、実用会話が苦手の先生たち。問題解決のため、熊本県のように昭和四十五年から四年間をかけて中、高校の英語教師のために「教員集中訓練計画」（略称ITC）を実施した県もある。

福岡県下でも悩みは深刻で、教師たちの質の改善は急務、と言える。事態を重視した県教委は「英会話のできる先生養成」を目指し、目下いくつかのプログラムを用意している。

県教育センター（粕屋郡篠栗町）で毎週金曜日に開かれる「断続研修」もその一つ。筑後、福岡、北九州、筑豊四地区から希望した中、高校の英語教師二十人が一年間、断続的に英会話力の強化、集中講義を受ける。

「断続研修が始まったのは四十七年から。毎年、二十人の定員だから過去、二百二十人の先生が再教育を受けた計算になる。他に〝短期研修〟（四十五年に開始。三日と四日のコースに分かれ、定員は各二十四人。年間に四回開かれ、計百人近い教師が受講）も利用できる」（県教委）

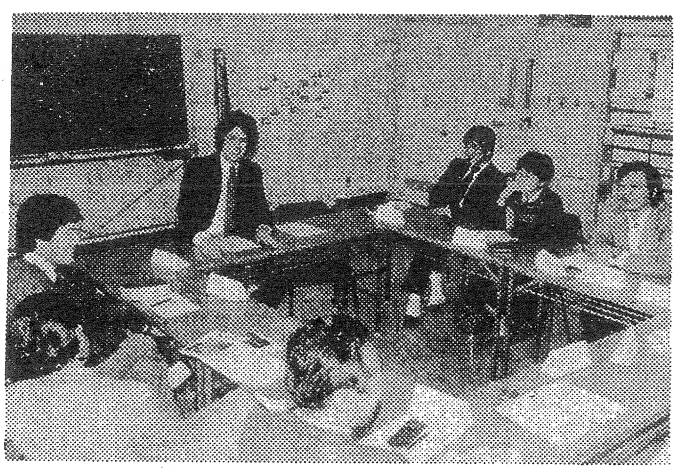
しかし「短期研修」はともかく「断続研修」は一年間の学習だけに、受講する先生は相当の熱意を要する。例えば、筑後地区から現在、受講している中垣貴和子・小郡中教諭（四三）、真崎良幸・久留米大学付設高校教諭（三五）、宮井聡・三池高校教諭（三五）の場合、車で県教育センターに向かうため、早朝起床を余儀なくされ、学校を休む受講日の授業分は他の曜日にこなさなければならない。おまけに教育センターの授業は、午前九時半から午後四時半までビッシリ。持ち帰る宿題も多い。

そのせいか、短期研修は気軽に受講する先生が目立つ半面、断続研修の方は「希望者が少なく、競争率は約一・五倍。応募者の中から地区別のバランスを考慮して二十人を決めている」（県教委）のが実情だ。

英語教師から敬遠されがちな断続研修だが、二十歳代から四十歳までの受講者たちは「厳しい学習だけに効果は大きい」と、口をそろえる。中垣先生は「英会話に自信がなく思い切って受講したが、教室で少しずつ成果が生かせるようになった」と話す。

文部省は、四十七年から英語教師の能力向上など各目的に英、米人による英語指導主事助手制度を採用。県教育センターでは、八代目に当たるスティーブ・ロングさん（三七）＝米国コネチカット州出身＝が断続研修の指導に当たっている。次回は、断続研修での具体的な学習内容を報告する。

◇
◇
◇



外人教師から集中講義を受ける先生たち
（県教育センターで）

なぜ英語が話せないの

<13>

断続研修の特訓

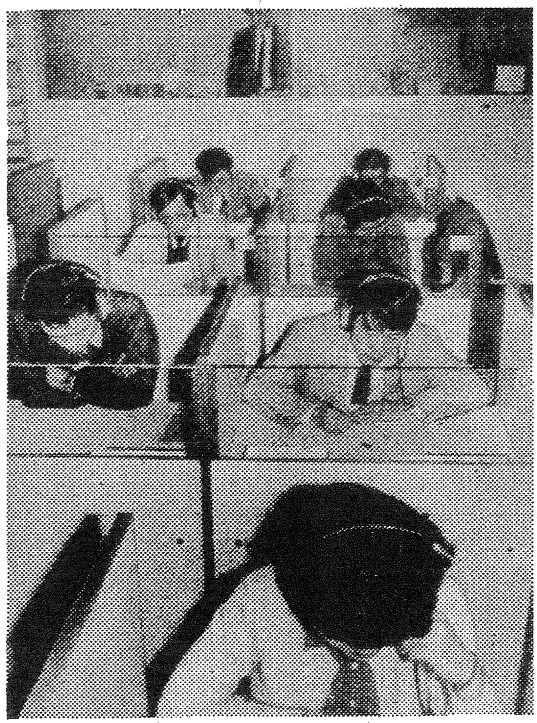
内容に富み大きい効果

「英会話のできる先生」の養成を目指し、毎週金曜日に県教育センター（粕屋郡篠栗町）で開かれている「断続研修」の内容は、極めてバラエティーに富んでいる。

まず、午前九時半から約三十分間は、英語スピーチの時間。先生たちは話題を自由に選んで各人が二、三分間しゃべらされる。表現に問題があれば、英語指導主事助手のスティーブ・ロングさん(三七)＝米国コネチカット州＝が注意する。日本人が最も苦手とする「人前で英語を話す」自信を植えつける。

次の十分間は、ゲームを通じた発声器官（舌、口唇など）の訓練。英語の発想、その奥にある風俗や習慣についても併せて学ぶ。このあと半時間、LLを利用しての書き取り実習があり、日本人にとって聴き取り困難な弱音、連音などの聴取訓練がある。

ここで五分間の休憩後、再びLLでのヒアリング・スピーキング練習が三十分間。会話の役柄を決めて話す。さらに「発音練習」が始まり、ロング先生が個別に発音を矯正。三十分間、みっちりしごかれる。そして午前中、最後の講義「現代英語の表現に関する理解を深める」コーナーへと続く。



ヒアリングの特訓を受ける先生たち
（県教育センターで）

午後、まず、先生たちを待ち受けているのが「会話交流の時間」（三十分間）。NHKラジオ英会話教材を使って、実践に当たっては「感情をこめ、表情豊かな実演」が要求される。例えば、病院での会話では、腹痛の患者（教諭）が実際に腰を押さえながら医師（同）の問診を受ける。この演習で、先生たちは英語のリズムをつかむ。続いて対話、インタビュー、ニュースなど雑多な英語を聴き取る「理解力の時間」。そのあと、読み、書き訓練のための「リーディング・ライティングの時間」が各三十分ずつ。このあと、四十分間は自分の考えを話すスピーチと、英語の指導法の実習。最後に英語でその日の感想などを話して一日が終わる。

この断続研修は、一年間（三十五日間）行われ、北九州、福岡、筑後、筑豊四地区の英語教師二十人はビッシリ詰まった集中講義に付き合わされる。余程の熱意がないと途中で脱落しそうだが、真崎良幸・久留米大学付設高校教諭(三四)や宮井聡・三池高校教諭(三七)らは「厳しい勉強だけに、効果は大きい」と、口をそろえる。

文部省が英、米人による英語指導主事助手制度を始めて十年。県下では既に二百二十人の先生が断続研修を受けたが、その数は県下の英語教師数（中学校千人、公立高校六百七十人）に比べ、まだ一三㌫余りに過ぎない。

中垣貴和子・小郡中教諭(三三)は「暗記する文例、宿題に加えた実践会話などで、最初は午前中だけでも音を上げそうだった」と語る。が、午後の部はさらに厳しい。

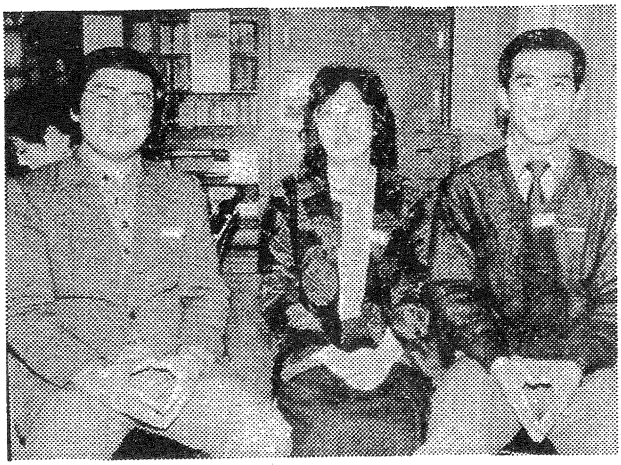
なぜ英語が話せないの

<14>

話せる先生へ脱皮

断続研修 驚くばかりの熱心さ

「断続研修」の効果は大きい、と語る左から真崎、中垣、宮井先生



「英会話のできる英語教師の養成」を目指した県教委の「断続研修」は、毎週金曜日に県教育センター（粕屋郡篠栗町）で開かれる。ここで現在、筑後、福岡、北九州、筑豊地区から集まった中、高校の英語教師二十人が一年間（実質三十五日間）に及ぶ〝特訓〟を受けている。

「年齢は、二十歳代から四十歳代まで。先生たちの受講目的も〝成果を教育現場で生かしたい〟や〝英語教師として十分な英会話力を身につけたい〟など、さまざま。共通点は驚くばかりの熱心さです」と、新原・同センター研究主事は話す。

中垣貴和子・小郡中教諭（三三）の場合は「生徒に教えるだけの英会話力がなかった」のが受講の理由だった。「何を今さら」とも考えたが「教師として怠慢は許されない」と思い直し、申し込んだ。それから英語指導主事助手のスティーブ・ロングさん（三七）＝米国コネチカット州出身＝や他の先生の前で、冷や汗をかきながら英会話をやらされる毎日。二分間のスピーチが続けられず、悩んだことも一度や二度ではない。

「でも、意味が十分理解できないヒアリング実習や会話、文例暗記をこなすうち、少しずつ自信がつき、教室では、不足気味の会話をできるだけ補うよう努力していきます」

教育センターの下垣内辰雄研究主事は、こうした先生たちの悪戦苦闘ぶりを「貴重な体験」と評している。自らを〝苦境〟に追い込まなくても、受験英語を教えるにはコト欠かない先生たちが、会話をこなそうと必死に学習する。厳しい集中講義の中から、こつこつ実力を向上させる。〝貴重な体験〟をする先生たちの姿には、英語教師としての責任感や義務意識の強さがにじみ出ている。

ロング先生は「中垣先生はじめ、受講者の英語は大変うまい」と言う。英検でいえば、一級クラスの教諭もおり、平均では一級と二級の中間レベルの教諭が多い。日常会話はもちろん、相当まとまった内容が話せる水準である。

ただ、問題は「断続研修」の受講希望者は、大半が英会話にある程度、自信のある先生に限られること。会話が苦手の先生たちは敬遠しがちで、中には「英語教育と英会話は別」と言ってはばからない教師もいる。

十年前、断続研修が始まって以来、受講者は県下で二百二十人にのぼったが、英語教師全体からすれば一三%余に過ぎない。

「中、高校英語教師の八割は厳密に言えば英語が話せない」（福田昇八・熊本大学教授）と指摘される実情のなか、教師の質の向上を求める声は強い。真崎良幸・久留米大学付設高校教諭（三三）や宮井聡・三池高校教諭（三三）は「各先生が自分の欠点を克服しなければ、問題は解決しないだろう」と話している。

なぜ英語が話せないの

<15>

75パーセント参加の集中訓練

熊本でユニークな実験

「英語の話せる先生へ脱皮しよう」と、過去十年間に県下の中、高校の英語教師二百二十人（全体の一三㌫強）が「断続研修」を受講したことを紹介してきた。

しかし、教師の熱心な努力にもかかわらず、県下の英語教育全体からすれば、顕著な好転の兆しは見られていない。熊本大学の福田昇八教授によれば、その理由は「英語教師の八割が厳密に言えば、英会話ができず、授業で教科書を一歩も離れることができないため」である。

「日本人の九五㌫近くが高校までの六年間、英語を習いながら、大半の生徒は外国人と簡単な会話も交わせない。入試英語の弊害や時間不足にも一因があるにせよ、教師自身の向上は、不可欠かつ急務だ」。

福田教授の指摘の通り、英語を話せる英語教師がわずか二割しかいないとすれば、事態は深刻。先生たちに猛省を促す声も多い。

こんな実情のなか、熊本県下で昭和四十五年、全国でも初のユニークな実験が始まった。「教員集中訓練計画」（略称ITC）がそれで、実施された四年間に同県下の中学の英語教師の六〇㌫、高校の先生は七五㌫が参加した。福岡県の「断続研修」を受けた二三㌫強に比べると、いかに大がかりな計画かがわかる。

ITCを指導した福田教授によると、計画の実現は大変だったらしい。

「第一、この研修参加者は二カ月間、学務を完全に免除されるため、代用の英語教員を捜す必要がある。そこで、県下で英語教員免許を持ち、現在、仕事をしていない人に頼んで穴を埋めてもらう。次に計画にかかる費用をどう確保するか。県は毎年、五十万円の補助しかくれず、結局、参加する先生たちが各自二万円の自己負担となりました。おまけに外人教師をどこから呼ぶのかも頭の痛い問題で、難問だらけでした」。

が、実験の反響は大きかった。東京でもITC運動が始動し、一部で小規模（十日間）の英語教諭強化特訓も行われた。昨年四月には、これに刺激されて英会話力をつけることを目的にした「英語不得意者同盟」も東京で産声を上げた。

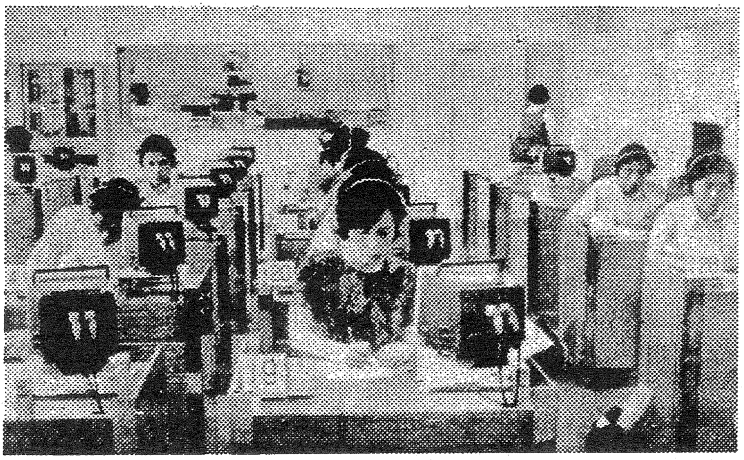
当初、懸念された資金不足もフォード財団が助成金を出し、行政的には熊本県教委が全面的に協力、ワシントン日米協会は、四年間にわたり米人講師を派遣した。また、ITCの意図を知ったカレッジ・ウィミング・アソシエイション・オブ・ジャパンも定期的に米人講師を派遣している。

福田教授は、当初を振り返りながら「難問山積の計画だったが、人間、やる気があれば大抵の困難は突破できることが分かった」と述懐する。ITC誕生までの経緯、集中特訓で先生たちがどう変わったかなど、次回から五回にわたって紹介する。



「英語教師の会話力向上が急務」と語る福田昇八熊本大教授

ヒヤリングの特訓を受ける熊本県下の英語教師たちの
表情は真剣そのもの



なぜ英語が話せないの

<16>

教員の再教育強調

ライシャワー元駐日米大使示唆

難産の集中訓練

昭和四十四年夏、福田昇八・熊本大学教授（当時）はハーバード大学の研究室にライシャワー教授をたずねた。ラ教授が駐日アメリカ大使の地位を退いて、わずか三年しか経過しておらず、研究室を訪れる日本人はまだ、ひっきりなしに続いていた。

福田教授は、日本の英語教育問題について語り、事態改善のための実験計画を打ち明けた。

「日本人は義務教育の中学校で三年間、九四％以上が高校に進み、さらに三年間、英語を習う。しかし、外国人とある程度でも話ができる人は極めて少ない。入試英語の弊害や授業時間不足など問題も多いが、主因は英会話能力に欠ける教師にあり、対策を講じる必要がある」

離日に際し「ひとつ心残りは、英語教育面で何一つ改善できなかったこと」と述べたラ教授は、直ちに賛同した。「東京駐在時代、数多くの政財界要人と接触した経験からみて、日本は閣僚や財界人たちの英語が世界で最も通じない国。開国百年などと言っているが、いまだに語学鎖国である。

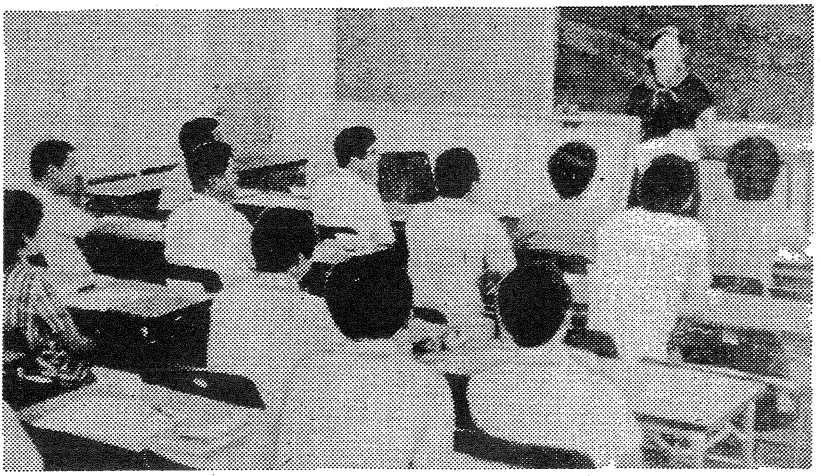
それでは、具体的な改善策はあるのか――。ラ教授は「最も重要なのは中等教員の再教育」と強調。「英語の先生十人に一人の割で外人教師をつけ、二カ月ぐらい学校を休んで集中的に訓練してはどうか」と示唆した。

しかし、中、高校英語教師の八割が厳密に言えば英語が満足に話せない――と指摘する福田教授にとって、教師の七、八割を「集中訓練計画」（略称ITC）に参加させるのは並大抵ではなかった。

理論を行動に移すには、限りない説得と計画立案、それに予算獲得を要する。果たして熊本県で実験に成功するのか――。

福田教授が、ラ教授を訪問したのには実はわけがあった。ラ教授は駐日大使辞任後も、日本の英語教育の改善に強い関心を持ち、その示唆で、在日英語教育協力委員会」（CCEJ）が生まれた。委員会は、日本の英語教育関係者から提出された改革のための計画を審査し、優れたものをフォード、ロックフェラー両財団に推薦、助成金を受けられるために設けたもので、ラ教授も委員の一人である。

ラ教授という強力な理解者を得て、福田教授は帰国後、直ちに計画の具体化にとりかかった。「考え方としては面白いが、実現はとうてい不可能――が大方の見方だった」と、福田教授は述懐する。以後、計画が発足するまでの一年は、福田教授にとって〝苦しみの季節〟であった。



米人教師から実用会話の再教育を受ける英語教師たち

なぜ英語が話せないの

<17>

計画は急速に好転へ

くじけなかった福田教授

中、高校英語教師の八割が厳、額の資金がいる。実施にこぎつ
密に言えば、英会話が話せない けるのはどうてい不可能だろ
――という現実を踏まえて、先う」

昭和四十四年夏、ハーバード大学の研究室にライシャワー教授をたずねた福田教授は帰国後、直ちに行動を開始した。

最初に着手したのは、ITC計画を語学教育振興会の事業に採り上げてもらうための働きかけ。福田教授が〝実験案〟を示すと「資金面の援助はできないが、在日英語教育協力委員会（CCEJ）事務局に協力あっせんをしたいので、計画概要と収支予算書を送れ」と指示してきた。

福田教授は計画案を練った。ラ教授の示唆に基づき、研修期間は二カ月。一コースの定員二十人に対し、専任の外人教師二人をつける。英語教育の改革を目指すため、熊本県下の公私立中学、高校の英語教師（約千人）の大多数が参加する必要があり、このうち四十歳以下の教師約六百人の三分の二に当たる四百人を目標とした。

「集中訓練は、卒業（三月）入学期（四月）を除いて五月から開始。一回に二十人の先生が二カ月ずつの交代で参加すれば、年間百人が再教育を受けられる。四百人なら四年かかるわけで、四年計画にしました」

しかし、計画立案中にも、このドラマチックな試みに対し「LL（語学演習装置）やテープレコーダーなどの設備が普及した現在、わざわざ二カ月間も教師を缶詰にする必要はない」などの意見も出る始末。県教委でも賛同は示したものの「実現は困難との感触しか得られなかった」。

福田教授は落胆した。しかし、日本人が英語を話せないのは、大半の教師が英文和訳と和文英訳、文法で免許を取り、教室で自信をもって会話が出来ないためと信じる教授は、くじけなかった。ラ教授から励ましの手紙が届いたのも力づけとなった。計画をめぐる動きは、このあと急速に好転していく。

× × ×

生たちを再教育するための画期的な実験である「集中訓練計画」（略称ITC）の実施は、福田昇八・熊本大学教授の予想どおり当初、難航した。

「考え方としては面白いが、計画実現には行政当局から学校関係者の同意が必要であり、多

熊本県教委や英語教師たちの反応も否定的なものばかりが目立った。福田教授自身「計画をどう実現すべきかについて、最初からはっきりした考えがあったわけではなく、精力的な話し合いの中から次第に構想が具体化したと言ってよい」。

なぜ英語が話せないの

<18>

集中訓練計画が軌道へ

難航した予算確保や外人講師探し

英語の先生を再教育する画期的な実験である「集中訓練計画」（略称ITC）を実施にこぎつけるため、福田昇八・熊本大学教授は昭和四十五年、熊本県教育庁を訪れた。前の年「計画は面白いが、実現は困難」と〝拒絶反応〟を示した同庁が「集中講義を受ける中学教師の代役を務める補助教員十人分を予算措置する」と申し出た。

「教育県・熊本を確立しようとの機運が盛り上がったのが、事態好転につながり、語学教育振興会（茅誠司理事長）で

って協力を要請、難局打開の糸口になりました」

この進展に呼応するように三月、ITC計画の推進母体になる「熊本県英語教育振興会」（会長・六反田藤吉熊本大学学長）が発足。四月には、フォード財団から一万㌦の補助金決定が伝えられた。県も六月議会で、教育補助金の最高額である一件二十万円を五十万円とする異例の決定を行った。この間、振興会の主任理事を務めた福田教授は税金対策、振興会の財団法人化など雑多な事務処理に追われた。

ITC計画が実施段階に近づくなか、外人講師の確保、受講する先生の代替教師探し、受講希望者調べ……、難問はまだ山積していた。

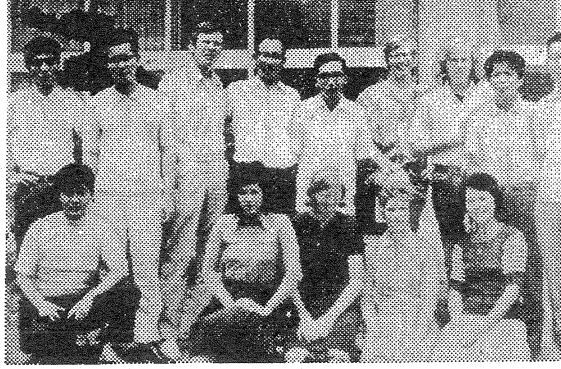
も、陳情文を携えた専門委員を派遣、当時の寺本広作知事に会

学校で教え、続いてまた別の学校へ移って教える人を県下各地で探さなければならない。途中、教育庁から「予算問題は解決しても、代替教員が見つからねば、この計画は流産しかねない」との懸念も出た。しかし、福田教授らが八方手を尽くして探した結果、同年春には十五人を超える候補者が見つかった。

続いて五月、受講希望者の調査が始まった。九月から開講する二カ月（八週間）の集中訓練に県下の中、高校英語教師四十五人が申し込んだ。一回の受講定員十五人の三倍に当たる〝殺到〟ぶり。この数字は、間もなく百人にも達し、参加者の決定は各学校に任せた。

外人講師探しは大変だった。外人教師の給与年額を三百万円とすると、フォード財団の一万㌦（当時の換算で三百六十万円）では必要な二人は確保できない。そこで苦肉の策として、月額十万円で二人を雇うことにしたが、米国各大学などへ照会した結果はいずれも断られる始末。あせった福田教授はフルブライト事務局、ハワイ大学、英国文化振興会……などを駆け回ったものの、徒労に帰した。

九月の開講予定日は刻々、迫っていた。そんな折、福岡のアメリカンセンター主事の紹介で大分市在住のアメリカ女性三人と連絡を取り、面接。三人が承諾したのは開講一週間前という際どさであった。



研修期間の２カ月ですっかり米人教師と打ち解けた英語教師たち

なぜ英語が話せないの

〈19〉

外人恐怖症なくす

教師たち 合宿で英会話に自信

昭和四十五年九月四日。この日はわが国の英語教育史上、画期的な一日だった。熊本県下で始まった全国初の中、高校英語教師の再教育プログラムである「教員集中訓練計画」（略称ITC）がスタート。その開講式が熊本市水前寺共済会館で開かれた。

式には研修生（英語教師）十七人と外人講師三人、県英語教育振興会や県教育庁関係者らが出席。研修生は、十七人のうち十三人が中学教師。年齢は二十三歳から四十歳まで。平均年齢三十三歳。女性教師二人。講師陣は、日本で英語教育の経験を持つブレンダ・ボーツさん（ペンシルベニア大英米文学科博士課程）ら三女性であった。

授業時間は、午前八時四十分始まり、終了は午後四時四十分。指導の中心は英語を話すための基礎訓練に置き、午前中はテキスト「イングリッシュ・九〇」、午後は各講師の工夫で、変化に富む応用授業がなされた。

英語教師たちは必死であった。扉間、クタクタにしごかれ、帰宅するとテープで英語を聞く毎日。宿題、レポート提出も義務づけられた。主催者側の一人、福田昇八・熊本大教授は「八週間もの単調な緊張の連続はよくない」と、一部を合宿方式にすることを決定。二泊三日の日程ながら、講師と英語劇をしたり、夜間、酒を酌み交わすうち〝外人恐怖症〟も薄れた。

ここに第一期研修生の報告書がある。

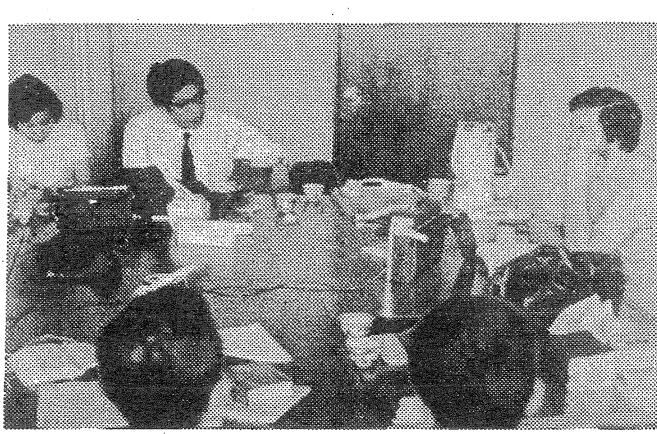
「生まれて初めて外国人に接した。一日八時間近くも英語を聞く生活を続けていると、最初の数週間は駅で日本人が話しているのを聞いても英語に聞こえた」

集中訓練の成果について、第三回研修生二十三人のうち十七人が「大いに力がついた」と回答した。先生たちは感想文の中で「仕事から解放され、落ち着いて勉強に没頭できた。余程、意志が強くない限り、これほど集中的には勉強できない」「最初は音楽のようにしか聞こえなかった講師の話が二十日、一カ月とたつうちに次第に意味を持つ言葉になり、その喜びは感動的であった」などと書いている。

「話す」はどうか。八人ぐらいのグループを編成すると、内気な先生はなかなかしゃべろうとしない。そこで最も基礎的訓練を要するグループは三人とし、毎回プリントを用意し、会話力の増進に全力を挙げた。

「各講師は、英語教師に最初はブロークンでも話させて、正しい英語に直していく。これで教師たちは憶せず活発に話すようになった」と福田教授は話す。

最初の二年間で九十八人が集中訓練に参加。年間百人研修という目標は達成された。



外人講師（右端）から英会話を熱心に学ぶ先生たち

なぜ英語が話せないの

〈20〉

教師、教育法に変化

報いられた〝集中訓練〟

中、高校の英語教師の八割は、厳密に言えば英語が話せない。この現状を逆転し、八割の英語教師が英語が話せるように再教育しよう！。福田昇八・熊本大学教授の発案で昭和四十五年、スタートした熊本県下の「教員集中訓練計画」（略称ＴＴＣ）は、全国教育界の注目のなか、画期的な成果をあげた。

ここに集中訓練の効果を客観的にみるため、参加した教師約三百人を対象にしたミシガン・テストの結果がある。教師たちは、訓練参加前、訓練の中期、二カ月間の訓練終了後の三回、同じ難易度の試験を受け、進歩度合を調べられた。

このミシガン・テストで、先生たちが能力検定を受けたのは「英語聴取力テスト」「英語音識別テスト」「英語能力テスト」の三つ。最初の二つは外人教師が問題を読みあげるヒヤリング・テスト。能力テストは文法、単語、読解力の筆記試験。英語教師がもつべき英語力は「各テストとも八十点が最低の基準」とされる。八十点のレベルとは、外国人が米国の大学に入学して

も語学的に多少、不便はあるが、正規学生としてなんとか授業についていける程度を指す。

「聴取力テスト」を例に見てみると、研修前の平均点はわずか六十八点。成績が八十点を超えた者は一九％にすぎなかった。これが一カ月後（中間期）には平均七十八点、八十点以上四六％に上昇。二カ月後には平均点八十点、合格ライン八十点を超えた者は全体の五八％に達した。

研修終了後、教師たちは感想文集を残した。

「戦中派教師で会話はまったく勉強していなかったが、受講を決意してよかった。自分が英語教師である以上、今後も努力したい」「授業で生徒を批判する前に、まず自分自身をみつめるよい機会になった」など。

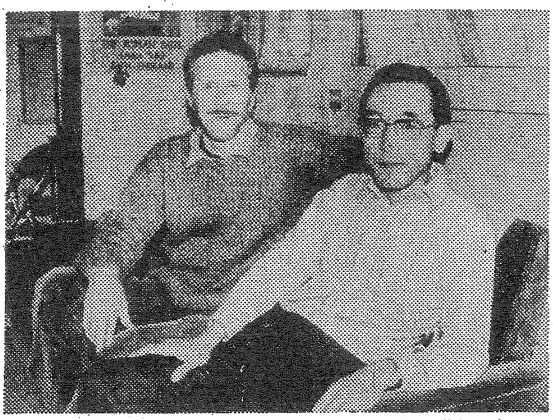
生徒たちは本当に熱心だった。外人講師との会話時間を少しでも増やそうと、毎朝六時すぎに起床し、講師の送り迎え役を買って出た者。乳幼児を抱えながら、毎日往復三時間のバスで通ったママさん教師。「欠席するのは悔しい」と風邪の発熱をおして出席する先生もいた。

研修の成果が授業にどう生かされたか。先生たちの報告は「教師が変われば、生徒も変わる」であった。

研修を終了して現場に戻った中学教師の多くが「先生、英語の勉強は楽しか。私、将来は英語の先生になりたい」など、以前にはなかった体験をした。これは教師が授業のやり方を変え、自らを〝改革〟したためである。教師たちは、授業で天気や簡単な日常会話で切り出し、生徒たちは英語を口に出すことに抵抗を感じなくなった。先生たちは自分たちが研修でほめられたように、生徒をほめ励まし始めた。授業中、生徒の表情が生き生きとしているか、に気を配り始めた。

励が殺到した。長い難産の末の開講だったが、福田教授らの苦労は報いられた。

この〝熊本県下の実験〟に、各地から多くの問い合わせや激



外人講師㊧と協力、話せる英語教師の養成に当たった福田昇八教授

なぜ英語が話せないの

〈21〉

聴覚機器設備が急務

求められる入試の改善

このシリーズでは、これまで日本人が中、高校、大学を通じて英語を勉強しながら、外国人と簡単な会話も交わせない一つの背景として「英語がしゃべれない英語教師」の問題を取り上げてきた。入試や授業時間の不足……と、教師を取りまく環境は確かに厳しい。しかし「中、高校教師の八割は厳密に言えば英語が話せない」（福田昇八・熊本大学教授）現状を脱していない。熊本県の「教員集中訓練」（略称・TTC）や福岡県の「断続研修」などを通し、先生たちの学習意欲は盛り上がりをみせているものの、事態打開への道はまだまだ遠い。英語教師はいっそうの努力が必要だろう。

今回から英語教師の質の向上と同じく重要な「入試問題」をテーマに考えよう。わが国の英語教育の改善を妨げる〝最大のガン〟は、入試にあるといっても過言でない。早い話が大学入試にかなりの比重でヒアリング・テストを出せば、高校入試にも波及し「現在の「読み」「書き」文法」中心の教育準備は、大きく転換せざるを得ないからである。英語が実用面からはずれ、単なる入試、入社試験の〝道具〟化する弊害もかなり是正できよう。

高校、大学の入試では、確かに発音問題はある。しかし、その内容は「音の世界」とは断絶した暗記の問題である。受験生は正しい発音が出来なくても、単語のアクセントの位置や発音記号の違いを機械的に覚えてしまえば、事足りる。要するに実用英語からは大きくかけ離れた問題である。

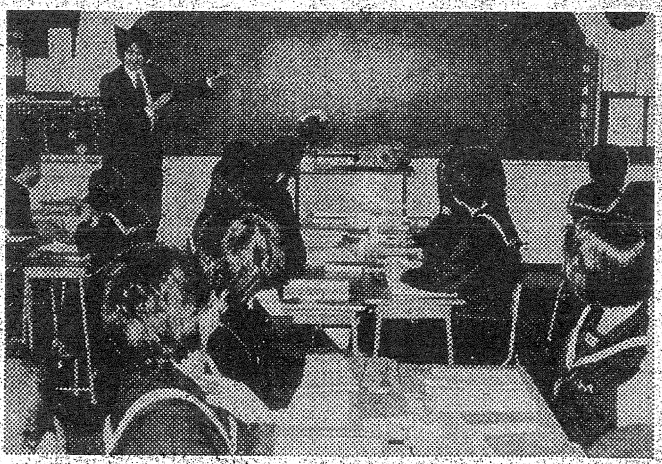
しかも入試では、発音問題の配点がせいぜい一〇―一五％ぐらい。福田教授は「現在の高校の英語教育を変えるには、大学入試に少なくとも三〇％の配点でヒアリングを出すことが必要」と指摘している。それも、記憶を試すような発音問題でなく、実際の音を通した問題にする。そうすれば、受験生は今のような教育・指導では得点できないから、教師自身も話す英語に自信を持たざるを得なくなる。

音によるヒアリング試験を実施しようとの意見は毎年、英語教師らの間で高まるものの、結局は「現状のままの移行はムリ」で片付けられる。

入試にヒアリングを取り入れるとき、最も重要な点は受験生全員が同じ条件で受験できるか否かである。例えば、受験場の前の座席に比べ、後方の座席が聞こえが悪くないか。また、中学校や高校間でヒアリング設備（CL装置など）に差があり、不公平にならないかなど、多くの問題が解決されねばならない。

しかし、長崎、大分、佐賀県省派遣の英語指導主事スティーブ・ロングさん（二六＝米国コネチカット州出身＝は語るのである。

「いつまでも問題を放置しているのはおかしいですね」と、文部省が世界で最も発達した日本で、大して予算も必要としない設備で、下などの公立高校入試では既に早い県は二十数年前からマイクを使ってヒアリングを導入している。「カセット、テープレコーダーといった視聴覚機器が世



中・高校の英語聴覚装置の整備が急務と語るロングさんの授業風景

なぜ英語が話せないの

〈22〉

大学入試改善が急務

ヒアリングテスト導入を

実用英語を軽視したわが国の英語教育を改善する最も効果的な方法は、大学入試にヒアリングなど会話的な要素を増やすことである。大学入試の形式が変われば、高校入試もすぐに改善されよう。

文部省によると、現在、四十七都道府県の公立高校のうち、入試にヒアリング問題を出しているのは二十八都道府県（五九・六％）。九州でも佐賀、長崎、大分県などは早くからヒアリング・テストを実施している。福岡県は英語教師の力が弱いのか、当局の熱意がないのか、いっこうに改善されない。しかし、高校入試にヒアリングを出題しても大学入試に出なければ、結局、大きな改革力とはなり得ないだろう。こう考えると、大学入試の一新、改善が急務といえよう。

五十四年度の入試から始まった共通一次試験は、ヒアリングを全国的に取り入れる予定。一週間の好機とみられた。英語教育の指導者、学識経験者らで構成した〝入試改善会議〟でも当初、試行テストの段階ではヒアリングを出題。英語教師から期待の声も上がった。

ところが、文部省は共通一次テスト実施二年前の五十二年秋になって、ヒアリング出題取りやめを発表。その理由として「技術的に困難である」と説明した。

「入試にヒアリング問題を出すとき、最も大切なのは受験生全員が同じ条件で受験できるかにある。教室の後方座席の者が前の人より聞こえが悪ければ不公平だ。そうすると、百人以上を収容する大教室は不適当で、どうしても五十人程度の小教室に限られる。全国で五十万人の受験生がいれば、一万の教室がいるし、十分な数の教室が確保できるか否かは疑問」。

「全国一万の教室でテープレコーダーによるテストを行う場合、試験問題をテープにセットして正しくプレーしなければならない。これは簡単な操作だが、録音テープの保管が大問題になる。点検のため、事前にテープを聞くわけにはいかないので、各試験官はテストがうまくいくか自信が持てない」。

このほか、受験生が通う高校間でLL設備などに格差があれば不公平――などの意見も出て結局、見送りになった。

しかし、福田昇八・熊本大学教授は「カセットテープの代わり、NHKの第二放送（ラジオ）を使えば、この難問は解決する」と指摘する。

この方式は、既に十数年前から富山県下の高校入試で実施され、成果は実証ずみ。共通一次試験開始前に点検できる。

福田教授によると、全国一万カ所の受験場に一万円のラジオ一台ずつを配置しても予算は一億円。「これで国際舞台で活躍できる日本人が育つのなら、格安の投資」と話している。



英語の時間に会話が増えると生徒たちの表情はいきいきしてくる

なぜ英語が話せないの

〈23〉

入試形式の改善を

難点は「公平なテスト」

五十四年に始まった大学の共通一次試験にヒアリングを出題する試みは〝見送り〟になった。大学入試センターによると、ヒアリングを導入する場合、最大の難点は「どうすれば受験生全員が同じ条件下で公平なテストを受けられるか、に尽きる」。共通一次試験の受験生は約三十六万人。試験会場は、全国で六千カ所を超える。会場を取り巻く環境はさまざまで、例えば工場騒音や自動車騒音に悩まされる会場で受験した者は、静かな会場での受験生に比べ、不利を免れない。

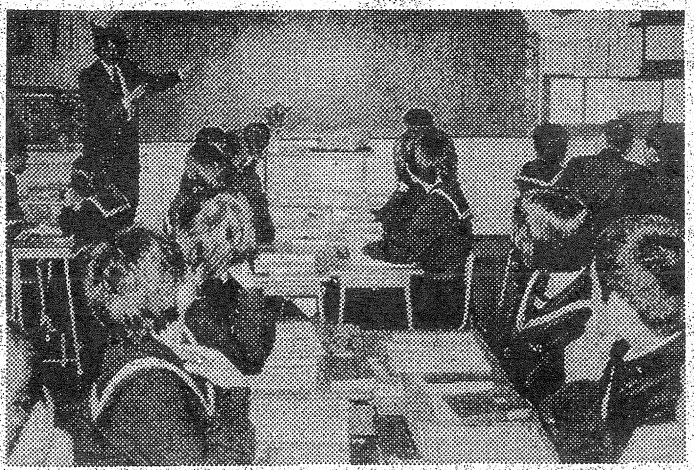
次に会場の規模や音響効果などの差をどう解決するか。百人を超える受験生を収容する大会場と五十人程度の小会場とでは、後方座席と前の座席とでは聞こえ方が違うという問題が生じる。受験場の大小は統一することで、解決不可能ではないが、難聴者に対し、どう処置するかといった問題もある。

さらに受験時の停電など〝不測の事態〟への対策は万全か、受験生が通う高校のLL設備に格差はないか。ヒアリング出題をテープですれば、操作ミスや故障はないか。テープの保管はどうするか。ラジオによる出題なら、均一のラジオ受信機の設置……と難しい問題が少なくない。

共通一次試験と異なり、公立高校では四十七都道府県中五九・六%（二十八道県）でヒアリングテストを行っているが「騒音公害がひどい大都会である東京都、大阪府、愛知県などではヒアリング試験を行っていない。騒音問題だけを例にとっても、このように難しい問題をはらんでいる」と、大学入試センターは指摘している。

文部省内には、こうした背景から「ヒアリング試験は共通一次より各大学の二次試験の中で出題した方が受験生間の不平等が少なくなり、やりやすいのではないか」との声も出ている。しかし、大学独自で入試にヒアリングを出題しているのは、上智大学など若干校に限られているのが現状。西南学院大学（福岡市）でも「受験会場の大小で受験生への聞こえ方が良かったり、悪かったりの差があり、設備問題でヒアリング出題が見送りになった経緯がある」と説明している。

まさに、難問山積のヒアリング導入の観があるが、福田昇八・熊本大教授は「入試形式が改善されなければ、わが国の英語はいつまでたっても実用英語とほならないだろう」と強調している。



せっかくの授業での生きた会話も入試が改善されないと生かされない

なぜ英語が話せないの

〈24〉

遅れる福岡、熊本両県

公立高校入試 ヒアリング問題の導入

ヒアリング軽視の大学入試英語問題に比べ、高校入試は大きく改善されつつある。文部省によると、四十七都道府県の公立高校のうち、五九・六㌫（二十八道県）でヒアリングが実施され「読み」「書き」一辺倒の英語教育から「実用会話」重視に転換している。

九州でも現在、公立高校にヒアリング問題が出ないのは、福岡、熊本県だけ。大分県は、なんと十七年前の四十一年から開始。当時はまだ草分け時代で「大いによい正式実施に踏み切る。分県の英断」と、全国の注目を集めた。大分県は、テスト実施に先立ち、三十八年から三年間㌫）。長崎県は「百点満点中二〇㌫以内」大分県六十点満点の対策を講じてからスタートした。

その他の県も、長崎県が四十八年（試行期間三年）、佐賀県五十二年（同一年）、鹿児島県五十五年（同二年）に、それぞれヒアリング出題を始めている。宮崎県は昨年から二年間の試行期間に入り、五十九年から本格実施。

ヒアリング問題の配点は、佐賀県が五十点満点中五点（一〇うち十点前後（約一七㌫）など。大体、一〇―一五㌫ぐらい。「現在の英語教育を変えるには、入試に少なくとも三〇㌫の配点でヒアリングを出すことが必要」とする福田昇八・熊本大教授の理想には達しないものの、各県の学校教育課は「英会話がうまい生徒が増えつつあり、ヒアリングテストの成果は着実に上がっている」と指摘している。

ヒアリングテストの内容は、外国人が吹き込んだ声をテープで受験生に聞かせ、回答させる形式が多い。例えば、佐賀県の場合、テーブルの下にネコがいる絵を受験生に見せ「テーブルの下に何匹ネコがいますか」などと質問したり、外国人の読む英文の内容について、設問に回答させる。

英語の入試問題で大きく遅れた格好の福岡、熊本両県は「目下、ヒアリング導入を検討中」というだけで、具体的な動きはない。福岡県の指導第一課は「ヒアリングテスト実施には、多くの問題がある」と説明するが、実施県は例外なく「心配したトラブルや不公平問題もなく、父兄や受験生からも好評」と自信を示している。

「ヒアリング・テストという新しい試験様式の採用に当たり、テープの操作ミスや故障、さらに後方座席と前の座席とでは、聞こえ方が違い、不公平ではないか――といった問題はすべて取り越し苦労だったことがわかりました」――。大分県の当局者の一人はこう証言している。

ヒアリング問題が出れば中学生の会話力も向上が期待できる

なぜ英語が話せないの

〈25〉

実用から遊離した問題

外人さんも首ひねる表現

「何年やっても、モノにならんのは英語やな」――テレビCMではないが、わが国の入試英語ほど実用性が少なく、暗記力テスト化した問題はない、と語る外国人は多い。単に入試問題にヒアリングを導入していないという批判だけでなく、問題自体が日常使われる英語から遊離したものが自立つとの指摘である。

「百万人の英語」講師でおなじみの英国人作家アラン・ブース氏(三五)がこのほど「日の丸英語は救えるか」と題した小冊子を出版した。日本の英語教育の欠点を痛打した「日の丸英語に物申す」に続く第二弾。筑後地方の若手英語教諭で結成している「久留米英語講習会」(真崎良幸会長)が出版を側面から援助した。

ブース氏の言い分は「日本では、有害な教科書を使って、不自然な入試を行い、役に立たない英語を教えている」――になるその一つ。They say it is good.という文章をIt is said that it is good.への書き換えは、良い文章を日常会話で用いない表現に改悪させるもので、こんな問題なら他にテストすべき内容はたくさんあるはず、と強調している。

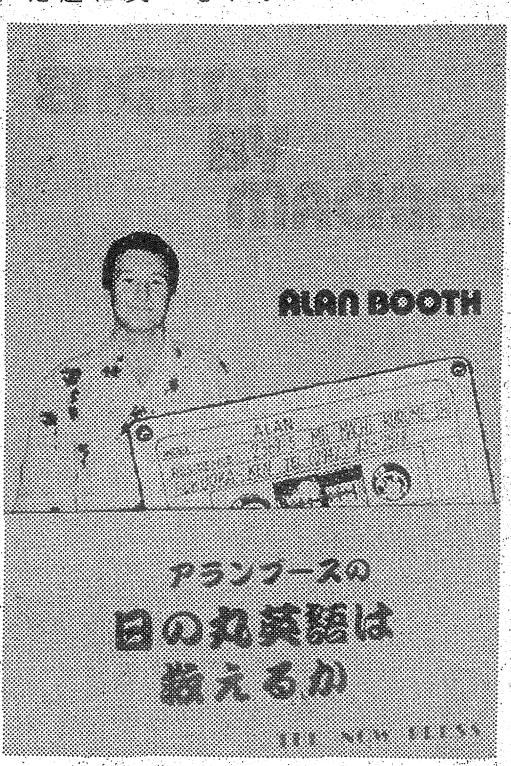
例えば、高校生の教科書は欧米人でさえ首をかしげる難しい単語が多く、日本でいう基本的な単語千百八十語のうち約二〇%は、英国民が使う基本二千単語の中にも含まれていない。

入試の欠陥ぶりもひどい。発音やアクセント問題は、正しい発音が出来なくても記憶していれば答えられる。「まるでIQ(知能指数)テストか、合格のための技術試験をしているようなものだ」。

入試によく出る書き換え問題の作成に当たっては、外国人をスタッフに加えて意見を聞くべきだと話している。

例えば、It is difficult for foreigners to use chopsticks.は文章としては正しいが、外国人がはし(箸)を使うのは難しいという日本人の固定観念が強く出ていて、外国人の無器用さを印象づけるような表現。「決して好ましい文章とは言えない」という。

さらに日本人は、日本が小国という"幻想"を抱くあまり「日本は、米国の二十五分の一の大きさ」を表現する際、Japan is one-twenty-fifth as large as America.と書くが、largeはむしろsmallとすべきところ。英語の表現としては、大きい方を先に書くので、America is twenty-five times as large as Japan.が一般的だ。日本国土の広さはヨーロッパの諸国からみるとトップクラスにあり、決して小国ではない。こうした日本独特の表現がいつの間にか定着して、入試にも登場している――と指摘している。



出版されたブース氏の英語教育の批判本

なぜ英語が話せないの

〈26〉

欠陥だらけの入試問題

英米で死語化した単語も

入試英語の問題作成には、ネイティブ・スピーカーの意見を聞くべきだ――と警鐘を鳴らす外国人は意外に多い。

ウイスコンシン大学のダイアン・プレス準教授㈠は一昨年夏、久留米大学医学部の音声言語学の客員(助手)に迎えられ、夫のロバート同大教授㈡と来日、約七カ月間、久留米市に滞在した。語学に興味のある夫妻は、この間に共通一次英語問題や九大の入試問題(いずれも一昨年)を徹底研究したが「欠陥だらけの問題に、二の句がつげなかった」ほど。その内容を筑後地方の若手英語教師で結成する「久留米英語講習会」の講演会で発表した。

ダイアンさんによると、共通一次は選択肢をもつ二十五題のうち、十題が悪い問題の範ちゅうに入るシロモノ。続く五つの問題も三題が文法的な間違いや誤った表現があるなど、問題が多い。

例えば、四つの解答の中から正解を選ぶ選択肢問題は、複数の正解をもつ問題がある。問題九の He knows little of mathematics, ( ) of chemistry のカッコの中には②のstill lessが正解とされているが①のas well asも文脈次第では正しい。また、最後の問題に出てくる cunnig fellow (悪賢い奴)は十九世紀の表現で英米では既に死語化している。

夫妻は、日本の英語問題がもっぱら視覚(読み、書き、文法)に頼っていると指摘。前置詞などは機械的に暗記して正解を答えられるが、実際の会話で応用するレベルには到達しておらず「結局、学校を卒業すれば何にも役に立たない勉強だったと悟るようだ」と、入試の在り方を厳しく批判している。

ロバート教授は、入試英語は外国語のテストなのに、難解なものが目立ち、受験生をますます単語の猛烈暗記に駆り立てており、それだけ実用英語軽視につながっていると分析。一昨年三月の九大入試の問題三(ギリシャの哲学者ピタゴラスの哲学思想を難しい文章で紹介)などは「米国の優秀な高校生でも知識がないと理解できず、これを完全な日本語に翻訳しても、ほとんどの受験生には内容がよく分からないだろう」と言う。

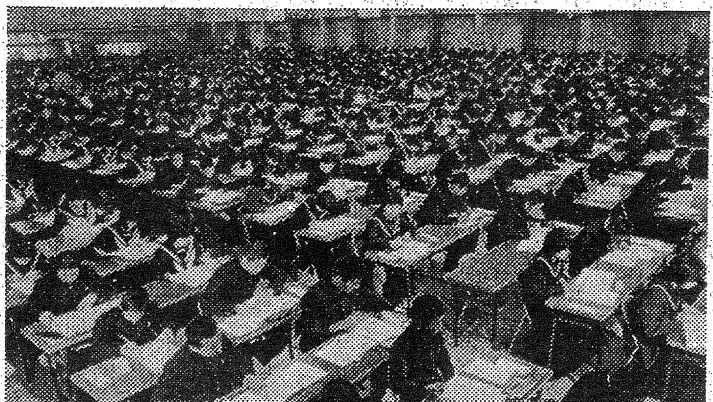
こうした欠陥入試に対し、夫妻はヒアリング問題の導入、とくに音の世界から遊離した旧態依然の大学入試の改革が最大の急務だと強調。難問山積で、なかなかヒアリング出題に踏み切らない大学当局についても「日本ほど教育機器の発達した国はなく、案ずるより生むがやすしの気持ちで、一刻も早く英断を下すべきだ」と話している。



「日本の入試英語は欠陥だらけです」と語るダイアンさん

なぜ英語が話せないの

〈27〉



県下高校入試にヒアリング問題が導入されるのはいつ？

公立高校入試にヒアリング問題を出していない県は、九州では福岡、熊本の二県だけ。大分県は、なんと十七年前の四十一年から導入。全国的にみても二十八道県（五九・六％）がヒアリングを出題している。

福岡県が実施に踏み切らない理由として、田中壮二郎・県教育庁指導一課長は、受験生間に生じる不公平問題を挙げ「今のところ、導入の考えはない」と、消極的な姿勢を示している。

例えば、試験場で前の座席の受験生に比べ、後方座席組は不利にならないか。飛行機音や騒音に悩まされる試験場と、静かな試験場とでは、明らかに不公平があり、同一条件でのテストでなくなる。また、受験生が通う中学校は、LL設備が整った学校と、そうでない学校（県下の三百三十二中学のうち、約九〇％がLL設備を持たない）があり、公平な試験とは言えない、と指摘する。

しかし、田中課長は「予想される各問題についての具体的な調査や、先進県からの事情聴取、予算面の試算などはしていない」と述べ、県教育庁のやる気のなさを露呈した形。「十分検討したうえでの結論ならともかく、観念的な意見だけで英語教育の前進を阻むべきではない」と、現場教師からの批判は強い。

既に実施に踏み切った県では「ヒアリングをめぐる諸問題は、全くの取り越し苦労だった」（佐賀県）「ヒアリング導入によるトラブルは一度もなかった」（長崎県）と証明。鹿児島県の担当者は「要するに慎重な配慮とやる気さえあれば、導入できる」と、強調している。

実施県では、一校当たり二、三千万円はかかるLL設備を全部の中学が備えているわけではなく「簡単なカセットテープでも十分、代用できる」（大分県）としている。騒音問題にしても「二つの高校に受験する生徒たちは、ほぼ同じ環境で試験に臨むため、不公平はない」（佐賀県）。試験官（外人）の声を流すマイクの性能を同一にし、教室の大小や席の位置による聞こえ方の不統一を解消すれば、混乱はないことを、各実施県が長い経験から実証している。

福岡県は、昨年から公立高校の英語教師の採用試験に従来のヒアリングテストに加え、全国でも初めてのディベイティング（討議）を出題、注目を集めた。課題を与えて一人五分程度のスピーチをさせるほか、八人ずつのグループに分けて討議させ、会話力を採点する。この方法だと、受験生は読み、書き、文法だけでなく、実用会話力の訓練も必要になり、質の高い教師が得られると好評だ。

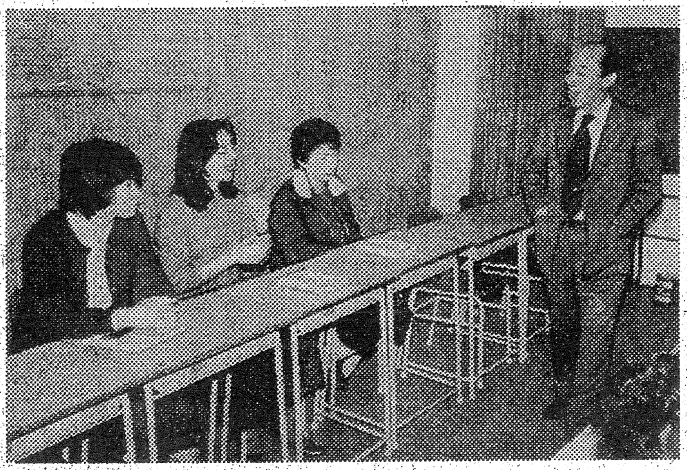
県教育庁の論法だと、この英断もLL設備の整った大学と、そうでない大学では不公平があり、教員採用試験にヒアリングやディベイティングは出題できない——となる。田中課長らに再考を促す声は強い。

やる気ない福岡県

公立高校入試のヒアリング導入

なぜ英語が話せないの

〈28〉



生きた英語に挑戦するOLが年々に増えている（実践英語セミナーで）

「中、高校教師の八割は厳密に言えば英語が話せない」（福田昇八・熊本大学教授）現状を脱するため、各地で民間主導型の英語教師の質の向上運動が展開されている。熊本県下の「教員集中訓練」（略称TTC）や筑後地区の若手教師の相互啓発を目指した「久留米英語講習会」など、先生を対象にした研修会の機会は多い。

実用英語が話せる教師は、こうした努力が着々と実を結び、確かに増えてはいる。だが、入試にヒアリング問題が導入されない限り、前進は望み薄。試験に出ないヒアリングでは、生徒が軽視し父兄も授業で会話に時間をとられるのに〝拒否反応〟を示すだろうからである。入試改革の遅れは、しかしながら深刻な影響をもたらしている。

久留米市東町にある実践英語セミナー。ここには学生時代、英語を何のために勉強したかわからない」と嘆くサラリーマンやOLが再度、英語に挑戦している。ただ今回は読み、書き、文法を離れて実用会話中心の勉強。教室内は活発な会話でいきいきしている。

「中学から大学まで十年間も英語を学んで、話せる会話といえば、アイ・アム・ア・ボーイとディス・イズ・ア・ペンだけでした」――OLの一人は後悔の念を自嘲（ちょう）ぎみに述懐する。

この点、戸田昭二・同セミナー学院長らは「わが国の英語教育の最大のガンは、会話無視の入試制度にある」と断言する。

会話無視の入試制度

試験に出ないので軽視

いかに教師が実用会話能力を高めても、入試が改善されねば、同じ悲劇は今後も際限なく繰り返される、との見解だ。

「全国六千カ所を超える受験会場で、三十六万人が受験する共通一次試験の場合は、工場や自動車騒音など会場を取り巻く環境の違いなどで、公平なテストは無理かもしれない。でも各大学ごとの入試なら不公平はかなり解消され、ヒアリングは出題できる。公立高校でも受験生は志望校ごとに受験するケースが大半で、県当局が懸念するほどの問題はない。

戸田学院長は、九州で公立高校入試にヒアリングを導入していない福岡、熊本県に「要するに当局のやる気のなさが原因」と強調する。

公立高校入試にヒアリングを出題しているのは二十八道県（五九・六％）。九州でも大分県が四十一年、長崎県が四十八年からと十年以上も前からヒアリングを出題。実施県の担当者は「ヒアリング導入で、予想されたトラブルは一度もなかった」（長崎県）と口をそろえる。

これに対し、福岡県は「今のところ、導入の考えはない」と消極的な姿勢を示し、熊本県は「目下、検討中」の段階。福岡県が実施に踏み切らない理由として、田中壮一郎・県教育庁指導一課長は「受験生間に不公平問題が生じる」と語るだけで「実施した場合、予想される各問題についての具体的な調査、予算面の試算、先進県からの事情聴取は一切行っていない」と回答、やる気のなさを露呈している。

なぜ英語が話せないの

会話上達法―第三部―

〈29〉



英会話は毎日こつこつ勉強して積み上げることが大切

このシリーズでは、日本人が学校教育を通じて三―十年も英語を学びながら、外国人と簡単な会話もできない背景として「英語がしゃべれない英語教師」の問題や、読み、書きに偏った入試の不備を取り上げてきた。

ゆがんだ英語教育の影響で、筆記試験と会話は別もの―と考える風潮が生徒たちの間に浸透。〝役に立たない英語〟に憤慨して、社会人になってから再び英語の勉強を始める人も少なくない。この第三部では、実用会話の習得法について、さまざまな体験談を紹介し、学習の助けをしたい。

◆　◆　◆

わが国の行政の〝中枢機関〟が集中する東京・霞が関。ここで働く官吏の九割近くは東大卒。日常会話にもやたら横文字が飛び出す。会見で質問した記者に「そんなハイポセティカル（仮定的な）質問には答えられない」といった表現はザラ。「その形容詞、何という意味ですか」と聞こうものなら、冷たく見返される。

さすがはエリートと、言いたいが、実情はちょっと違う。難解な単語を数多く知っていることと、会話の実力とは必ずしも一致しないのだ。英単語を連発する某省の事務次官は、米大使館スタッフと意思疎通がうまくできず、あわてて通訳の手を借りる始末。英会話になると、途端に緊張して沈黙を守る〝能吏〟もすこぶる多い。

「同時通訳では日本一」と折り紙つきの村松増美・サイマルインターナショナル社長は「英会話上達で最も大切なのは、毎日コツコツ努力を積み重ねること」と指摘する。英語がペラペラの元ワシントン特派員は「語学、ゴルフ、碁と〝ご〟のつくものは、根気のある方が勝つ」と断言している。

英会話は、徹夜で一週間勉強しても大して効果がない。逆にわずか一時間でも毎日やれば実力がつく。途中、伸び悩みやスランプはあっても、決してあきらめないことである。トロイヤの遺跡を発見したシェリーマンは、短期間の船旅行中に五カ国語をマスターしたといわれる語学の天才だが、語学では「欠かさぬ反復努力が才能をしのぐ」と。まずは銘記すべきだろう。

ゴルフに例えれば、ピッチングの寄せしかできないアマが、多彩なクラブで多様な技術を持つ青木功に勝てるはずがない。青木の絶妙なショットに舌を巻く人は、目に見えぬ努力を看過しがちだ。外人並みに英語を話す人がいたら、死にものぐるいの学習を積んだと考えて間違いない。

英語教育の第一人者で元NHK英会話テレビ講師の松本道弘氏は、努力の価値を、こう強調する。熊本県下で英語の先生を再教育する「集中訓練計画」（略称I-TC）を実現させた福田昇八・熊本大学教授も「根気と継続性が英会話上達のカギ」と、同じことを言っている。

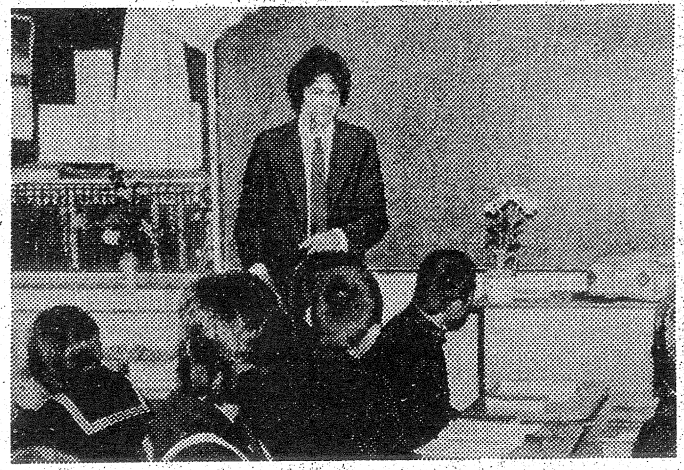
毎日の学習が必要

根気と継続性がカギ

なぜ英語が話せないの

〈30〉

会話上達法——第三部——



英会話の学習では毎日少しでも新しい表現を覚えることが大切

必要な表現力の向上

話題の内容も充実させよう

語学に王道なし、といわれる。英会話の勉強にも多くの方法があり、これがベストと太鼓判を押せるものはない。これから紹介する習得法は、あくまで参考例である。

久留米市に住む会社員Aさん（㉚）は学生時代、「英語はまるでダメ」な平均的ニッポン人であった。いや、平均どころか、高校の模擬テストはいつも四〇度前後の低空飛行。会話の「か」の字もできなかった。

このAさんが皮肉なことに、入社四年目で東京転勤になり、英文の翻訳や外国人との付き合いが必要なポジションについた。「AはBだ」と翻訳すると、上司がけげんな顔をして原文を調べ「君、こりゃAはBでないと書いてあるじゃないか」と、一喝される始末。「ハロー」という外人の声を聞いただけで受話器を先輩に渡すため、みんなから〝英語恐怖症〟とからかわれた。

地獄のような数カ月が過ぎたあと、思い切ってアメリカ人から個人教授を受け始めた。その男はAP通信の記者でとても厳しい。例えばAさんが「How do you think on this problem?」（この問題についてどう思いますか）と聞くと、記者は「I think it with my brain」（頭で考えるさ）とトンチンカンな答え。

まごつくAさんをしり目に「日本語で〝どのように〟はhowのようだが、これだと、その問題をどのような方法で考えるのか——になり、もちろん脳（頭）で考えると相手は答える。このような場合の〝どのような〟はwhatを使うんだ」と解説した。中学生でもできそうな質問さえ間違い、Aさんはひどく落胆した。

少しでも会話の時間を増やそう、と毎日、英語学校へも通い始めた。だが、半年が過ぎても会話内容は「××さん、ご機嫌いかがですか」の域を出ず、進歩はみられなかった。

「語才がまるでない」ことが分かったAさんは、開き直った。冷静に自分を見つめ直した。その結果、単純なことだが、三つのことに気づいた。第一は表現力不足。二つにヒアリング能力のなさ。三つは話題の内容のなさ——である。特に第三の欠点は「日本人同士が日本語で話しても内容がなかったり、背景の理解ができていないと、会話ははずまず、意思の疎通もむずかしい。話す内容の準備が必要と思った。外国人との会話はあでもない、こうでもない式の日本流では通用しないんです」。

Aさんは、経済を話すときは事前に経済を勉強した。ヒアリングは毎日、英会話講座（ラジオ、テレビ）とFEN（米軍極東放送）のニュースを聞いた。通勤時は地下鉄乗車時間を利用して欠かさず英字新聞をフロントページだけ読むようにした。最大難関だった表現力の学習には独特な方法を採用した。

「まず、毎日、悩まされる電話の応対問題をなんとか解決しようと思い、本屋で英会話本の〝電話会話〟の文例だけをノート一冊分メモ。Bさん、いらっしゃいますか。あいにく外出中ですが、伝言あれば伝えます——といった簡単なものから、予想されるあらゆる電話会話の表現を暗記しました。不思議なことに、他の会話はロクにできないくせに、電話だけは驚くほどスムーズにいき、自信がつきました」

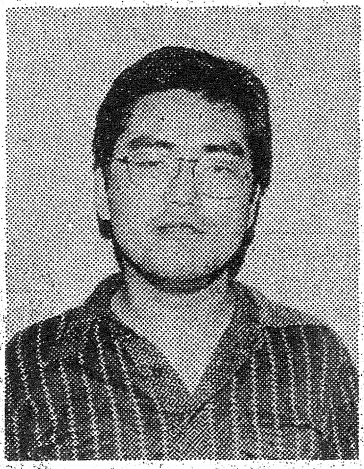
Aさんは「電話」の次に、病気とかケガの表現ばかり集め始めた。「彼は胃ガンで死んだ」から、病院での医者と患者のさまざまなやりとり「交通事故で三カ月の重傷を負った」などの表現を片っぱしから覚えた。「電話」「病気・ケガ」「スポーツ」「政治」「経済」……と分野が増えるにつれ、会話力は雪だるま式に向上した。

これらの学習で、Aさんが痛感したのは「自分の表現力がいかに貧弱だったか」ということ。また、英会話は何らかの目的がないと長続きせず、自分の実力の伸び具合を客観的に判断できないため、途中でやめるケースが目立つ。この点「電話」「病気」といった分野ごとの勉強なら、進歩状態がはっきり分かり、励みになる——とAさんは話している。

なぜ英語が話せないの

会話上達法―第三部―

〈31〉



毎日こつこつ努力しようと語る真崎さん

英語でモノを考える

反復努力が上達のカギ

Do you believe (in) god?（神を信じますか） He died (of) stomach cancer.（彼は胃ガンで死んだ） She graduated (from) Tokyo University.（彼女は東大を卒業した）

三つの簡単な文例がある。英米人には何でもない表現だが、外国人が「動詞」プラス「前置詞」をすらすら口に出せるまでには、相当の反復練習を要する。

筑後地方の若手英語教師で三年前結成した「久留米英語講習会」代表、真崎良幸・第一経済大学講師(三五)は「実用会話上達のカギは継続努力。毎日、少しでも多くの文章や表現を覚え、実戦に役立つよう磨いておくことが大切」と指摘する。

真崎講師が英語に興味を持ったのは、中三でアメリカ人と文通を始めたのがきっかけ。「英語はとにかく中断せずに勉強せよ」という恩師の教えを守って、高校時代はESSクラブに籍を置き、NHKのラジオ英語講座は三年間、一度も欠かさず聞き続けた。

「高校のとき、年一回の文化祭でベニスの商人、リヤ王などのシェークスピア劇をやり、長いセリフを覚えたことが実用会話に随分、役立ったんです」

日本人の英語が伸びないのは、完全主義や恥の文化が進歩を阻害しているからだ、といわれる。この点「人前で英語をしゃべるのは度胸がつくし、セリフを少々、間違えても他の表現でカバーしたり、臨機応変の言い換えができるようになる。完全にセリフを覚えるより、言葉の流れ、抑揚を身につける方が重要である」。

上智大学英文科に進学した真崎講師は、シェークスピア研究会に入り「真夏の夜の夢」「ロミオとジュリエット」「十二夜」などで多くの役を演じた。セリフを暗記し、原文を読む。会話の自信もついてきた。

ところが、外人講師の講義に出ると、全くついていけない。「なにしろ一時間の授業で五十ページも進むんです。米国の大学一年生のスピードと聞いてガク然としました。新たな壁に直面して速読練習も始めた。ヒマなときは英語本にかじりつき、四年間で約三百冊を読んだ。

「大学時代は松本亨先生（英語教育者）の影響で、英語の中で生きようなんて決意しました。英語でモノを考える習慣をつけようと、必死でした」

例えばswim（泳ぐ）という単語があれば、頭の中でmove about in the waterに置き換える。「英語を日本語に訳して理解するのはダメ。日本語が途中、頭に浮かばず、英語だけで直接、理解することが大切」と強調する。また、発音の悪さを気にする人が多いが「独特のアクセント、抑揚を有するインド人の英語も十分通じており、要は〝あつかましさ〟と積極性が会話上達の秘けつ」と話している。

なぜ英語が話せないの

会話上達法―第三部―

〈32〉



単語や文法にこだわらず、何度も音読しようと語る戸田先生

「英文を読むときは、辞書を先に引くのではなく、後から使おう。少々、知らない単語があっても、前後の文脈から推量できるし、自分の推量に狂いがないか否かを確かめるために辞書を引くよう習慣づけよう」

米国に十四年間、留学した加藤恭子さん（上智大講師）は、その著「こんなふうに英語をやったら？」に、こう書いている。

高校や大学で長文を読む際、完全主義者のニッポン人は、知らない単語を全部、辞書で調べる。先生はワンセンテンスずつ文法的な注釈を加えながら、英文を日本語に置き換えていく。この結果、一ページ進むのに一時間以上もかかるのはザラで、生徒たちはウンザリしてしまう。英語嫌いになる学生も多い。

久留米市東町で「実践英語セミナー」を開いている、戸田昭二・学院長（三）は、こうした英語教育に反発して西南大学時代、教材のシェイクスピアの「真夏の夜の夢」を辞書なしで読んだ。

「辞書を引かない代わりに、一章ごと声を出して何回も読むんです。もちろん、見たこともない単語は目白押し。十五回ほど読むと、未知の単語の意味がぼんやり分かる。暗記するぐらいになると、推量に相当の自信が出てきます。結局、この小説を二年がかりで百回近く読みました。あとで辞書で自分の推量が当たったのを確かめたときは、うれしかったですね。間違いもありましたが、速読の訓練になり、実用会話にも大いに役立ちました」

戸田さんは、この要領で「ミングウェイ、フォークナー、D・H・ロレンスらの小説を次々に読破。アガサ・クリスティの探偵小説だけでも八十冊は読んだ。「単語や文法にいちいちこだわらず、声を出して徹底的に読むことが大切」である。

「声を出して読もう」

知らない単語は推量で

米国の大学に留学する日本人が、第一に驚くのは宿題の量。一週間に最低、三冊は読まされ、それについてのレポート、そして試験。これが毎週毎週続く。一ページ読むのに一時間もかかったのでは、どうにもならない。

会話についても、同じことが指摘できる。日本人が英語をしゃべるとき、必ずといってよいほど頭に浮かぶのが文法的思考。完全な文章にして話そうとするあまり、五秒、十秒と頭の中で考え、それから口にする。会話で最も大事なのは、この文法的思考を完全に消し去ること――戸田さんは、こう強調する。

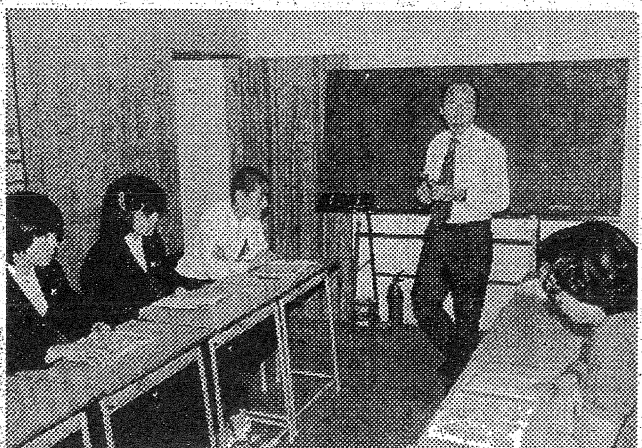
「日本語を話すとき、いちいち文法や文型を気にする日本人がいますか。日本語がしっかり消化でき、体で覚えているからこそすらすら出るのです。英語も同様で、忍耐強く努力してサッと表現が出てくるよう訓練することが上達の秘けつです。入試に偏向せず、効果の上がる英語教育を実施すれば、中、高校の六年間で生徒たちは英語がペラペラの段階まで実力を伸ばせるでしょう」――。

かつては、通産大臣の通訳も務めたことのある戸田さんは、英語一筋三十余年のベテラン。その言葉は示唆に富んでいる。次回は、戸田さんの〝英語論〟をさらに詳しく紹介する。

なぜ英語が話せないの

〈33〉

会話上達法―第三部―



英会話は発音、語法、表現力などに優れた日本人から習うのがベターと語る戸田先生

英会話を習うなら米英人に限る、と考えている人がいる。確かに発声やヒアリング、正しい英語の学習に、これほど優れた教師はいない。だが、半面「一年間、アメリカ人に英語を習ったが、あまり上達しなかった」と嘆きの声も聞かれる。かつて米国に留学した久留米市の会社員も同じ経験をした一人だ。

「ミシガン大学生三人と二つの部屋で十一カ月、生活しました。最初はこちらの発音が悪いと矯正してくれたり、毎日が会話の特訓を受ける感じで、大いに役立ちました。でも時間がたつにつれ、相手は私が不完全な英語を話しても以心伝心、その意図するところをすぐに理解するようになる。カタコト英語でも十分、になるわけです。そうなれば会話力の進歩はストップ。他のアメリカ人との会話はそうはいかず、これではいけないと真剣に悩みました」

戸田昭二・実践英語セミナー学院長（三＝久留米市東町＝は「英会話の先生を選ぶ場合、ネイティブ・スピーカーより、発音、表現力、語法、外国の習慣にも通じた日本人の方がベターだ」と指摘する。

米国では、標準語圏である中西部、早口でまくしたてるニューヨーク、日本人には理解が容易でないナマリをもつ深南部の英語……と同じ米語でも随分、違った印象を受ける。滞日中のアメリカ人の出身地はさまざまであり、中には母国語でありながら不完全な英語を話す者も少なくない。

「特に英会話の初心者が、いきなり外人の先生から習うのは考えもの。会話の基礎がないから、意思の疎通が出来ず、自信喪失に陥る。幼児や小学生ぐらいなら、外人教師の方がいいが、盲信的に英会話は外人からというのは再考を要する」と、戸田先生は言う。

もちろん、どちらも理想的なら外人教師の方が日本人教師より優れているのは当然。ただ、日本人の先生は、日本人の英会話の欠点を熟知しているだけ有利」である。問題は、日本人の欠陥を克服してくれる実力を備えた日本人の英会話の先生が極めて限られていること。会話上達は、先生の選択が大きなカギを握っている、といえよう。

カギ握る先生の選択

忍耐強い努力が肝要

「英会話は、カセットなど視聴覚機が発達した現在、教師なしでも十分、独学できる。自分の英語の実力より一まわり低いレベルの英文を繰り返し朗読し、試しに教科書の各レッスンを百回ほど音読してごらんなさい。とにかく、忍耐づよい努力が肝要」である。

外人英会話教師も満足にいなかった明治時代、日本には国際的な仕事を国際舞台で、外国語を使って堂々とやってのける人たちが目立った。「茶の本」（The Book of Tea）を書いた岡倉天心、それに内村鑑三、国際連盟の事務局次長だった新渡戸（にとべ）稲造＝昭和五十九年から五千円札の顔として登場する＝らである。彼らの努力は大したもので、英会話で大切なのは会話教師がどうのといった〝学〟の方法より、むしろ本人の〝意志の固さ〟であることをうかがわせている。

なぜ英語が話せないの

〈34〉

会話上達法―第三部―

必要な目的意識

繰り返し音読すること

NHK英会話講師や同時通訳など多彩な活動家、国弘正雄さんは旧制神戸一中時代、同級生のSF作家小松左京、俳優の高島忠夫両氏に「オレは将来、外国と日本の懸け橋になる」と断言。二人から「誇大妄想狂みたいなヤツ」と笑われた。

「当時は終戦直後。空襲はなくなったものの、極度の食糧難の時期であり、私自身、いつの日かホワイトハウスに何回となく出入りしたり、日本の首相と米大統領、国務長官とたった四人の会話に参加するなど想像もしなかった」と、国弘さんはその著「落ちこぼれの英語修業」に記している。

十代だった国弘さんが尊敬したのは詩人の安積得也。彼は「未見の我」という新造語をつくって若者を鼓舞した。「五年後、十年後の自分に会った人はいない。ただ、将来は現在の延長線上にあり、努力次第では限りない可能性が秘められている」と増美さん（サイマル・インターナショナル社長）は指摘していた。

英会話の勉強も、その人なりの目標がある。目的達成への意志が固いほど長続きし、成果も大きい。「教養のための英会話では、日常会話の域を出ず、留学や通訳、外交官を目指せば、それだけの上達が期待できる」と、同時通訳の第一人者、村松増美さん（サイマル・インターナショナル社長）は指摘していた。

かつて四十代以上の世代は、親たちから「末は博士か大臣か」に象徴される〝理想像〟を吹き込まれた。この〝標語〟は、悪徳大臣が数多く出現、博士号をもつ教授陣も指導性のなさ、ふがいなさが、大学紛争を通して暴露されるに及んで、自然消滅した。今、こんなことを言えば、若い人たちは「ナンセンス」と反発しよう。

しかし、現代には、かつての野口英世のように若者たちの進路決定に刺激を与えた人物も皆無に近い。世の中、平和で国民全体に無目的な生活観が漂う。このような時代には、恩師、先輩、同級生、父兄、だれでもいい。良い意味での刺激を感じて、自分なりの目標を立て、ひたすら精進を積み重ねるしかない。国弘さんは「一期一会をいうが、人々の出会いが、その人の人生を大きく変える場合がある」と強調する。久留米市東町で実践英語セミナーを開いている戸田昭二さんは「恩師の影響で英語で身を立てようと決心。米人家庭に住み込んだり、米人宣教師のいる教会に出入りしたり「英語以外は目もくれない生活を続けた」。

外国語の学習は、何らかの目的がなければ退屈極まりなく、また根気も続かない。トロヤの遺跡を発掘した考古学者のシュリーマンは、苦もなく十幾つもの外国語を身につけた天才だが、これは例外である。ただ、国弘氏もシュリーマンも「外国語の上達法は、やさしい文章を何度も繰り返し音読すること」と一致した意見を述べているのは注目してよい。

英会話は努力次第でかなり上達すると語る国弘正雄氏の本

なぜ英語が話せないの

〈35〉

会話上達法――第三部――

必要な外人との会話

初歩的な表現を暗記しよう

米国ユタ州・ソルトレークシティーに〝総本山〟のある「末日聖徒イエスキリスト教会」（モルモン教会）は、世界各地に若い宣教師を派遣して活発な布教活動を行っている。久留米市でも現在、四人の若者が街角に立ち、流ちょうな日本語で神や宗教について語りかける。

宣教師の一人、リード・ファエストさん㈩は八カ月前、日本にやってきたが、今では日本語会話はペラペラ。「漢字は苦手」とはいえ、短期間での上達ぶりはわれわれの目には驚異とさえ映る。彼は中学、高校、大学で日本語を習ったわけではない。日本語に関する知識ゼロの状態から、アッという間に相当レベルの会話を習得してしまった。

「学生時代、知ってた日本語といえばサヨナラぐらい。日本への派遣が決まったとき、約二カ月間、日本語の集中特訓を受けました。一日八―十時間、かん詰めになって日本語の上手な先生から習うのですが、文法や単語より中心は会話。大半の時間は覚えたことをオウム返しにしゃべらされました」

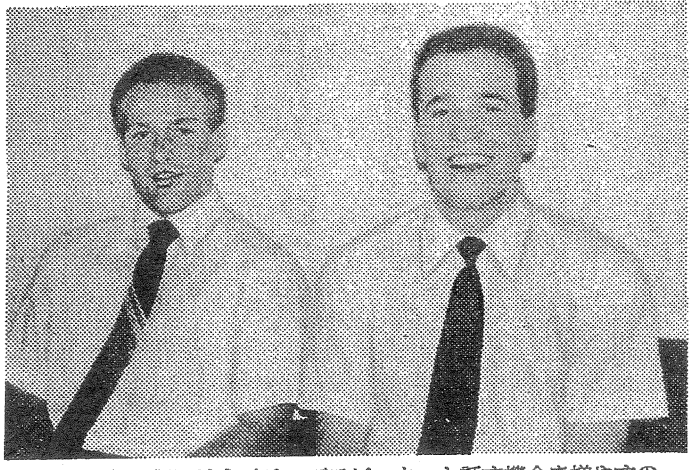
同教会の外国語習得法は「SYLプログラム」（スピーク・ユア・ランゲッジの略）と呼ばれる。その方法は英語の学習でいえば、関係代名詞や前置詞などは一切、後回し。まず、日常会話に必要なものをスパルタ方式で詰め込まれる。

ファエストさんは「こんにちは。私の名前は××です。○○出身です。△△歳になります」――と初歩的な表現を理屈抜きで暗記した。同時に一から十までの数え方、続いて歌に合わせて頭、肩、ヒザ、足など体の各部分の呼称を覚えるといった具合。特訓中は英語の使用は禁止され、言語のしゃべれない乳幼児同様、親（先生）の言うことを繰り返し口にし、自分のものとするしか方法がない。

さらに十分な基礎がないうえに、難しい単語や概念の説明を要する宗教を、どう分かりやすく日本人に話すか――反復練習する。短期間のうちに、ごく大ざっぱな〝骨格〟だけを習って来日。あとは度胸と熱意が大切で「一日平均五時間も日本人と話していれば、例え半年間でも会話能力は急カーブで上達する」と、同僚のエドモンド・カドザさんは指摘している。

ファエストさんは大学時代、ドイツ語を習ったが、ドイツ語を話す人間（ドイツ人など）と会話の機会がなく、モノにならなかった。「外国語の習得には、ネイティブスピーカーと出来るだけ多く会話を交わし、恥ずかしがらずに前進することが肝心。日本人は文法や単語にばかり神経質で、文章を覚えようとしない。ビートルズの歌は意味が分からなくても歌詞を知っているのに……。会話も歌のように、そっくり暗記すればいい」。

同教会は、毎週月、木、土曜日に同市通町十丁目三九八ノ二、高尾ビル、0942（32）0267で英会話を無料教授している。その会話教室では「正直」について話し合ったり、英語ゲームをしたりで、退屈な文法や単語に重点を置くことは決してない。



「外国語習得にはネイティブスピーカーと話す機会を増やすのが近道」と語るファエストさん㊧とカドザさん

なぜ英語が話せないの

〈36〉

会話上達法 ―第三部―

相手国内情も学ぼう

会話の理解が一層容易に

◆◆エスキモーには、日本語の「雪」に相当する単語がない。その代わり「吹雪」「豪雪」などを意味する単語は二十を超える。雪に覆われた極寒の地では、雪そのものを表現する単語では〝無意味〟なのだ。

◆◆アメリカの女流人類学者ルース・ベネディクトは、米政府に依頼され「不可解な敵国ニッポン」を徹底的に研究。米国で天皇の機能や役割は、アフリカの部族の酋長（しゅうちょう）とどう違うのか――という疑問さえあった時代に、名著「菊と刀」を書き上げた。彼女自身（終戦直後、死亡）は、一度も来日の経験がなく、日本語もあまり達者でなかったが「外国人が日本の社会を、よくここまでトータルにとらえたものだ」と好評を博した。

外国語を学ぶうえで、二つの話は、多くの示唆に富んでいる。すなわち言語は、その国の歴史、文化、生活様式は言うに及ばず、気象にも大きな影響を受ける。異国の言葉を十分に理解するには、これらの背景に加え、政治、経済、宗教など広範囲な勉強も必要となり、単なる語学の学習、では、限られた成果しか期待できない。逆説的に言えば、相手国の内情に精通すれば、少々語学力が乏しくても理解は格段に容易になる。

久留米市東町の実践英語セミナー。ここでは中、高、大学生、OL、会社員、主婦らが能力に応じたクラスに編入され、会話を学んでいる。経営者の戸田昭二学院長は、かつて通産大臣の通訳も務めた語学のエキスパート。英会話一筋の青春時代を送り〝語学てんぐ〟になったころ、関西の貿易会社に就職した。

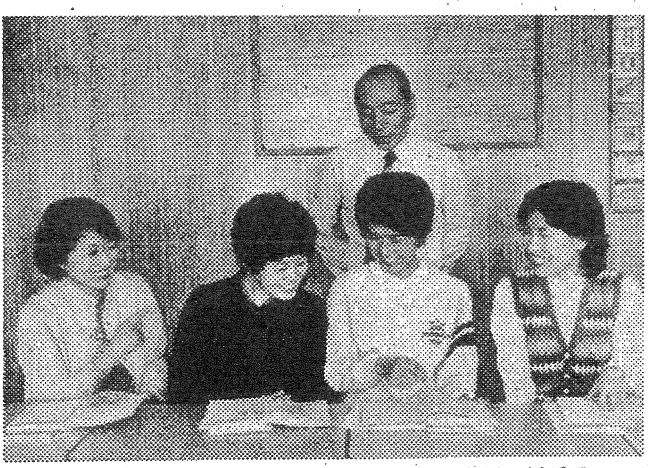
「ところが、経済の知識がなく、専門家には片言英語でも理解出来ることが、さっぱりのみ込めない。それまでの自信が音を立てて崩れた感じで、勉強のやり直しでした」

戸田先生は、この苦い経験から塾生たちに繰り返しアドバイスする。上級クラスにいる主婦の宮崎和子さんは〝単なる英語学習以外のもの〟を学ぶ姿勢の大切さを小、中学校に通う自分の子供にも教え始めている。

同クラスには、米国留学の経験をもつ吉村松子さん、塾で小中、高校生に英語を教えている平井貴子さん、中村久美子さんらが在籍し、学習風景は活気にあふれている。

吉村さんは「米国に一年間生活してみて、事前に米社会のことをもっと勉強していればと痛感した」と話す。

セミナーに通ううち、彼女たちの英語に対する考え方も変わってきた。中村さんは、かつて自分の教え子に「この形容詞の場合、アクセントの位置はここ」といった具合に、機械的に暗記させていたが「今では何度も発音させ、理屈抜きに体で覚えさせている」。平井さんは、テープなどを利用した反復練習が不可欠とする一方「会話だけに偏らず、読解力の向上など総合的なレベルアップが肝心」と指摘している。



英会話は自分で積極的に学習のチャンスを見つけることが大切（実践英語セミナーで）

なぜ英語が話せないの

会話上達法＝第三部

〈37〉

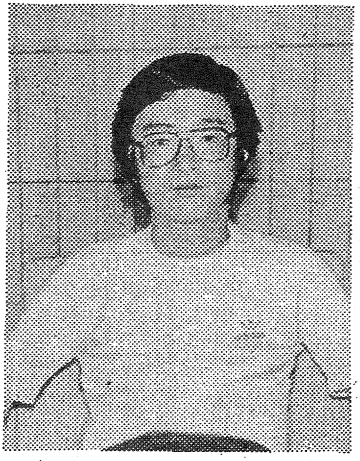
細かな表現力の向上を

日本との欧米の小説の乱読も役立つ

洗剤（detergent）ねじ回し（screw-driver）押しピン（thumb-tack）懐中電灯（flash light）靴ヒモ（shoe-lace）…。語学に強いはずの留学生が米英で生活してみて、最初に困るのが、これら日常用品の単語。バッテリーに補充する蒸留水は「バッテリー用の水」でも通じるが「distilled water」と注文するのが一般的である。

田中睦福島高校教諭（こ）は大学時代、サンフランシスコに一年半、滞在した経験をもつが、同じ〝苦痛〟も味わった一人。

「生活必需品の単語を知らず、不便極まりない。仕方なく一週間スーパーに通い詰めて、知らない商品名（単語）を片っ端から服に努めた。



細かな気くばりが必要と語る田中先生

らメモしたんです。そしたらゆうにノート一冊分になって…。自分でも驚きました」

次に閉口したのがスラング。特に相手が興奮した際に、意味不明の表現がポンポン飛び出す。ケンカの途中で「ちょっと待て。それは何のことだ」と聞き返したことも。ヒッピーと付き合い、スラングを頻出する映画を一日中見るなど、欠点の克

「ヒモの端を握って、靴の小さな穴に通し、引っぱり、さらに…という具合で、意外に難しいんです。満足な回答が出来ないでいると、外国語のマスター

田中先生は帰国後、合格率三―五％の難関である「英検一級」にパス。米国で皿洗いをしながらの苦労が実って、キャンパスだけでは学習出来ない広範囲な会話力も身につけた。

ところが、久しぶりに再会したカナダ人宣教師が、自分の靴を脱いで靴ヒモをほどき「英語で説明しながらヒモを元通りにしました」

苦い体験から、田中先生は英はかゆい所に手の届くようなキメの細かなものでないと不十分と言われ、再び自信喪失に陥りました」

大学では、外人講師や友人などから良い意味での刺激を受け、敏感に自己啓発に取り組むことが大切。言葉は感受性であり、常に英語の表現に神経をとがらせておく。例えば「素晴らしい」「美しい」といった形容詞の代わりに、これらの形容詞の内容をリアルに表す動詞を使えれば、それだけ生きた英語になる。動詞の活用はもっと考えてよい。

田中先生は大学時代、日本と欧米の小説（日本語訳）を乱読して、発想法の違いを勉強したのが役立った、とも指摘している。語学には、こうした細かい気くばりが欠かせない。

会話の上達法について、こんな具合に話している。

中学校時代は、テキストを一日も欠かさず一課から習った所まで大きな声を出して読む。これだと暗記する気がなくても、反復練習の成果で全文がスラスラ口に出るようになる。

高校では、時間があれば英会話クラブに在籍すること。文化祭などで英語劇をやり、長い会話を覚えるよう努力する。テープなどを使い、日本語にない英語独特の発音を学ぶ。

なぜ英語が話せないの

〈38〉

会話上達法―第三部―

文章の暗記が必要

やる気と努力も大切

英語がペラペラの鳥飼玖美子さんは、同時通訳の世界に興味を持ち、上智大二年のときテレビ局に同時通訳者として起用された。やる気があるからチャンスが生まれ、道が開ける。

大牟田市の明光学園高校三年で、合格率三―五%という最難関「英検一級」にパスした田代琴子さん(二九=現在、上智大一年=の場合も軌跡は似ている。

英語に興味を抱いたのが明光学園中等部(中学)に入ってから。担任の浦田新子先生から「教科書を暗記してごらん」と勧められたのがきっかけだった。米国で生活したこともある浦田先生は、日本人には出来ない発音を細かく指導。「正しい発音には自信があった」と話す。

中学校のテキストは全部暗記して、中二で英検三級、高一で同二級合格とトントン拍子。「少しも慣れました」と琴子さん。若い中の田代さんは、実力に応じて飲み込みの早い時期での留学とはいえ、英語にかける執念と頑張りは素晴らしい。

田代さんの前進は続く。高三では全日本青少年英語弁論大会に挑戦。アメリカでの生活体験をまとめ「心」という題で五分間スピーチ。高校英語弁論日本一に輝いた。この勢いで英文和訳、和文英訳、スピーチ、ヒヤリングなどから成る英検一級試験も「あきらめていた」のが見事、合格。大学の英文科卒業生でも難しいテストだけに、英語関係者を驚かせた。

現在、上智大英語学科に在籍中の田代さんは、実力に応じて分けられた四つのクラスのうち、最上級の組で英語を勉強している。このクラスは、外国で生活して帰国した学生も多く「授業外の会話は英語と日本語が半々ぐらい」という環境。「日本語より英語が達者の人もいて、私なんか〝ただの人〟です」とニガ笑いする。

田代さんは「次の目標は通訳検定一級試験の突破」と、新たな意欲をみせ「将来は英語を使った仕事を選びたい」とヒトミを輝かせている。

英会話上達法を田代さんに聞くと「第一に英語が好きになること。そのためには教科書、とくに中学校のやさしい文章を全部暗記するのが早道」と指摘。英文は何度も何度も声を出して読み、英会話クラブに入れば、特に難しい学習をしなくても努力次第では、かなりの進歩が期待できる――と強調している。



田代　琴子さん

なぜ英語が話せないの

会話上達法―第三部―

〈39〉

理屈抜きで口に出す

母国語学んだ同じ方法

「外国語の習得は、母国語を学んだのと同じ方法でやるのが望ましい。幼い日には〝アーアー〟のような寄声の期間があり、続いてパパ、ママを覚え、少し長じるとピイピイと呼んでいたものが鳥であることを理解する。幼児の頭の中には、言葉より先に〝物〟や〝経験〟があり、次第に単語力を増やし、より複雑な文章を構成していく。英語の学習も本来は、こうあるべきだ」

かつて会話が全く出来なかった加藤恭子さん（上智大講師）は、その著「こんなふうに英語をやったら？」の中で、外国語の体験的マスター法を、こんな具合に紹介している。

加藤さんの指摘どおり、語学の習得は無心に学べる若いときほど効果が大きい。中学生になると、精神年齢が邪魔になり、かつ入試英語の制約を受けるため、実用会話の伸びはあまり期待できない。各地で幼児や児童を対象にした英会話塾が増加しているのも、このためである。

筑後地方では、こうした背景のなか、小学校に〝英会話クラブ〟をつくる学校が出てきた。まだ、草分け的な存在ながら、二年前に設置した浮羽郡浮羽町の御幸小に続いて、久留米市の長門石小にもこのほど、小学校の先生が指導する英会話教室が誕生した。

御幸小（尾花光信校長、児童約九百五十人）の場合、毎週火曜日の「クラブの時間」に四―六年生の児童二十五人が一つの教室に集合。大学時代、二カ月ほど米国で生活したことのある桑野妙子先生から、基礎会話を習っている。

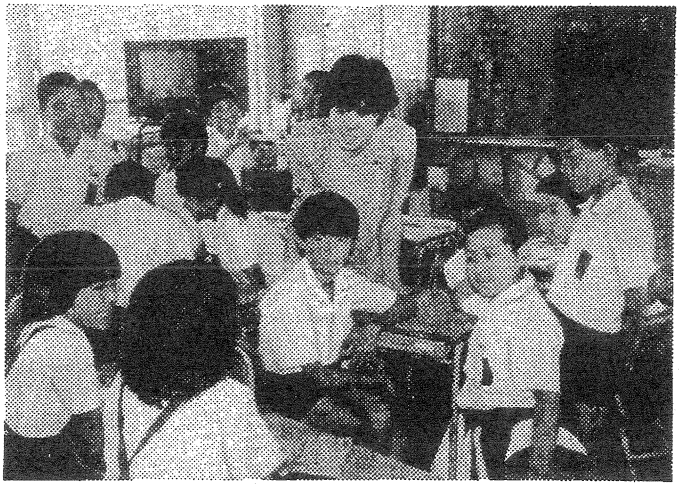
「なにしろ、アルファベットはもとより、単語も全く知らない児童が相手ですから、言葉を知らない乳幼児に片言語を教えるのと同じ。理屈抜きで、何回も何回も口に出させるしか方法はありません」と、桑野先生は話す。

例えば、友達の名前を覚えるゲームをする。先生のオルガンに合わせてCan you sing your name to me?（君の名前を私に教えてよの意味）と児童の一人が歌う。この児童から指名された児童は、自分の名前を「かずお、かずお」といった具合に二度、歌の調子に合わせて答える。さらに答えた児童は、同じ歌で他の児童の名前を聞く。クラブ員を一巡するころには、全員が質問文を暗記している。また、英語の発音に親しむため「ドレミの歌」「メリーさんの羊」「ABCの歌」などを英語で歌う。

一方では、身近な単語（本や机、先生、犬など）を少しずつ覚える。簡単なあいさつをお互いに言えるようにする。教室が騒がしくなると、桑野先生は「Be quiet」（静かになさい）と注意する。

同校には、野球、手芸、演劇部……と多彩なクラブがある。英会話クラブ員の赤司一夫君（五年）に入部の動機を聞くと「おもしろいから」と屈託のない答え。佐々木太郎君（同）のように、テープで英会話を勉強する子も出てきた。

桑野先生は「週に一回では、子供たちは前週のことを忘れかけている。もう少し時間が増えれば……」と残念がるが、久しぶりに出会った教え子の父兄から「息子もおかげで中学に行っても英語が好きで……」と言われたりすると「本当によかった」と、しみじみ思う。



桑野先生を囲んで無心に英会話を学ぶ御幸小の児童たち

なぜ英語が話せないの

〈40〉

会話上達法──第三部──

表現を豊かにしよう

ノートにメモする習慣を

言葉の習得は、徹底的に模倣することに始まる。母親の言葉をまねし、兄や友達のおしゃべりを覚えて自然に自分のものにする。会話には〝決まり文句〟が多く、相手が頭を下げて「先日はどうもありがとうございました」と言えば「どういたしまして」と答える。

英会話でも相手が「Thank you」と言えば「You're welcome」や「Don't mention it」「Not at all」「That's all right」「That's all right」「That's all right

なぜ英語が話せないの

会話上達法―第三部―

〈41〉

大切な環境づくり

まず慣れることが肝心

「Good morning Eriko! Breakfast is ready. Wash your face and be at the table」「OK, wait a minute, mother」（おはよう。朝ごはんが出来ましたよ。顔を洗ってテーブルにかけなさい。ちょっと待って、お母さん）

久留米市野中町に住む佐田絵里子ちゃん㈣つは毎朝、母裕子さん㈢と、こんな会話を交わす。絵里子ちゃんはアルファベットも知らないが、発音はアメリカ人が驚くほどきれいで正確。中1の英語テキストならすらすら読め、わずか八カ月前に英会話を始めた幼児とは思えない進歩ぶりだ。

絵里子ちゃんが英会話に興味を持ったのは、兄の考史君㈡が二年ほど前から同市東町の「ディズニー英語教室」（隈本和生室長）に通い出したのがきっかけ。同教室は「母国語方式英語教育法」による幼児童の才能教育を展開しており、英語学習を遊びの感覚で積み重ね、体で覚えさせることに主眼を置いている。

「三―六歳児の記憶力、集中力は大変なもの。母国語を教える要領で子供たちの模倣本能をさせることが肝心です」と、隈本さんは強調する。

絵里子ちゃんは朝六時半に目覚めると、ベッドの中でテープを聞き、昼、夜にも気が向くとカセットのスイッチを入れる。ミッキーマウスや白雪姫が登場するディズニー教材は、千の単語や会話文の入った五百十枚のカード、十二冊のテキスト（絵本市）、それに英語の歌も百曲含まれている楽しい内容。好きで毎日やっているから「発音、リズム、抑揚など、ネイティブ・スピーカーに近い水準にまで上達している」（絵里子ちゃんと話したアメリカ人の評）。カードやテキストの丸暗記だけでなく、最近では英語で自己紹介も出来るようになった。

ディズニー英語教室には現在、約百人の幼児童が通っているが、隈本さんは「子供たちにとって最良の教師は、教室の先生ではなく母親だ」と指摘する。すなわち、子供たちの能力には生まれつき大きな差はなく、環境しだい。母親が愛情と熱意を示し、子供と共に聞き、見、そして学ぶ姿勢が大切である。

バイオリンの英才教育で知られる才能教育研究会（本部・松本市）の鈴木鎮一会長は「楽器を伸びる」と話している。

絵里子ちゃんは、このところ「図書館から英語の童話本を借りてきて」と裕子さんにせがむ。



英会話の基本教育を受ける佐田絵里子ちゃん（右）と母親裕子さん

にせよ、英会話にせよ、親が子供心にかえって一緒に楽しく遊びながら導いていけば、子供の力はかなりの段階までは自然に単語のスペルは書けなくても、音に出せば大抵、意味は分かる。中、高校生のように翻訳する気持ちほさらさらなく、母国語を学ぶのと同じ要領で理解する。

「大きくなったら、お嫁さんか、大学の英語の先生になりたい」というのが絵里子ちゃんの夢。

なぜ英語が話せないの

会話上達法＝第三部＝

〈42〉

和製英語にご注意

正しい表現の勉強が必要

日本人には正しい英語の表現と思われても、欧米人には奇異に映ったり、キザに聞こえる〝ジャングリッシュ〟（和製英語）が巨立つ、と英国の詩人、ジェイムズ・カーカップ氏は警告している。

例えば、万国博の英語のテーマ「Progress and Harmony for Mankind」（人類の進歩と調和）は、本質的には陳腐で退屈な見本市に、精神的な高揚の雰囲気を与えるべく作られた、いやに気取って道徳的なスローガン。これは英語を故意に傷つけるもので、英語を母国語とする人なら、こんな誇張した不誠実な文句は絶対に使わない。

マイカー、マイホームといったマイの乱用も外国人には耳障りで、「マンションに住んでいる」と言えば、相手は相当なお金持ちと思う。東京に住むアメリカ人留学生の住所が、たまたま○○マンション（実際は2DKの団地）で、故国の両親に住所を知らせたところ「お前のような貧乏学生がマンションに住めるはずがない」と、説明を求める手紙が届いたという話もある。

会話でよく使う「I, ve do you do?」を文字通りにとって、現在の健康状態を答える人が英国人にもいるが「こういう人は育ちの悪い人だと思われる」。「I'm fine, thanks」（元気です）とか「I have stomach-ache」（腹が痛みます）などと言ってはならない。

カーカップ氏は、こんな注意もしている。第三者から英国人を紹介されたら、握手をする。相手は「How do you do?」（はじめまして）とあいさつする。これには何も言わないが、語尾を上げずに同じように「How do you do?」と答える。「How heard much about you」（おうわさはよくうかがっています）は、相手に親しみを示す表現だが「俗っぽい印象を与え、きいたふうな顔つきをするヤツと思われがち」。「Can I buy you a drink?」（一杯おごろうか）は米国では、よく使うが、英国では「buy」が失礼な響きに受け取られる。知らない人にサインを求めてはいけないが、多くの日本人は「May I have you sign, please?」と言う。だが、このサインは和製英語。「autograph」または正式の文書なら「signature」である。英国では、署名者が字を書けない場合、署名の代わりその人のサイン（大抵は十文字）を書くのが認められており「Put your sign here, please」（ここにしるしをどうぞ）と言えば、字の書けないことになる。



外国語には細かい気配りが大切というカーカップさん

一方で、カーカップ氏は「外国人が英語の慣用句、とくに正しい慣用句を用いると、非常に妙な感じがする。平易な英語を話し、凝った言葉や文学的な言い回しやendeavour（努力する）zeal（熱心）など堅苦しい単語は避けるべきで、もしそんな言葉を使ったら、学問を鼻にかける人間だと思われるだろう」とも指摘している。

外国語を話す際は、相手国の習慣や表現の仕方を知らないと恥をかいたり、失敗するが、過ぎたるもまた及ばざるがごとし——である。

なぜ英語が話せないの

会話上達法―第三部―

〈43〉

英字新聞を読もう

必要な生きた単語の暗記

かつて英国大使館（東京）にデニソン・エドソンという書記官がいた。オックスフォード卒の俊才で、アッという間に日本語が上手になった。来日後わずか一年で、丁々発止とまではいかなくても、かなり流ちょうな日本語を話した。

パーティーで彼の家に招かれたとき、ふと机の上を見ると、分厚い大学ノートが五冊。中には単語（日本語）がビッシリ書き込まれている。その横には英語で意味が列記してあり、毎晩、妻と二百ずつ単語を暗記している、という。

エドソン氏は、これらの単語を毎朝、読む日本の新聞の中からピックアップした。同じ英国人でNHKテレビ英会話講師アラン・ブース氏が「日本の教科書や入試に出てくる基本的な単語千百五十語のうち、約二〇％は英語で使う基本二千単語にも含まれていないと指摘するように、実際、その国でよく使われる単語を覚えるには、新聞に出てくるものが最適である。

英会話にかなり自信がある人でも、米英人と経済問題の議論をするには、多くの専門用語の知識が必要である。『protectionism』（保護貿易主義）『deficit finance』（赤字予算）といった難しい単語から、アメリカ人が『ten bucks』と言えば十ドルの意味だし、一ドルコインは『silver dollar』であることを覚える。

英字新聞を読めば、政治、軍事、社会、スポーツ、音楽、天気予報…と実に多彩な単語が出てくる。教科書が入試に出る難解な単語が日常会話では、ほとんど役に立たないのに対し、こちらはより実用的である。そしてこれら生きた単語を知らないばかりに会話が続かず、気をもむケースも多い。

「外国語会話の上達を拒む厚い壁」の一つが、ボキャブラリー不足に起因していることは大半の人が承知していながら、弱点克服の地道な努力は意外になされていない」――エドソン氏はこう話している。

久留米市の会社員は、かつて東京勤務時代、往復二時間の国電通勤時を利用して一年間英字新聞を読み続けた。知らない単語が出ると赤鉛筆で印をつけ、帰宅して辞書をひく毎日。きのう調べたばかりの単語を翌朝には忘れていたり、悪戦苦闘したが不思議なことに五回、六回、同じ単語をひくうちに、いつの間にか暗記してしまい、面白い表現の英文は必ずメモして実用会話で積極的に使ううち、会話にも幅が出てきた」。

英字新聞に限らず、小説が好きな人なら、ヘミングウェイの『The sun also rises』（日はまた昇る）など、生きた会話がふんだんに出てくる絶好の教材もある。

語学、ゴルフ、囲碁といった習得に地道な積み重ねが必要なものは、努力を怠れば「下手の横好き」に終わるが、コツコツ続ければ「好きこそものの上手なれ」に変わり、喜びも大きい。



英字新聞には日常会話でよく使う単語や表現が多く含まれる

なぜ英語が話せないの

会話上達法――第三部――

〈44〉

集中かつ根気よく

1日に2時間 ダラダラは効果ない

「語学の学習は、記憶力と忘却との間断のない闘争である。ダラダラした勉強は効果がなく、できるだけ早く、一定のレベルまで到達しないといけない。速度が必要なのだ。宇宙ロケットは、一定速度以上の推力で上昇すれば、宇宙を回り続けるが、速度が弱いと、やがて地上に落下する」

〝死んだ語学〟の象徴・入試英語を改めるべく、昭和四十九年、自民党政務調査会に「外国語教育の現状と改革の方向」(試案)を提出した平泉渉・元参議院議員は、英会話上達で最も大切なのは〝集中度〟と強調している。

具体的にどの程度やれば軌道に乗るか――について、平泉氏は「週四時間では六年間かけても〇K」と指摘。毎日の学習量に換算すれば、一日一時間四十分ぐらいになる。

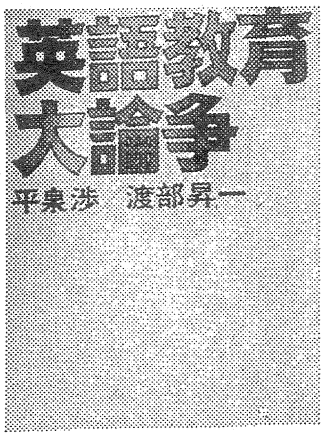
もちろん、学習時間は会話を学ぶ目的の違い、能力差などにより異なるが、根気づよく積み重ねるのが肝心である。久留米市東町で「実践英語セミナー」を開いている戸田昭二・学院長は「英語で独り言を言うほどの熟中期が必要」とし、半年、一年単位での集中学習を勧めている。

英検一級合格を目指す人のために「プラクティカル・イングリッシュ・コース」(文部省認定、日本英語教育協会)は一日二時間の学習を標準とし、それ以上は学習者のやる気により自由に任せている。このように会話をモノにするなら一日二時間前後の時間は欲しい――との意見が最も多いようだ。

机に向かっての学習を二時間とし、通勤、通学時や昼休みに繰り返し反復練習すれば、効果はさらに大きい。教材はあれこれ変えず、一つに限定して、一定期間に完了するよう計画を立てる。例えば「プラクティカル・イングリッシュ・コース(テープ付き)」を一年がかりでやり、重要な表現文例はノートにメモ。暇さえあれば暗記に努める。

平泉氏は「英語教育大論争」の中で「語学は外国に行きさえすれば……と、思うのは神話である。現実にニューヨークに何年暮らしても、会話がうまくならない人は結構多い」と述べ、独学でも地道な学習を推奨している。要は、まじめに会話に親しむことである。

「Good-by for now」(ちょっとの間さようなら)は別れてもすぐまた会えるときのあいさつ。「ごきげんいかが?」と聞かれて「Couldn't be better」は「至極元気です」の意味。「この電話、使っていいですか」に「Sure, go right ahead」(いいですとも、どうぞ)がすぐ口に出るようになれば、しめたもの。会話は慣れであり、言葉が反射的に飛び出すようになるまでには、集中かつ根気よい学習が絶対に欠かせない。



英語の習得には集中的な学習が必要と強調する平泉氏の本

なぜ英語が話せないの

〈45〉

会話上達法――第三部――

米英の映画を見よう

生きた表現勉強に最適

会話上達に格好の〝教材〟は、米英映画である。スラング、流行語が目白押しで、いわゆる生きた表現が随所に出てくる。意味のわからぬ言い回しも多く、アメリカ映画を字幕なしで七割以上も理解できる人は、会話の達人とみて間違いない。米国に一―二年、生活しても「せいぜい五割程度」と指摘する留学生もいる。

現在ほどテレビの普及していない時代は、朝から晩まで三―四回、同じ映画を鑑賞する〝英語熱中派〟が必ずいた。

「毎日、弁当持参で映画館に通う。初日に言葉を一切見ず、目が疲れたら音だけ聞く。スクリーンを見ながら何度も会話を耳にするから、最終放映までには大まかな内容はわかる。二日目。初回だけ字幕を追い、残りの回は音に頼る。三―五日目は音だけ。ただし帰宅後、シナリオを読む。六日目。最前列のイスに陣取り、会話を聞きながら小さな懐中電灯でシナリオと照合する。七日目。ヒアリングの進歩を確かめる。この二十数回も見る無茶がたたって、目の充血、疲労が激しかったが、一部暗記した表現がすらすら口に出たり、英語の音に少しずつ慣れてきた効果は大きかった」。

福岡市で英語を教えるA教授は、学生時代の会話との取り組みを、こう振り返る。映画英語は日常、頻出する表現が大半で、覚えれば大変な威力を発揮する。例えば、マフィアの抗争を描いた「ゴッドファーザー」の冒頭は、こんな会話で始まる。

「I believe in America. America has made my fortune. And I raised my daughter in the American fashion. I gave her freedom, but I taught her never to other boyfriend. They made her drink whisky ain God」と応用がきく。「raise」は育てる「take advantage of」は女性を誘惑する、の意味。下品な表現も映画には登場するので、全部使えるわけではないものの「会話力(ヒアリング、スピーキング)を伸ばすうえで、ぜひ一度は試みてほしい」と、A教授は勧めている。

イタリア系移民の葬儀屋ボナセラの会話で、表現が多少ギクシャクしているが、知らない単語があっても大体、理解できよう。「私は神を信じる」なら「I believe



映画のセリフをカセット化した本もあり、最近は会話勉強もラクになった

なぜ英語が話せないの

会話上達法—第三部—

〈46〉

会話のマナー知ろう

年齢、病気の話など禁物

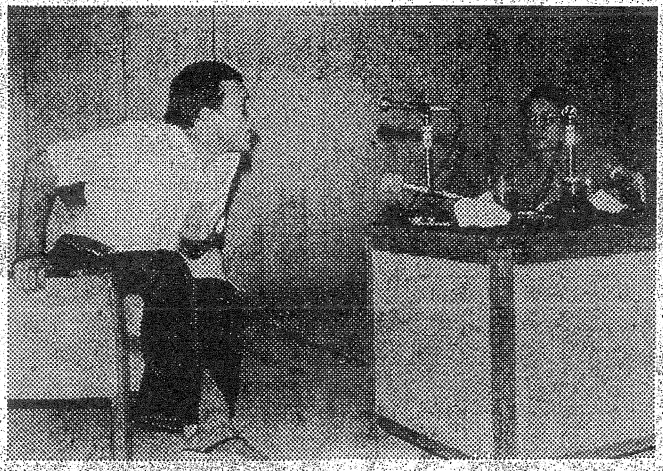
インド人はめったに「ダンニャワード」（ありがとうしたタブーを知っておくことは重要。同時通訳の第一人者、西山千氏は「What's your name?」「How old are you?」「Are you married?」「What do you think of Japan?」といった質問は避けるべきだと指摘している。

街角や電車の中で、外人を見ると「May I speak English with you?」（英語で話し合いたいのですが）と話しかける学生がいるが、これも失礼にあたる。会話は、自然の成り行きで始めるべきもの。明らかに道に迷っている様子だったら「May I help you?」と聞いてみる。列車で偶然、席を並べた場合、しばらくして何かのきっかけで話し始められよう。「英語で話したい」などと口火を切るのは、あまり不自然である。

相手の言葉がよく聞き取れないときは「I'm sorry I couldn't hear it」と言うのが礼儀。「Once more please」は失礼である。もし、うっかり相手の会話をさえぎったら「I'm sorry. I didn't mean to interrupt」（すみません。さえぎるつもりはありません）とでも言って相手に話を続けることを促すぐらいは英会話の常識である。

食事中は、病気のことや不快な話は避けるのも習慣の一つ。オナラの話やその他生理現象の話はよくない。それから極端なおせじや褒めすぎも逆効果になるケースが多い。

会話には、うまい料理、どこかの町のこと、日本のこと、個人的な経験……など内容は無数にある。相手がいろいろ質問しているのに「イエス」や「ノー」だけでは話は続かない。例えば、相手が「Have you ever visited Rome?」（ローマに行ったことがありますか）と聞いて「ノー」では、会話は切れる。しかし「No but, I'd like to go, tell me something about the city」（いえ、でも行きいですね。ローマについて何か教えて下さいませんか）と返事すれば、話は自然に広がっていく。会話は相手への心づかいがたいである。



なぜ英語が話せないの

〈47〉

会話上達法―第三部―

スラングを学ぼう

使用には注意が必要

野球用語の「ナイター」は和製英語。正しくは「night game」である。日本では「ガールフレンド」は単なる女性友達を意味することが多いが、米英人は「恋人」と解釈するのが一般的。初対面で外人に「私はあなたのガールフレンドになりたい」と切り出せば、相手は驚く。英会話を「English conversation」と言うのもナイティブスピーカーには聞き慣れない〝表現〟である。

アメリカ人が普通もっている語い（ボキャブラリー）は一万から二万語。うち一〇%から二〇%を占める二千語がスラングという。

語学の学習では、こうした各単語のもつ本来の意味に注意する一方、教科書には出てこないスラング（卑語、俗語）を覚えるのも上達法の一つである。

ある言語学者によると、軽侮の響きがあり、スピーチを省略して出来たスラングである。

例えば、警官（police officer）と〝敬語〟で呼ぶ。スラングは省略語が多く、doctorは通称、doc（ドック）。「映画ファン」で知られるfanはfanatic（狂信的の）から、mike（マイク）はmicrophone、bus（バス）はomnibus pianofortを省略して出来たスラング。

ド違反で捕まったような場合は、警官の心証を少しでも良くしようと「（police）officer」と〝敬語〟で呼ぶ。

スラングは省略語が多く、doctorは通称、doc（ドック）。

奇妙なものに「back slang」というのがある。逆に読むスラングで、日本にもドヤ（宿）ショバ（場所）などがある。

が、英語にもreeb（ビール）nottub（ボタン）といったものが押し。

また、mob（無な群衆）sneb（くとまったキザなやツジボールはここからいる）など、スラング普通の単語に昇格したもある。

ただ、会話で注意するのは絶対に使ってはないタブー語がある。親しい友人との会話もKでも、時と場所によは避けるべきものも多さらにスラングは流行ようなもので、数年後ほとんど使われない表なっていたり、一つのはやっていても、他では全く意味の通じなのがあるから、警戒が



スラングは生きた言葉と語るアラン・プース氏

なぜ英語が話せないの

〈48〉

会話上達法―第三部―

恥ずかしがらずに…

考え込むのはよくない

映画評論でおなじみの淀川長治さんは、自らの会話を「むちゃくちゃ英語」と称している。

米国でイチジクの木の下にアメリカ人と立っていたとき「イチジクの葉」（FIG LEAVES）がどうしても出てこず「アダムのパンツ」と言ったら、相手は大いに感心した顔で笑いこけた。

ニューヨークのホテルで、英語の達者な人が二人分の部屋（二室）を注文したが、フロントのルーム・サービス係に通じない。淀川さんは、とっさにデビット・ニーブンとデボラ・カーの〝旅路〟の原名が「SEPARATE TABLE」（別々のテーブル）と思い出して「セパレイト・ルーム」とやったら、すぐに通じた。ついでに「私たちはホモの仲じゃない」とつけ加えると、係りは大げさにウインクした。

「日本人の英会話下手は、恥の文化と完全主義からきている」と指摘する向きは多い。外国語は流ちょうに話せなくて当たり前。会話に自信がなくてもひらき直ってやれば、意外に意思疎通ならうまくいく。完全な文章を言おうとして、考え込むのもよくない。淀川さんは二十七歳のとき、クーリッジ号の船室でチャプリンと四十分間も二人きりで休むまもなくしゃべった。〝駅馬車〟を二十八回も見たほどの洋画通だけに、英語の表現力、会話力はなくても、話は通じた。専門分野のことはカタコト英語で十分。相手の関心を自分の精通していることに向けさせれば、会話はラクである。

淀川さんは、ロレッタ・ヤングがアカデミー賞をもらったとき「ついに」という「AT LAST」の間にLONGを入れて「アト・ロング・ラスト」と言ったのを覚えていた。そこでハリウッドで彼女に会ったとき「AT LONG LAST I VE MET YOU」といったら「OH!」と言って喜んだ。

レストランで「紅茶」を注文するときは「HOT TEA」（発音はハッティに近い）日本で言う「アイスティ」は「ICED TEA」（アイスティ）である。イタリアの西部劇は日本では「マカロニ・ウエスタン」だが、英語では「スパゲティ・ウエスタン」。日本人には耳慣れない単語、表現も多いが「要するに、恥ずかしがらず、相手をオヤッと思わせるセンスで英語をしゃべれば、道は通じる」と、淀川さんは話している。



「むちゃ英語」と称する淀川さん

なぜ英語が話せないの

〈49〉

会話上達法―第三部―

繰り返し発音練習を

口や舌の動きを学ぼう

「いよいよ英書を読むという時に、長崎から来ていた子供があって、その子供が英語を知っているというので、呼んで来て発音を習うたり（中略）長く彼方へ漂流していた者が着くと、その宿屋に訪ねて聞いたこともある。その時に、英学で一番むずかしいのは発音で（中略）子供でも宜（よろし）ければ漂流人でも構わぬ、そういう者を捜し回っては学んでいました」（福翁自伝）

蘭学や英学を勉強した福沢諭吉は、発音の難しさに直面して、苦労した。現代のように、ヒアリング練習用のカセットテープも洋画もない時代。〝生きた教師〟である英米人も少なかった。

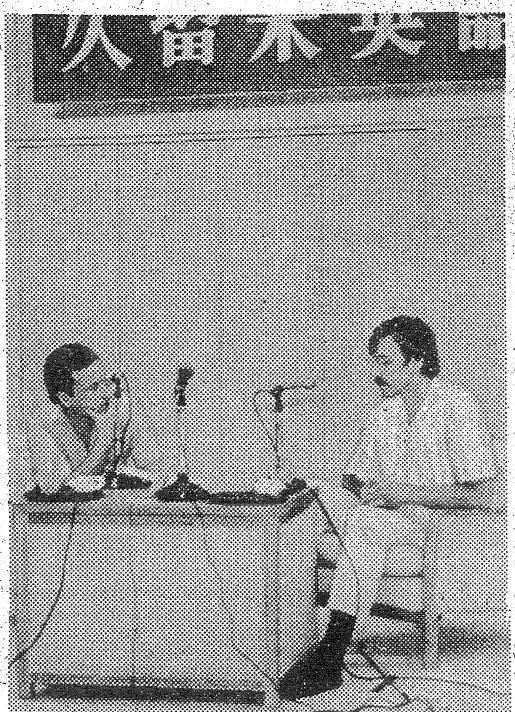
福沢の労苦に比べれば、現代人は恵まれている。外人が教える会話学校もあれば、街角で布教に当たる末日聖徒イエスキリスト教会（モルモン教）の宣教師と英語で話すこともできる。テープで何十回と発音を耳にし、口に出す練習も可能である。

ただ、英語の発音には日本語にない音がたくさんあり、下唇を歯でかんだり、舌を前歯で軽くはさんで出す発音があったりで、習得は容易でない。日本語よりはるかに多い母音をもつ朝鮮語を話す韓国人に比べ、日本人のハンディは大きい。ネイティブスピーカーから口の開き方、舌の動きなどを繰り返し指導を受けることが大切である。

米国で生活したり、旅行すると仰天するような発音に出合うことが多い。今では「サンキュー」は「テンキュー」と、英米人らしい発音をする人も増えたが「ローカル・ニュース」は「ローコ・ニュース」、「メトロポリタン」は「メットロポリタン」、「ホット」は「ハット」に近い発音なのを聞くと、あわてでしまう。ハンバーガーの「マクドナルド」は「ムクダナル」みたいに聞こえ、「ダ」にアクセントがあり「ミルク」は「メルク」のように響く。

米国では一九七三年ごろ、それまで国民に最も親しまれたスポーツ・野球の人気がフットボールに抜かれた。その際、ミシガン州の地方紙のデスクに、米国における野球とフットボールの関係をインタビューしたが「フットボール」の発音が悪く、相手が「ベースボール・アンド・ファット？」（野球と何と言っているんだ）と聞き返す。仕方なくスペルを言うと「オー、ユー・ミーン・フットボール」と大笑いになった。

米英では、日常会話で頻出する単語ほど正確な発音が難しい。異なる母国語をもつ移民同士が築いた米国のこと、少々、発音が悪くても通じるだろうと思うのは、全くの的はずれである。



英会話では正確な発音が大切で繰り返し練習が必要

なぜ英語が話せないの

〈50〉

会話上達法―第三部―

恥ずかしがるな

上手でなくて当たり前

日本人の英会話力について、米国のロバート・マーチという大学教授が、日本航空の機内誌「ウインズ」（四月号）に、大略、こんな意味のことを書いている。

「国際的なコミュニケーションの困難さが、日本人の上に重くのしかかっている。国民が英語を話さない先進諸国の中で、日本人の英語力は最も劣り、高校までの六年間、義務的に英語を習いながら、ある程度英語をしゃべれるのは、国民のわずか一％に過ぎない」

マーチ教授は、さらに「大半の日本人は、外国人との接触を望まず、外国人から話しかけられた日本人歩行者や店員、ビジネスマンはすぐ固くなる」との調査結果を紹介。こうした英会話力のなさの原因として「恥ずかしがり」「遠慮」「その他の小さな恐怖心」を挙げている。

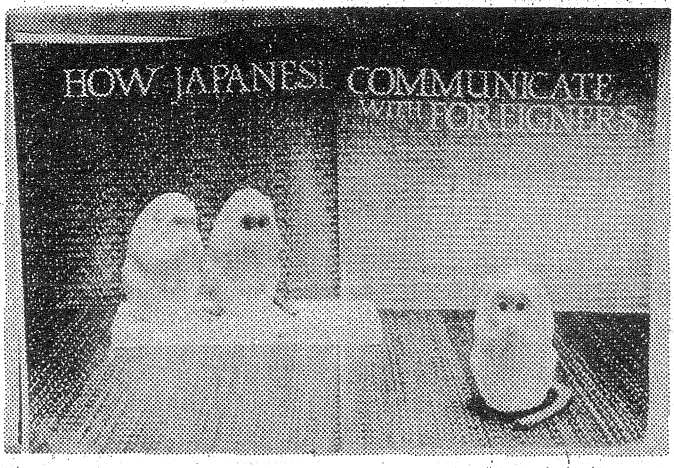
日本人に〝ある種〟の文化が存在することは確かである。人前で恥をかきたくない。取り返しのつかない恥をかくことを恐れる。特に語学コンプレックスのせいか、英会話のまずさを人に聞かれたくないという意識が強く働く。

例えば、国際会議などで一番よくしゃべるのはインド人。発音が少々、おかしかろうがいっこうに気にしない。逆に日本人は国際会議などで、ほとんど沈黙したまま。数年前、ワシントンで開かれた国際的な学者の会合では、四日間の日程中、日本の学者四人（いずれも大学教授で、うち一人はNHK英会話講師）は、ついに発言しなかった。

英国人作家、アラン・ブース氏は、こうした日本人の特異性に関し、次のように話す。

「日本人と外国人の考える恥は根本的に違う。外国人は、他国の言葉をうまく話せなくても恥とは考えない。逆にテレビ番組で夫婦間の性生活の実態をリアルにしゃべることは、度しがたい恥知らずと映る。テレビに出て平気でプライベートな問題を口にする勇気があれば、英会話が下手なから――という説がある。相手の言葉が理解できなければ、納得いくまで聞く。カタコト英語で堂々と話す。英会話上達には、この〝意識革命〟が絶対に欠かせない。

幼児や日本に住む外国人の語学習得が速いのは、恥と思わずに話し、聞き返すらいなんでもないはずだ」ような



日本人である程度英語が話せるのは、わずか1％と書いた米教授の記事

なぜ英語が話せないの

〈51〉

会話上達法―第三部―

多彩な表現力を

地道な積み重ねが必要

英会話上達には、少しでも多く表現力を身につけることが大切である。同一クラブで多彩な打ち分けが出来る人ほど、ゴルフがうまいように、外国語習得でも地道な積み重ねが欠かせない。

同時通訳の第一人者、國弘正雄さん（上智大講師）は「会話がすぐに途切れるのは、表現力不足か、外国人に対し内容ある話題をもたないかのどちらか」と指摘。豊かな表現力を得るには、繰り返し学習する以外にないと強調している。

しかし「英会話は長く続けても、果たしてどれほど向上したか、はっきりせず、学習がイヤになった」との嘆きも目立つ。

例えば、久留米市に住むAさんは悩んだ揚げ句、突然、開き直った。「オレは語才がなく、会話はあきらめた。ただ、仕事上、外人の電話応対だけは覚えよう」と。

それからは本屋に通う毎日。英会話の本を立ち読みしては「電話」の項だけを片っぱしからノートにメモ。国電での通勤時、暗記に努めた。

会社員Aさんは東京支社在勤時代、勤務上、英会話の必要性に迫られ、渋谷の英会話学校に通った。が、半年後、気付いてみると進歩はほとんどなく、オフィスにかかってくる外人からの電話にも満足に応対できないありさま。部長から雷を落とされたのも一度や二度ではなかった。

「The telephone is ringing.」「I'll answer it.」「Hello, this is Suzuki speaking.」「I would like to speak to Mr. Yamamoto. Is he in?」「I'm sorry, he's out just now. I'll be happy to take your message.」といった予想される会話を次々に覚えた。

「彼は今、会議中です」なら「He is in conference now.」と答え「彼女は別の電話に出ていますので、少しお待ちください」なら「She is speaking on another line. Would you hold on a moment?」。「あとで私に電話するよう彼に伝えてください」は「Would you ask him to call me back?」といった具合。国際電話のかけ方なども併せて学んだ。

不思議なことに、Aさんは電話会話だけはあわてなくなった。暗記したノート一冊分の中から臨機応変、文例が浮かんでくるから自分でも驚くほどスムーズに会話が出来るようになった。次回、さらにAさんの学習法を紹介する。



「会話の向上には毎日、努力しかない」と語るブース氏

なぜ英語が話せないの

会話上達法＝第三部＝

〈52〉

分野ごとに覚える

会話学習を続ける方法

久留米市内の会社員Aさんの英会話学習法は、会話を分野ごとに覚えるやり方である。

例えば「電話」の項では、電話が遠い場合「Sorry, but I can't hear you well・」と言って大きな声で話してもらう。かかってきた電話相手の名前を聞くときは「Who's calling, please?」。「○○さん、いらっしゃいますか」に、当の本人が受話器を取ったときは「私ですが……」を意味する「This is he (or ere was a she) speaking・」と答える。「戻ったら、電話して」なら「Could you telephone me when you come back?」。それから「Oh, I nearly forget・ That's he (or ere was a telephone call for you this afternoon・」「Who was calling?」。「I don't know・ It was a man's voice・ He said he'd call back later」といった予想される会話を次々に暗記していく。

こうした電話独特の基本的な文例、表現さえ知らず、外人との会話がうまくいくはずがない。Aさんは、つくづく自分の不勉強を恥じ、ノート一冊分の電話パターンを覚えた。

同時に分野ごとの学習が、Aさんの励みとなった。ただ、漫然と会話の勉強を続けても、半年後、一年後にどの程度、実力が向上したかを示す〝指標〟はない。しかし、この方式だと、他の分野はともかく「電話」だけは自信がつき、次はどの分野に入ろうかと意欲も出てくる。

二番手は「天気」でもいい。「天気はもつだろう」なら「The weather will hold・」。「今日の天気予報はどう?」「くもりだそうです」は「What's the weather forecast for today?」「It's going to be cloudy・」といった具合。



英会話の学習は中途半端でやめない根気を持つことが大切

「実際、やってみると、知らない表現が数知れず出てきてウンザリしました。でも、語学に王道なし。毎日、少しずつ積み重ねる以外に上達はないと思い、あせらず分野の〝開拓〟を続けました」。

Aさんは「スポーツ」「旅行」「ケガ、病気」「政治」「経済」……と徐々に分野を増やしていった。さらに毎日、英字紙のフロントページだけを読み、英語のニュースやカセットによるヒアリングにも手をのばした。

労多く、成果少なし。されど努力量に応じ着実に力はつく――Aさんの実感である。

なぜ英語が話せないの

〈53〉

会話上達法＝第三部＝

分野ごとに積み重ね

多くの表現身につけよう

「電話」「天気」「病気・ケガ」「政治」「経済」……など、会話内容によって分けた分野が五十にも達すると、長続きしない英会話の学習にも励みと充実感がわいてくる。新たに分類すべき内容が出たら、分野を新設し、既設の分野には未知の表現をこつこつ追加していく。

久留米市の会社員Aさんは「犯罪」の分野まで設けた。日常会話にはあまり登場しない分野だが、外人と社会問題を話す際には結構、出てくる。

例えば「彼は死刑判決を受けた」は「He was sentenced to death。「終身刑」なら、toのあとを「imprisonment for life」とする。「彼女には有力なアリバイがある」だと「She has a good alibi」「背中を刺された」は「I was stabbed in the back」といった具合。暴力団抗争などで「三人の通行人が流れ弾に当たってケガした」場合は「Three pedestrians were wounded by stray bullets」である。

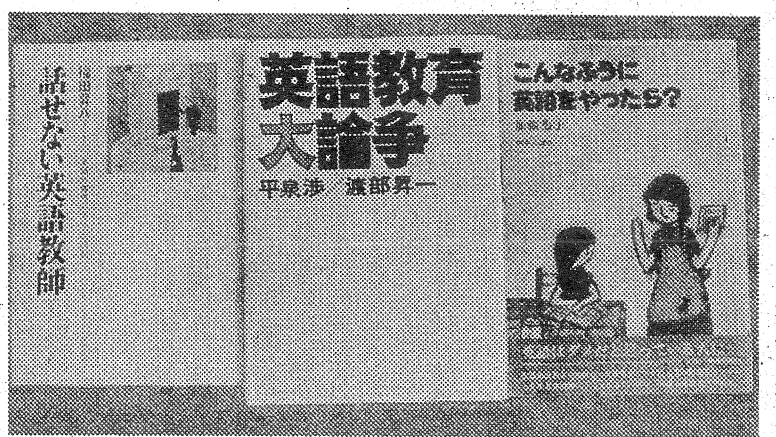
Aさんは、ベトナム戦争当時、英字新聞をよく読んだが、出てくる単語といえば、日常会話とは無縁のものばかり。「mine」（地雷）「martial law」（戒厳令）「grenade」（手りゅう弾）「curfew」（夜間外出禁止令）…とウンザリした。

しかし「戦争」という分野を設けていたお陰で、それを利用したり、表現を他に応用できたケースも一度や二度ではない。

「かつてアメリカ人から〝日本人は、なぜ反ソ感情が強いのか〟と聞かれたんです。第二次大戦末期、ロシアは日ソ不可侵条約を一方的に破棄して日本に宣戦布告したのも一因と答えたんですが、宣戦布告を何と言うか、普通の会話本には出ていない。このときは、戦争に関する表現をいろいろ覚えていてよかったと思いました。

Aさんは『At the Yalta conference Russia agreed to declare war on Japan』（ロシアは、ヤルタ会談で日本に宣戦布告することに同意した）と説明した。

どんな分野の会話表現でも、知っていれば決して損はしない。こつこつ積み上げ、集大成することが大切なのである。



最近は実用会話無視の英語教育に関する批判本も多くなっている

なぜ英語が話せないの

会話上達法―第三部―

〈54〉

難しい表現も覚えよう

未知の表現は調べる努力が大切

海外で生活すると、こんな表現をする場合、何と言ったらよいのかと、途方に暮れることが多い。田中睦福島高校教諭(二九)は学生時代、サンフランシスコに一年半、滞在したが、苦い経験を味わった一人だ。

「まず、銀行でこの通帳から百ドルおろしたいと頼む際の〝お金を引き出す〟をどう言うか知らず、困りました。I would like to withdraw one hundred dollars by cash out of this pass-book・なんですね」

次にわからなかったのが「速達便」。この手紙を航空・速達便で日本までお願いしますなら、Please fly this card by special delivery to Japan・「express(急行)ではないので、ご用心」

学校で「明日までに宿題(ペーパー一枚)を提出しなければならない」の「提出する」は、hand in を使う。We have to hand in the work-sheet by tomorrow・

「米国では、車が必需品で、中古車を買うんだ(I'm going to buy a used-car)と言うと、友達がDon't buy a lemon!と声をかけます。どんな意味? と聞くと、ボロをつかまされるなよ――と説明した。レモンは見かけは美しいが、かじったら渋いところから、粗悪品の代名詞みたいに使われています」

洗剤などが残り少なくなり、新しく買わなきゃーはどう言うか。「こんな場合は薄い、細いなどの意味のあるthinを使ってDetergent is getting thin・Get a new one・です」。

田中先生は当時、二十三歳だったが、若く見られて酒屋の店員がどうしてもアルコールを売ってくれない(加州では、二十一歳未満には酒の販売禁止)。店員が「Show me your ID card・」(身分証明書を見せろ)と迫るので「ボクは未成年者ではない」と言おうと思ったが「未成年者」が出てこない。こんなときは「I'm not a minor・」であることを教えられた。

このほか「今夜は街に出てドンチャン騒ぎをしょう」なら「Let's paint the town red tonight・」。「あいつの冗談は、ものすごく面白いぜ」は「If you hear him crackin g joke, you will get a kick out of it・」。また「これらのリンゴはとれたばかりです。ちょっと一口食べてみませんか」は「These apples are new harrest。Take a bite・」となる。



「表現がわからない場合は、徹底的に調べることが大切」と語る田中先生

わからない表現に出合ったら、聞いて覚えておくことが大切―田中先生はこうアドバイスしている。

なぜ英語が話せないの

〈55〉

会語上達法―第三部―

丁寧な表現も必要

相手と状況を考えて

先輩や上司などへの言葉遣いに細心の注意を要する日本語と異なり、英語にはいわゆる敬語はない。しかし、どんな相手との会話も同じ言い方でよいかというと、決してそうではない。

例えば、中学校で習う「What time is it now?」（今、何時？）は、家族や親しい友人には使えるが、初対面の人や目上の者には失礼に当たる。一番無難なのは「Would you give me the time, please?」で、「Could you」より「Would you」の方が丁寧な感じを与える。人にモノを頼んだり、尋ねる際は、「Would you」を使うと覚えておけば間違いない。

「Would you like to go to a movie with me?」（一緒に映画を見に行きませんか）「Would you like to have dinner with me?」（食事につき合ってくださいますか）など、応用が利く。「I love to・・」（まあ、うれしい。もちろん喜んで）となる。

レストランで女性が一人で食事をしているとき「ご一緒してもよろしいですか」は「May I join you?」でもいいが「Do you mind if I join you?」の方が「構わないでしょうか」の気持ちがこもり、ベターである。「ええ、どうぞ、構いませんよ」は「No, I don't」。「たばこ吸っていいですか」なら「Do you like to go to Japan Open Golf Tournament this Saturday・Would you like to use your telephone?」で「どうぞ、お使いください」は「Sure, go right ahead」。「一杯おごらせていただけませんか」は「May I buy you a drink?」と聞く。

これら依頼文の前に「I'm sorry to trouble you but～」（ご迷惑かけてすみませんが…）や「I'm sorry to rush you but～」（急がせて申し訳ありませんが…）などを付けると、会話はいっそう丁寧になり、相手に好感をもたれる。状況次第では、ぜひ口にしたい言葉だ。

海外で生活してみると、こうした敬語に相当する丁寧な言い回しの必要性を痛感させられる。日本語で「あなた」と「お前」は大違いだが、英語では同じ。「ユー」で片づく。英語には単語に敬語を表すものが少ないだけに、その分、こうした柔らかで、えん曲な表現が不可欠なのである。



外国人との会話は、日ごろ勉強した表現を使う絶好のチャンス

なぜ英語が話せないの

〈56〉

会話上達法―第三部

質問の仕方、表現を

言い回しを一つ一つ習得

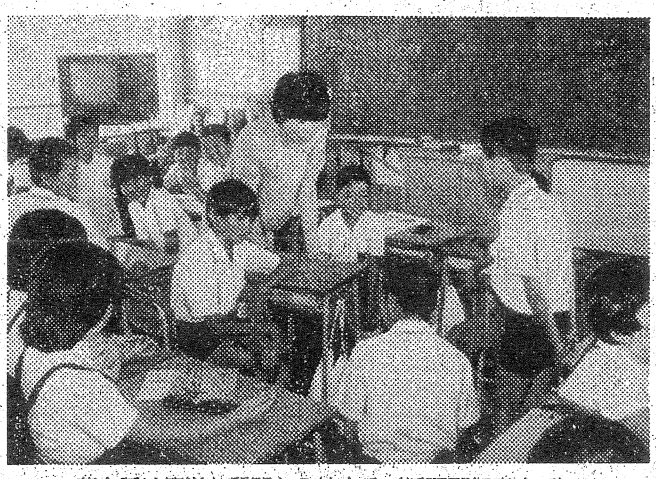
外国で生活すると、不慣れなことばかりで、あれこれ質問しなければならない。ところが、実際にはどう表現してよいか、首をかしげることがしばしばある。

例えば、相手の言った単語の意味がわからない場合は「What do you mean by Harage i?」（腹芸ってどんな意味?）の形を覚えておくと便利。類似型の「What do the letters UNESCO stand for」（ユネスコは何を表すんですか）まで知っておくと、この種の質問は大抵、こなせる。

「△△したらどう?」と相手の意見を求めるときは「What do you take consumer's say to taking a rest」（休憩しましょうか?）と聞いてみる。この構文はよく使われ「彼女に贈り物をしてみたらどう?」なら「What do you say to giving her a present」となる。

インタビューなどで相手の意見を尋ねる際は「What is your opinion on this problem」でもいいし「What do you think about Japanese movement Mr Nakasone」（中曽根首相、日本の消費者運動についてどうお考えです?」は「Whose turn is it next」。「こんな場合、あなたならどうする?」は「What would you do in a situation like this?」。「彼女はどんな服着てた?」「白い服でした」は「How was she dressed?」「She was dressed in white」。「どこでお会いしましょうか?」「いつもの場所で」なら「Where shall we ?」で「一番右の男がそうよ」なら「The man on the extreme right is my father」で「日曜日の午後なら、いつもあいてます」は「When are you free?」「I'm free every Sunday afternoon」。それから写真に大勢写っている中で「あなたのお父さんはどれ?」と聞くときは「Which is your father?」で「一番右の男がそうよ」なら「The man on the extreme right is my father」である。「どんな夢を見たの」は「What did you dream?」。「幽霊を信じますか」は「Do you believe in ghosts?」

質問にも実に多彩な言い回しがあり、暗記するのも大変だが、一つ一つ習得する以外に道はなさそうだ。



英会話は簡単な質問から始まる（浮羽郡御幸小で）

なぜ英語が話せないの

〈57〉

会活上達法第三部

環境作りと集中学習

有名人が語る上達法

各界で活躍する英語の上手な人たち六人に同時通訳の第一人者、西山千さんがインタビューした「私の英語体験」(プレジデント社)という本がある。この中には、各人各様の語学への取り組み方が紹介されていて、興味深い。

「淋しいアメリカ人」の著者、桐島洋子さんは「どうしようもなく英語の劣等生だった」。行動派の桐島さんは、子連れで米国で生活したり、外人記者や将校ら〝英語の友〟を大勢つくり、常に〝英語のシャワー〟を浴びるよう心掛けた。それが結局は「身を助け、ピンチを救ってくれた」。

裏千家十五世家元千宗室夫人の登三子さんは、達者な語学を生かして、一杯の茶で世界に日本文化の輸出をした人。彼女も、自分は語才がない、と思い「あまりいろいろな種類の単語や表現は覚えないことにした」。外国人と対する、どんな単語や表現が多く出るかわかるから、それを次々に記憶する。例えば、実用面からみれば「This is a book」など、まず使わないから、むしろ「What time is it?」を覚えるといった具合。大量に出回る語学テキストにまどわされず「この言葉、この文章だけ知っていれば、間違いない、というものだけを自分のものにしておくことが大切」と話している。

「今は昔と異なり、テレビ英会話や二カ国語放送もある。つけっ放しにしておけば、音にも慣れる。読む方もタイム誌などたくさんあり、耳や目からのシャワーにはコト欠かない。要は根気よくやること」と指摘する。

英語の学習は音から入る方がよい――と強調するのは、小説家の曽野綾子さん。幼稚園時代から聖心女学院で英語の音に接し「会話は下手だが、英語に対する恐怖心はない」。また「外国人だから、英語が完全にできなくて当たり前」と開き直り「中学三年生までの教科書をマスターすれば十分です」。

NHKテレビ英会話講師を務めた松本道弘さんは、サラリーマン生活が長く、海外生活や留学体験がないユニークな存在。それだけに「英語はコツコツやったら一生できない」が持論で、少々、無理をしても「本やテキストからのインプットと、外人にぶつけるアウトプットの場のバランスをとることが肝心」という。

宮本武蔵流の英語修業といわれる松本さんの勉強法は「全く辞書を引かず、英語の本や雑誌などを歩きながら、ふろの中やトイレでも気違いみたいに読む。英会話は、ある一定時期、半年か一年、瞬間風速的に無理をすることが必要」としている。松本さんが過去に読んだ英書は二千冊にのぼる。次回は松本さんら残りの人たちの英会話学習法を紹介する。



英語は音感教育と語る
曽野綾子さん

なぜ英語が話せないの

〈58〉

会話上達法第三部

大切な本を読む努力

欧米の発想法の練習も

NHKの元テレビ会話講師、松本道弘さんは、英語の壁をどう破ったかについて、次のように話している。

日本人にとって最も苦手なのは「Why～?」（なぜ）と聞くこと。欧米では当たり前の質問なのに、相手の腹を探るので日本では一番嫌われる。島国で単一民族のわが国では、わざわざ口に出さなくても相手の考え方は以心伝心わかることが多い。だからアメリカ人から「Why?」と聴かれて、すぐに「Because～」と答えられるまでには時間と訓練が必要になる。

例えば、日系米人の三世、二世の違いを見分ける方法は、ジェスチャーの差でもある程度分かるが「Why?」「Because～」の使用頻度によっても察しがつく。日米両国の差を端的に示せば、米国映画の「ロッキー」には、「なぜ」「ならば」の形式が三十回も出てくるのに「宮本武蔵」では、ほとんど皆無に近い。

こうした背景には、論理性を重視する欧米社会と、ロジックより事情斟酌などですませてしまう日本社会との決定的な差違がある。

「Why」「Because」は〝直線の論理〟で、会話を勉強する人は論理をはっきり言ったりアイエス」「ノー」をきちんと表現することが大切。英語国民と日本人との発想の違いを学ぶのが上達の秘けつである。

英会話では、日本人同士ならよく理解できるが、洋画やネイティブ同士の話は分かりにくい。英字新聞でも日本人の書いた原稿はやさしく、英米人のはむずかしい。確かに発音や話すスピードが一つの壁になってはいるが、どうもそれだけではない。思考、発想の違いが介在している。

例えば、日本人の表現は「According to the Nishinippon-Shinbun（西日本新聞によると）というが、欧米人なら「Nishinippon-Shinbun says—」と言う。これだと主体が極めて明確で、すぐれている。

松本さんは、海外生活の経験もないのに、英米人の発想を肌で感じる努力をした。「その経験から言えることは、まず何よりも『インプット』（読むことと聞くこと）。そして『アウトプット』（話す）。語学に近道はなく、英米雑誌を読み、テレビドラマの二カ国語放送などを聞き続ける。私はここ数年、年間百冊の本を読破しており、英語道有段者を目指す人は、語学のカセットやレコードだけで部屋を埋めてしまわず、少なくとも半分は書物で埋めるべきです」。



論理的な会話を身に着けようと語る松本道弘氏

なぜ英語が話せないの

〈59〉

会話上達法＝第三部＝

イエス、ノーもはっきり

明確な表現を鍛錬

かつて米国大使館の友人（アメリカ人）が「日本に来て寂しいのは、ディベート（論争）がないこと」と、話したことがある。

日本人は反対意見を述べることを嫌い、少なくとも建前は「ごもっとも」で終わる。「わざと相手を刺激して、反論させようとするが、こっちの言い分がスーッと通ってしまう」。

これが英語になると、理屈っぽくなる。「イエス」か「ノー」を明確に言わねばならない。日本語なら可能性の程度を「だろう」と、すれば足るが、英語ではそうはいかない。

絶対の可能性ならcertainly。それからprobably、presumably、possibly……と続く。数年前、米国首脳が〝Possibility of use of nuclears exists〟と発言したら「核兵器が使われるだろう」と訳されてしまった。possibilityは確率的に非常に低いが、日本人は「だろう」以外の発想がない。

元NHKテレビ会話講師の松本道弘さんは「私の英語体験」の中で、こんなことを書いている。

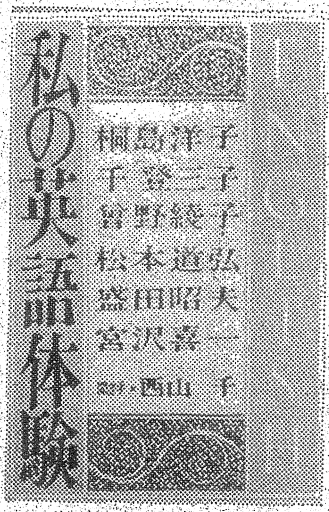
帰国するアメリカ人に「（また）日本に帰ってくる？」（Will you come back to Japan?）と聞けば「Maybe」（多分ね）で終わってしまう。「What are the chances of your coming back to Japan after leaving here?」という形にすれば「Fifty percent」や「Twenty percent」などと答える。

同時通訳の西山千氏によると、日本人は中間的であいまいな表現を好む。「これちょっと貸してください」。「（食堂の客が）ご飯くれる？」…。いつも決断は保留しているので、国際会議では外国人との間で誤解が生じる。

日本人に欠けた論争性や表現の明確さを鍛錬するには、ある一つのテーマについてグループを二派に分け、それぞれの立場を決めて論議するのも一つの方法である。大学のESSクラブなどで、よくやるが、論理的なモノの考え方、主張に役立つ。

この〝論争ゲーム〟で大切なのは、自分の立場に最後まで責任をもつこと。それから本音と建前を使いわける日本式発想を絶対にしないこと。松本さんは、欧米人と話をする場合、ある程度のこうしたルール意識を持った方がいいとアドバイスしている。

例えば、アメリカ人が「日本人は非人道的にイルカを殺す」と批判する。日本人としては「非人道的でない」と言うのが論争で「米国も同じことをやっているじゃないか」ではケンカになる。日本的発想は改める必要があると、松本さんは強調している。



松本さんら6人の英語学習法が紹介された『私の英語体験』

なぜ英語が話せないの

〈60〉

会話上達法第三部

欧米人の発想で話す

恥ずかしがらず堂々と

戦後間もなく始めた小さな電子工学会社を「世界のソニー」に育て上げた盛田昭夫会長は、中学時代、英語が特別に好きでもなく「ただ、落第点になるかならないかだけが問題だった」。

それが厳しい先生の影響で、高校時代に英語を勉強しようと決心。大学でも戦時中、こっそり英語の海賊版を買って読みあさった。

しかし、戦後、進駐軍と話してみると、チンプンカンプン。昭和二十七年、トランジスタの契約のため、初めて欧米に出かけたときは助けとばかりしゃべりまくった。そして二度目の訪米通訳をつけた。

盛田会長が、コミュニケーションの手段として英語の必要性を痛感したのは、このとき。ヨーロッパに滞在した二カ月間、英語の話せる人を見つけると、天の時には一人で交渉した。

「日本人の英語教育は、読み、書き中心だから、話すことは別物と考えている。その心理的な敷居を踏み越えれば、新たな段階に入るのです」

日本人の中には、自分の英語はダメだと思っている人が多い。よくジャパニーズ・イングリッシュなどと卑下する。しかし、米国人にもドイツ語ぐさく話すキッシンジャー元国務長官らなまりのひどい人が目白押し。文法的な間違いも多い。だから発音が少しおかしくても自信を失う必要はない。

盛田会長は「発音や、ヒヤリングが十分でなくても、英語国民の思考スタイルに従って話せば、意思は通じる」と話している。逆に日本的発想は誤解を招く。日本人同士の話では説得力がある「起承転結」は、外国人には理解できない。例えば「I understand you however」などとは英米人は絶対に言わない。understandというのは「わかる」と同時に、相手に賛成したという意味だからである。



「世界のソニー」を育てた盛田会長は、中学時代、英語が特別に好きではなかった

交渉でも日本人は結論をあとに言うが、欧米人は「イエス」か「ノー」といい、次にその理由を説明していく。「この点も注意が必要である」。

ソニーでは、外国からの客が工場見学に来ると、どっくりするほどみな英語を話す。昔だったら自分より英語のできる人の前で英語をしゃべるのは勇気がいったが、みんな平気でしゃべる。発音が悪く、相手が理解しなければ、わかるまで説明する。失敗を気にしない。語学では、いい意味での〝恥知らず〟になることが大切である。

なぜ英語が話せないの

〈61〉

英語使う目的持とう
あとは地道な努力が肝心

会話上達法第三部

国会議員で最も英会話が上手な宮沢喜一・元外相は、実に明快で、きちんとした英語を話す。

昭和二十五年、GHQ(連合軍総司令部)にいたとき、マッカーサー、池田勇人(元首相)会談の通訳を命じられた。マッカーサーは、せっかちで、間を置いての通訳(逐語通訳)を許さず、同時通訳を要求。「なんとか、こなした」。

ライシャワー元米駐日大使は「ザ・ジャパニーズ」の中で、通訳を必要とせず、比較的自由に英語が話せる日本の政治家は三人と書いているが、宮沢氏は群を抜いた存在、という。

宮沢氏は、戦前の学生時代に英文雑誌や新聞によく目を通し、GHQの仕事や池田の秘書官となったことで、欧米人と話す機会に恵まれた。現在でも「ジャパンタイムズ」「アサヒイブニングニュース」を毎日。「ニューヨークタイムズ」「ワシントンポスト」「ヘラルドトリビューン」雑誌では「フォーブス」そのほか面白い小説、ノンフィクションの「ニクソン・メモアール」などを随時、読む。大変な読書量である。

英語達者の宮沢さんは「英語力と国力は反比例する」と断言する。すなわち、国力が上がると外国語のニーズは少なくなる。国力が上昇すると、どうしても英語は下手になる。

例えば、日本の経済力がつくにつれ、日本語が英語になった例もある。「前向き」(forward looking attitude)「低姿勢」(low posture)がそうで、宮沢氏が使った英語「経済過熱」(overheated economy)も最近、米国でしばしば使われるようになった。鈴木大拙さんは、禅の本「臨済録」の中で「無」をnothingnessと造語、一般化し始めている。

宮沢氏は「日本人の語学力は、国力が上がった今はそれに反比例して落ちている」という。しかし、共通の文化、歴史、伝統をもつ欧米社会と異なり、わが国の場合、もっと国際交流、相互理解への努力が必要。米国のジャーナリスト、ジェームス・レストンは「日本人はもっと物事を大げさに言えよ。アメリカ人はもっと〝小げさ〟に言う。そうすれば、だんだんうまくいく」と指摘する。相手をよく知らねば、こんな発言はできない。

宮沢さんは、戦前、英語への風当たりが強まるなか、電車の中で英字新聞を毎日、読んだ。この地道な努力と英語との幸運な出あいが今日を築いた。その彼が言っている。

「やみくもに英語、英語というより、英語を使って何かをしようと、その〝何か〟を見つけた人は幸いだ。なんで英語をやるのか、今一度自問してみるのもムダではない」



「英語学習の目的を持とう」と語る宮沢元外相

いしとの第ラ歌ひ奏 に本トピ イ

なぜ英語が話せないの

〈62〉

会話上達法―第三部―

外国の思考、習慣を学ぼう

必要な論理性と社会常識

キッシンジャー米元国務長官は、かつて大の日本嫌いだった。「日本の経済なんて悪いことばかりやっている。終身雇用。りん議制…。どれをとっても西欧的な合理主義とは全く相いれない。正直言って私は、日本という国を軽く考えていた」。

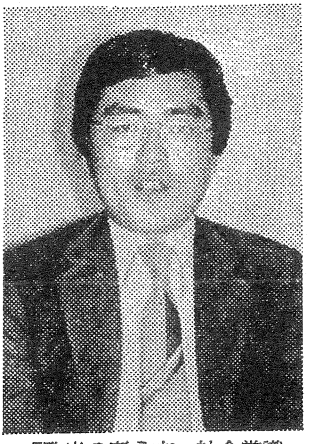
ところが、悪いことばかりやってるはずの日本の実績が、どんどん上がる。彼の気持ちは割り切れなくなった。そして日本には自分たちと全く違う思考方式があり、西欧の考え方を基準にしてダメだとするのは誤りと気付いた。知日派になったキ氏が、長女の日本留学を実現させたのはよく知られる。

キ氏は、ユダヤ系アメリカ人(全米で約六百万人)。ユダヤ民族は、日本人同様、文化、伝統の異なる国を理解する特性を持つ。宮沢喜一・元外相によると「エンパシー」(感情移入)が出来る数少ない民族である。これがアングロサクソンだと、きちっと割り切って考え、双方のメンタリティーを読んで、その中から共通項を見いだす作業は、非常に不得手である。

だから英語で意思疎通をする場合、論理性、相手の常識に合った話し方、説明をしなければならない。この〝英語感覚〟を知らないと、誤解やトラブルを招く。

例えば、妻を紹介する際は日本流に「愚妻です」(This is my dumb wife)と言えば、相手は「なぜ、うすのろを妻にしているのか」といぶかる。米英では「私のよき伴りょです」(This is my better half)が一般的。「奥さん、美人ですね」(You have a beautiful wife)のお世辞には、間違っても「I don't think so」と返事しないこと。「ThanK you. I think so, too」が「Thank you. I am a lucky man」が普通である。

久留米英語講習会の真崎良幸代表=第一経済大講師=は「外国の表現法、習慣、文化、伝統、思考方法などを日ごろ勉強することが大切」と話している。



「欧米の考え方、社会常識を学ぼう」と語る真崎さん

表現法に例をとれば「He is red with anger」(真っ赤になって怒る)。「He is still green」(青二才)。「He is yellow」(憶病)「I feel blue」(意気消沈)「He's a brown—nose」(おべっか使い)…。

単純に英会話といっても、学ぶことは極めて多く、奥は深い。

なぜ英語が話せないの

〈63〉

会話上達法第三部

反復練習の努力を

相づちが打てれば一人前

英会話で、相手の話に上手に相づちを打てれば一人前。

「Really?」(本当?)「Is that so?」(そうですか)でもなんとかなるが、やはり相手の話の内容にピッタリの「まあ、そうですか?」が口から飛び出すよう訓練する必要がある。

例えば「He passed away last year」(昨年、亡くなった)なら「Oh, did he?」(まあ、そうでしたか?)「I can speak French」には「Oh, can you?」「Today is my birthday」は「Oh, is it?」とする。

この相づち法は、相手の言った主語と動詞をひっくり返して聞き返すだけ。その際、固有名詞は代名詞、普通動詞は助動詞に変え、慣れるまで練習することが大切だ。

「She is~」は「Is she?」「Too much said~」なら「Did he?」「My father plays~」は「Does he?」などの練習を繰り返す。

よく似た表現で、すらすら使えれば便利なのが付加疑問文。日本語で言えば「…ですね」にあたる。「良いお天気ですね」なら「(It's a) Beautiful day, isn't it?」このときの相づちは「It sure is」か「Yes, (it is) isn't it?」(本当にいい天気ですね)となる。また「It was a good game, wasn't it?」(いい試合でしたね)には「Yes, wasn't it?」「She runs very fast, doesn't she?」は「Yes, doesn't she?」と相づちを打つ。

相づちの中で特によく出るのが「私もそうです」という表現。「I hope they'll win」に「So do I」「I don't like him」には「Neither do I」(私も好きじゃない)「He doesn't married」は「Neither have I」(私も結婚していない)「I can't speak Spanish」には「Neither can I」(私も話せません)。

こうした言い方は、反復練習して、さっと口に出てくるように努力したい。最初はなじめなくても、訓練次第で驚くほど上達するはずである。



語学の学習は反復練習が必要

なぜ英語が話せないの

〈64〉

会話上達法第三部

スラングを学ぼう

欠かせぬ表現増やす努力

外国で生活する際、どうしても不可欠なのがスラングの知識。知らないと、チンプンカンプン。途方に暮れることも多い。

久留米市内の会社員は、かつて米国滞在中、友達から「What's eating you?」と声をかけられた。何も食べていないのに、といぶかっていると「eat」にはむしばむという意味がある」という話。直訳すれば「何があなたを悩ましているのか」になり、日本語なら「どうかしたのか」「何かあったのか」に相当する。

「Soap opera」も知らないと戸惑う。「メロドラマ」のことだが、昼間、主婦向けのテレビ番組（よろめきドラマ）のスポンサーは、せっけん会社が多いことから、いつの間にかこう呼ぶようになった。「いくらですか」と聞いて、相手が「ten bucks」と言えば「十ドルです」のこと。「green-back」は、裏が緑色という意味から、米国の紙幣を表す。「1ドルコイン」は「silver dollar」である。

レストランで「割り勘にしよう」なら「Let's go Dutch」。「Dutch account」も割り勘である。「chicken」は「ひな鳥」でなく「憶病者」を指す。かつて米国の若者たちの間で、命がけのゲームが流行したことがある。車に乗った若者が道路の白線に沿って双方から猛スピードで接近する。ハンドルを切らねば、激突して二人とも死亡は確実。だから衝突寸前、怖くなった方がハンドルを切って逃げる。すると直進した方は「you're chicken」と叫ぶ。「オレは憶病者じゃない」なら「I am not chicken」と言えばよい。

米国人との会話では「No kidding」もよく出てくる。「冗談でしょう」「本当？」の意味に使われ「冗談じゃなく本当ですよ」なら「I'm not kidding」。「頭にくる」はどう言うか。「upset」が適語で「I was upset when I lost my purse」といった具合。

そのほか「hangover」（二日酔い）や「girl Friday」（有能な秘書）「cold shoulder」となる。

スラングは、教科書にはあまり出てこないので、外人と話す機会があれば、詳しく聞き出すなり、少しずつ自分が使える言葉、表現を増やす努力が欠かせない。



なめらかな会話にはスラングの使用が欠かせない

「女に振られた」は「She gave me the cold shoulder」となる。

「二日酔いで、頭が割れそうだ」のニュアンスなら「I have a terrible hangover」「彼

なぜ英語が話せないの

会話上達法第三部

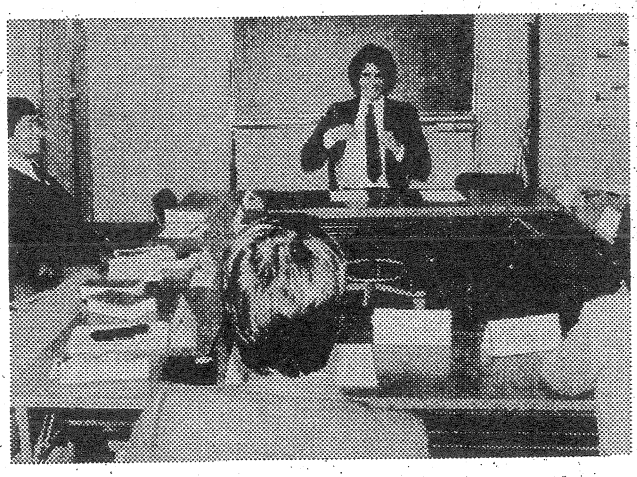
〈65〉

質問の基本文学ぼう

必要な柔らかい表現

こんな質問をしたいとき、何と言えばよいかーを解決しておくのも会話上達の大切なポイント。聴きたいことを的確に表現し、かつ相手に失礼にならないよう、十分配慮しなければならない。

初対面の人に職業を尋ねるときは「職業は何ですか」ではなく「どんなお仕事をなさっていますか」と、柔らかな感じを出す必要がある。「May I ask What sort of business are you in?」「Do you mind if I ask What kind of work do you do?」という聴き方が無難である。「どこの会社にお勤めですか」「○○社に勤めています」なら「What company are you with?」「I'm with ○○ company」。さらに「何課にいらっしゃいますか」は「Which department are you in?」で「人事課におります」は「I am in the personnel department」となる。



質問は表現が的確で、丁寧であることが大切

「私はOLです」はどう言うか。かつてOLは、BG（ビジネス・ガール）と呼ばれたが、BGに売春婦の意味があるところから、某雑誌社がこれに代わるOL（オフィス・レディー）を造語。造語過程では「OE」（オフィス・フラワー）なども有力視されたが、結局OLにおさまった。米英ではOLはほとんど使われず、事務員は男女ともオフィス・クラークが一般的。「I am an office clerk」である。「店員」なら「sales clerk」を使う。

米英人と話してよく出てくるのに「まあまあ」という表現がある。例えば「How're you doing at school?」（学校の成績はどうですか）に「Not (so) bad（まあまあです）」という具合。覚えておくと便利で、逆に「あまりよくない」なら「Not so good」。「クラスで一番だ」なら「I'm the top in my class」。

「○○についてどう思いますか」の「どう」に当たる英語は「How」でなく「what」だから注意が必要。例えば「見合いで結婚についてどうお考えですか」は「What do you think of arranged marriage?」。「What would you like to do after graduation?」など知っていれば便利な構文である。

「How much do you weigh?」「EECって何のこと」なら「What does EEC stand for?」。「卒業したら何をしたいですか」は「What would you like to do after graduation?」など知っていれば便利な構文である。

「体重はどのくらい」は「頭（脳）で考える」みたいな答えになる。

なぜ英語が話せないの

〈66〉

会話上達法第三部

第三者の言葉 伝え方覚えよう

間接法、直接法をマスター

会話では、第三者の言葉や意見を伝えることが結構、多い。その場合、伝達法に「直接法」と「間接法」があり、言い換える際に、時制の変化などに注意を要する。

例えば「太郎は私に、僕は行きたくないと言いました」は、直接法では「Taro said to me "I don't want to go"」だが、間接法では「Taro told me he didn't want to go」となる。同様に「彼女は私に、私は君のお母さんに会ったことがあると言った」は「She said to me?"」と「She said to me "I have he asked me your mother"」と「She told me she has met my mother」といった具合。

疑問文の場合も要領は同じ。「彼女は私に一緒に行ってくれる?と聞いた」は「She asked me, "Will you go with me?"」と「She asked me if I would go with her」になる。「Her asked me, "Where are you going?"」は「He asked me where I was going」に変わる。

直接法を間接法に、またその逆に変える練習は、繰り返しやることが大切。

「Hanako said to me, "Please do not wait for me"」はどう変えるか。「Hanako asked me if there was a post for her」である。「母は私に約束を守りなさいと言った」は「My mother said to me, "Keep your word」を「My mother told me to keep my word」に変える。

「その婦人は私に、この近くに郵便局はあるかと聞いた」は「The lady asked me, "Is there a post office nearby?"」で間接法に直すと「The lady asked me if there was a post office nearby」

「父がよろしくと申しておりました」は「My father asked me to say hello to you」と間接法で言うのが一般的。「彼は在宅かしら」は「I wonder if he is at home」(ifの代わりにwhetherを使うと、homeの後ろにornotが必要)。

直接法と間接法の勉強は、対比カードを作り、口からすらすら出てくるまで学習するのがよいようだ。



「英会話は集中的な反復練習が大切」と語る国弘正雄さん

なぜ英語が話せないの

〈67〉

会話上達法第三部

マンションは大邸宅

カタコト英語に要注意

われわれ日本人が日常使っている〝カタコト英語〟は、外人にうっかり使うと、チンプンカンプンのことが多い。久留米市御井町で英語を教える細見明さん㈣は、日本人が比較的誤りやすかったり、口から出にくい単語や表現をまとめている。

例えば、テレビ、ラジオ番組で視聴率の高い「ゴールデン・アワー」は米国では「prime-time」、「バック・ミラー」は「rear-view mirror」、マスコミは「mass media」である。

芸能人やプロ野球の選手などからもらう「サイン」は「autograph」となる。

注意しないといけないのはマンション。英語の「mansion」は大邸宅のことで、日本でいう普通のマンションは「condominium」と言う。テーブル・スピーチも間違いやすい。日本では、一般に食事などの前や途中に行われるが、英語では「after-dinner speech」。ホテルなどで朝電話で起こしてもらうモーニングコールは「wake-up call」だ。

ジェット・コースターは「roller coaster」、モルモットは「guinea pig」、パンティー・ストッキングは「panty hose」、フリーセックスは「free love」となる。

次に口から出にくい単語には次のようなものがある。

遺書は、法的にいう場合は「will」だが、自殺した者が残す遺書は「suicide note」となる。清涼飲料水（コーラやサイダーなど）は米国東部では主に「pop」、西海岸では「soda」が一般的。「Do you want a pop?」（何か清涼飲料水飲む？）のように使う。

料理で「いためる」「揚げる」は、英語ではともに「fry」でOK。カロリーが高く、栄養価の高いポテトチップや即席ラーメンのような食べ物は総称して「junk food」。宣伝や勧誘などの手紙も同じように「junk mail」という。

女性のバスト、ウエスト、ヒップのサイズを聞きたいときは「What are your vital statistics?」と言えばよい。

かつて米国滞在中、久留米市内の会社員氏は「サマータイム」と言って意味が通じず困ったが、これは「daylight saving system」。英語には注意すべき単語の表現がまだまだ多い。次回も細見さんの〝メモ〟を紹介する。



口から出にくい単語や表現をまとめている細見明さん

なぜ英語が話せないの

会話上達法第三部

〈68〉

間違いやすい表現

地道な努力で正しく

久留米市御井町で英語を教える細見明さん(四九)は「口から出にくい表現」として、次のような単語や文章を紹介している。

例えば、肉が「かたい」や「やわらかい」は「hard」と「soft」ではなく「tough」と「tender」。「乗り物酔い」の「motion sickness」は、バス、飛行機、船酔いのいずれかにも使える。ただし「morning sickness」は、つわり時の「吐き気」だから要注意。

「追試験」は何と言うか。「make-up test」が一般的。「寝酒」は「night-cap」、「のどぼとけ」は「Adam's apple」。「更年期」は「the change of life」である。

間違いやすい表現では「long face」がある。顔が長いという意味ではなく「She has a long face.」は「彼女は暗い悲しそうな顔をしている」が正しい。「彼女は顔が長い」なら「She has a long ish face」。それから「homely wife」は米国では「家庭的な妻」のことではなく「顔がきれいでない妻」を指す。

むずかしい表現では、次のような例をあげている。

「足がしびれた」と言う場合は「My leg s are asleep」。「36枚撮りのフィルムください」は「Please give me a roll of film with 36 exposures」。「からかわないでください」なら「Don't pull my leg.」となる。

同様に「He is cheap.」は「彼はケチだ」の意味で「I'm broke today.」は「今日はお金を一銭も持ってない」である。それから自動車を運転するときの「ハンドルを握る」という表現は「When they had an accident. Tom was at the wheel.」のように使う。

それから「bus boy」や「bus girl」は、米国ではレストランなどで客が食べ終わった食器を流しに運ぶ人のこと。「She worked at a restaurant as a bus girl.」などが具体例だ。

それから同じ「宇宙飛行士」にしても米国の飛行士なら「astronaut」、ソ連飛行士だと「cosmonaut」と変わるケースもある。



地道な努力が必要と話す細見明さん

細見さんは、こうした表現に困る単語や表現を少しずつ集めているが、年月がたつにつれ、その量は雪だるま式に増えていった。語学には、特にこうした地道な努力が欠かせない。

なぜ英語が話せないの

〈69〉

会話上達法第三部

基本動詞をマスター

簡単な表現で力は上昇

「英会話を習うなら外人から―と盲信している人がいる。だが、日本人の英語力の弱点を熟知して教える外国人は少なく、むしろ質の高い日本人の会話教師から習った方が実力がつく」

最近、英会話を勉強する学生やOL、サラリーマンの間で、こんな話をよく耳にする。外国人と対等に話が出来、単なる〝英語屋〟に陥らず、国際的な広い視野をも兼ね備えた英会話の先生は、そうザラにはいないが、皆無というわけでも無論ない。

久留米市東町で「実践英語セミナー」を開く戸田昭二学院長(五三)は、かつて貿易会社に籍を置いたこともあって、国際政治、経済の動きに敏感。教材にも米誌「タイム」を採用するなど、時事問題の学習なども盛り込みながら、効果ある英語指導を展開している。

戸田学院長の英会話についての持論は「基本動詞の用法を徹底的にマスターせよ」。

英会話学習法の一つに、単語はわずか八百五十語を覚えればOKというベーシック・イングリッシュがある。戸田学院長によると、この中に出てくる動詞の数は、たったの十八語。この中からmayとwillを除くと十六語になる。「つまり、getやgive,takeなど基本十六動詞を、結合前置詞を含めて暗記すれば、会話力は飛躍的に向上。結局、この基本動詞を、どう使いこなすかが会話力の勝負になるんです」と強調する。

例えば、最も簡単なbe動詞。「お父さん、いらっしゃいますか。いえ、外出しています。一時間もすれば戻ってきます」なら「Is your father in? No, he is out. He should be back in an hour」。さらにしばらくして「お父さん帰られました?」「いや、まだ出たままです」は「Is your father back? 「No, he is still out.」となる。

be動詞は大変、便利で「ガスはついてる」「いや、消えています」「ラジオのスイッチは切っています」「十分後には行きます」「十分後にとなる。

「来週、東京へ行きます」の行くもgoを使わなくても「I'll be in Tokyo next week.」でOK。同様に「すぐ、そちらへ行きます」は「I'll be there in ten minutes.」でよい。次回は、戸田先生の基本動詞の使い方を詳しく紹介する。



基本動詞さえマスターすれば鬼に金棒…と戸田先生

なぜ英語が話せないの

〈70〉

やさしい動詞を活用

むずかしい単語は必要ない

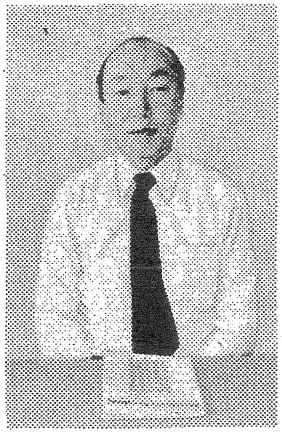
会話上達法第三部

英国の言語学者・チャールズ・オグデンは、日常会話に最もよく出てくる基礎単語八百五十語を定めた。このうち動詞は十八語。これを大学教育を受けた英米人がもつ動詞の語い力（四千―一万）と比較すると、問題にならないほど少ない。だが、基本動詞の特徴は、多くの前置詞と結合し、広く多様な意味をもつことである。

英米人と話すと、日常わかりやすい単語（little words）を用い、難しい単語（big words）を避けるのに気づく。特に動詞は平易な単語を使う。語いの量がそう多くない日本人が、やたらbig words を連発し、英米人に奇異な感じを抱かせるケースも目立つ。

久留米市東町で「実践英語セミナー」を開く戸田昭二学院長（五三）は「基本動詞の中からmayとwillを除いた十六語を、結合前置詞を含めて暗記すれば、会話力は飛躍的に向上する」と指摘する。

例えばget。「He gets on my nerves.（彼の存在は神経にさわる。出て行ってくれたらなあ）」は「He got me, and I got(am) sympathetic with her」となる。「君は僕を誤解している」「オレをそんなふうに受けとらないでくれ」は「You've got me wrong. Don't get me thing is old enough to get me that way」さらに「Let's go」（壊す）「He went through」（さあ始めよう）「I got really got us」は「本当に面白かった」である。「We got together, a lot of station, and I made it」（間に合った）。受験生に「I hope you'll make it」と言えば「合格祈るよ」になり「make a dent」は「立ち寄る」「彼女の話に心打たれた。彼女に同情するよ」なら「Her story got me, and I got(am) him goes with her to see you after all」は「取引する」。「He is still running around with Jane」（付き合う）「She is run down from overwork」（過労で倒れる）。



平易な動詞を活用すれば十分と語る戸田先生

「make」にもいろいろある。「I rushed to the station, and I made it」（間に合った）。受験生に「I hope you'll make it」と言えば「合格祈るよ」になり「make a dent」は「立ち寄る」「He is still running around with Jane」（付き合う）「She is run down from overwork」（過労で倒れる）。

なぜ英語が話せないの

会話上達法第三部総括編

〈71〉

入試英語の改善を

必要な教師の質向上

わたしたちは、この企画でわが国の実用性を欠いた英語教育を取り巻くさまざまな問題をつぶさにみてきた。国際化の波が身近に押し寄せている現在「読み」「書き」に偏り「会話」軽視の傾向は、早急に矯正すべきだとの声は年々、高まっているものの、抜本的な改革は依然、実現していない。中学、高校、大学と長い間、英語を学習しながら、ニッポン人はなぜ英会話が苦手なのか――。国民の大多数が痛感しているこの問題について、最後に「総括」してみたい。

〝日の丸英語〟とさえ称されるわが国独特の英語教育の最大のガンは「入試英語一」である。大学入試は相変わらずの会話無視。英語は、入試や入社試験での単なる〝記憶テストの道具〟と化している。

元NHK英会話テレビ講師の松本道弘氏は「読み、書きばかりが重視され、聞く、話すの実用面が見落とされれば、英会話能力のない生徒や学生しか育たないのが当たり前。文部省や各大学は共通一次試験にヒアリングを即時出題するぐらいの英断をぜひ、やってほしい」と強調する。

高校入試にヒアリングを出題している公立高校は現在、四十七都道府県のうち二十八道県(五九・六%)。九州でも佐賀、長崎、大分、鹿児島の四県が採用し、宮崎県も今年から実施に踏み切る。しかし〝教育先進県〟を自認する福岡、熊本、山口三県はヒアリング導入に消極的な姿勢を示し、大きく立ち遅れた格好だ。また、入試英語にヒアリングを導入することも困難ではない」と指摘する。

久留米英語講習会の真崎良幸代表=第一経済大講師=は「文法や単語の暗記など〝技術面〟が中心の入試英語では、英語が苦痛になり、卒業するとすぐ忘れる」と現状を分析。田中睦・福島高教諭は「私立大学の入試英語には、特に超高度の単語知識がないと、解けない問題が目立ち、受験生のどんな能力をみようとするのか、首をひねりたくなる問題も多い。出題者の意識改革がなければ、事態は好転しないだろう」と話している。

日本の教科書や入試に出ている単語は、欧米人にさえ難解なものが多く、日本でいう基本的な単語千百五十語のうち、約二〇%は英国で使う基本二千語にも含まれていない単語。外国語テストなのに、難しすぎ、受験生をますます単語の猛烈暗記にかり立てれば、とても実用会話どころではないのが実態だ。

「日本は世界中で閉僕級を通じて最も英語の通じない国」と、ライシャワー元駐日大使は述べたが、この〝語学鎖国〟をもたらしたもう一つの要因は、英会話能力に欠ける教師である。

文部省派遣の「英語指導主事助手」として県下の中、高校の英語教師を指導したボニー・ウイルムズさん(米国)は「県下の中、高校の先生を対象に毎週、約二十人ずつを研修会で教えたが、私の話すことが教師たちはほとんど理解できず、彼らの言うこと(英会話)も私には意味がよく分かりませんでした」と語る。

福田昇八・熊本大学教授によると、全国的にみて中、高校の英語教師の八割以上が厳密には英語を話せない状態にある。会話軽視の姿勢を反省して、生きた英語を学ぶ先生たちが増えてはいるが「入試や授業時間の制限にはさまれ、生きた英語を教えるのは至難である」。福田教授は「教師が自己の会話力を高める一方、授業では少しでも会話を重視する工夫が大切」と、教師のいっそうの努力を説いている。

教師の質の向上を図るためには、熊本県が行った「集中訓練計画」(略称ITC)のように、大半の中、高校英語教師を再教育する長期計画が有効。県や市町村当局はもっと財政面で協力すべきだとの意見も多い。

入試や教師の質の問題に加え、英会話を学習する側にも再考の余地は多い。同時通訳やニュースキャスターで活躍中の国弘正雄さんは「外国語の勉強は、何らかの目的意識がなければ退屈極まりなく、根気も続かない」が持論。ESS英会話学院長の西田透さんは「恥の文化のせいか、下手な英語力を隠そうとして自らの進歩の芽をつむケースが目立つ」と、消極姿勢からの脱却を訴えている。外国語はうまく出来なくて当たり前なのである。

会話学習法では、会話を「電話」「天気」「スポーツ」など分野ごとに覚えるのも一つのやり方。これだと分野が広がるごとに、実力の向上ぶりがはっきり分かり、会話学習に励みがつく。また、外国人の友人をつくったり、カセットや英字新聞を利用するのも役立つ。英会話は「決して難しいものでなく、日常会話を平易な単語を使ってこなせるよう毎日、こつこつ努力を積み重ねることが肝要」と、戸田昭二・実践英語セミナー学院長は話している。

「語学に〝王道〟はない。要するに〝やる気〟がすべてを決する――と言ってもよい。そのためには個人の強い決意はもちろん、英語教育や教師の意識改革が急務である。行政当局や教師の反省を促すとともに、学習者の地道な努力を期待したい。

(おわり)


松本道弘さん


アラン・ブースさん


田中　睦さん


ウイルムズさん


真崎良幸さん


福田昇八さん


国弘正雄さん


戸田昭二さん